

270  
74  
2

明治十八年八月新彫

飯島半十郎著

# 幼稚園初步

版權  
所有

青海堂發兌

7081

幼稚園

幼稚園勿謂是么麼  
他日良材這裡多  
枝幹小時須直養

力佳園刀示

中寸文下三三通司

門 4  
號 1807  
卷 1

弘利園社  
口本...

# 大來拳曲可如何

## 敬字中村正直



早稲田大學  
藏書  
27.3.12

Handwritten text in cursive style (sōsho), consisting of approximately 12 vertical columns of characters.

力佳園切...

Handwritten text in a cursive script, likely a form of Japanese calligraphy (sōsho), consisting of approximately 12 lines of text.

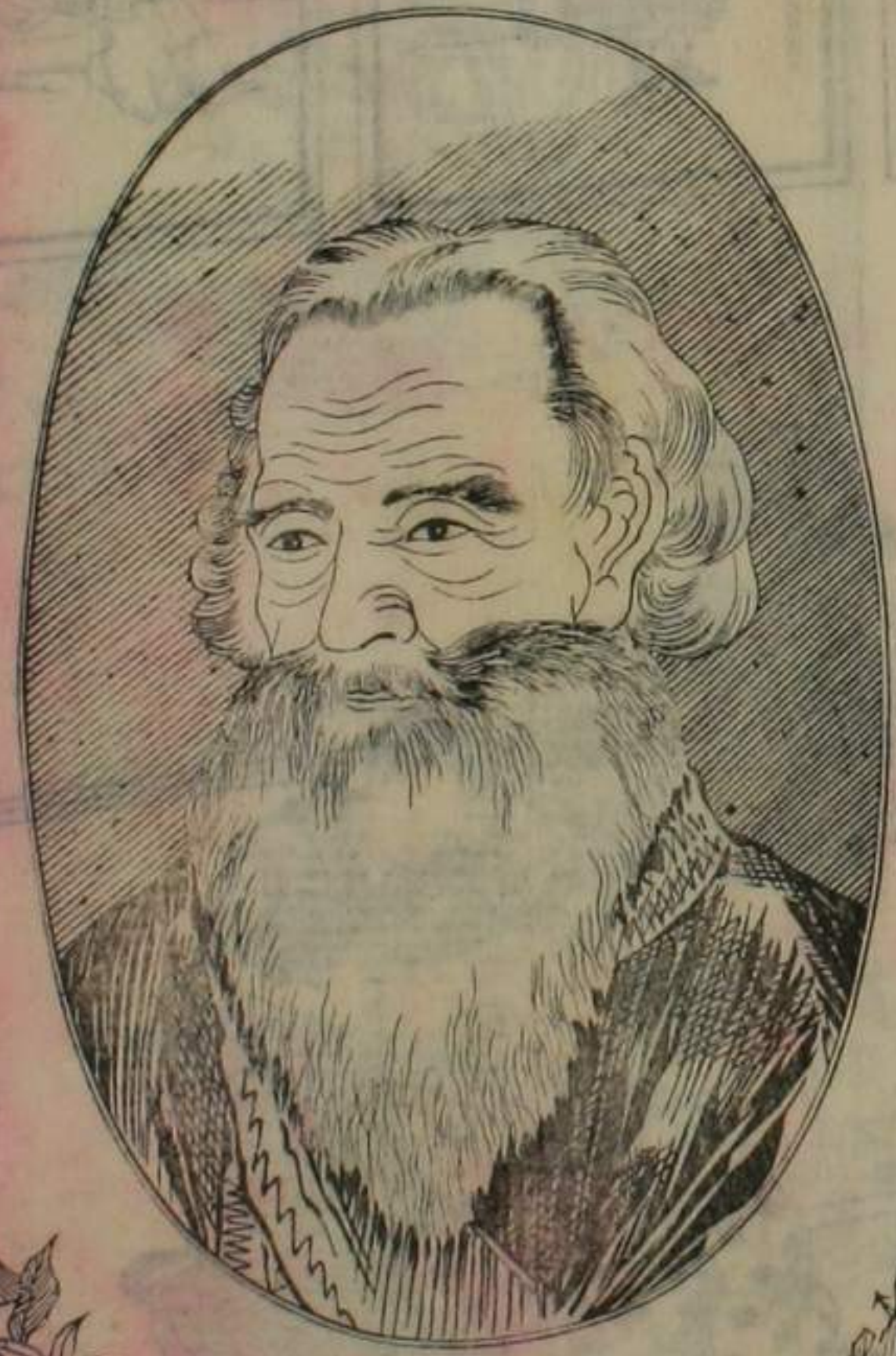
Handwritten text in a cursive script, likely a form of Japanese calligraphy (sōsho), consisting of approximately 12 lines of text.

幼稚園の教育は、  
 子どもの自然な発達を  
 促すことにあり、  
 知識の詰め込みは  
 必要ありません。  
 遊びを通して、  
 社会性を学び、  
 創造力を伸ばす  
 ことが大切です。  
 先生は、子どもの  
 成長を支援する  
 役割を担います。

尾

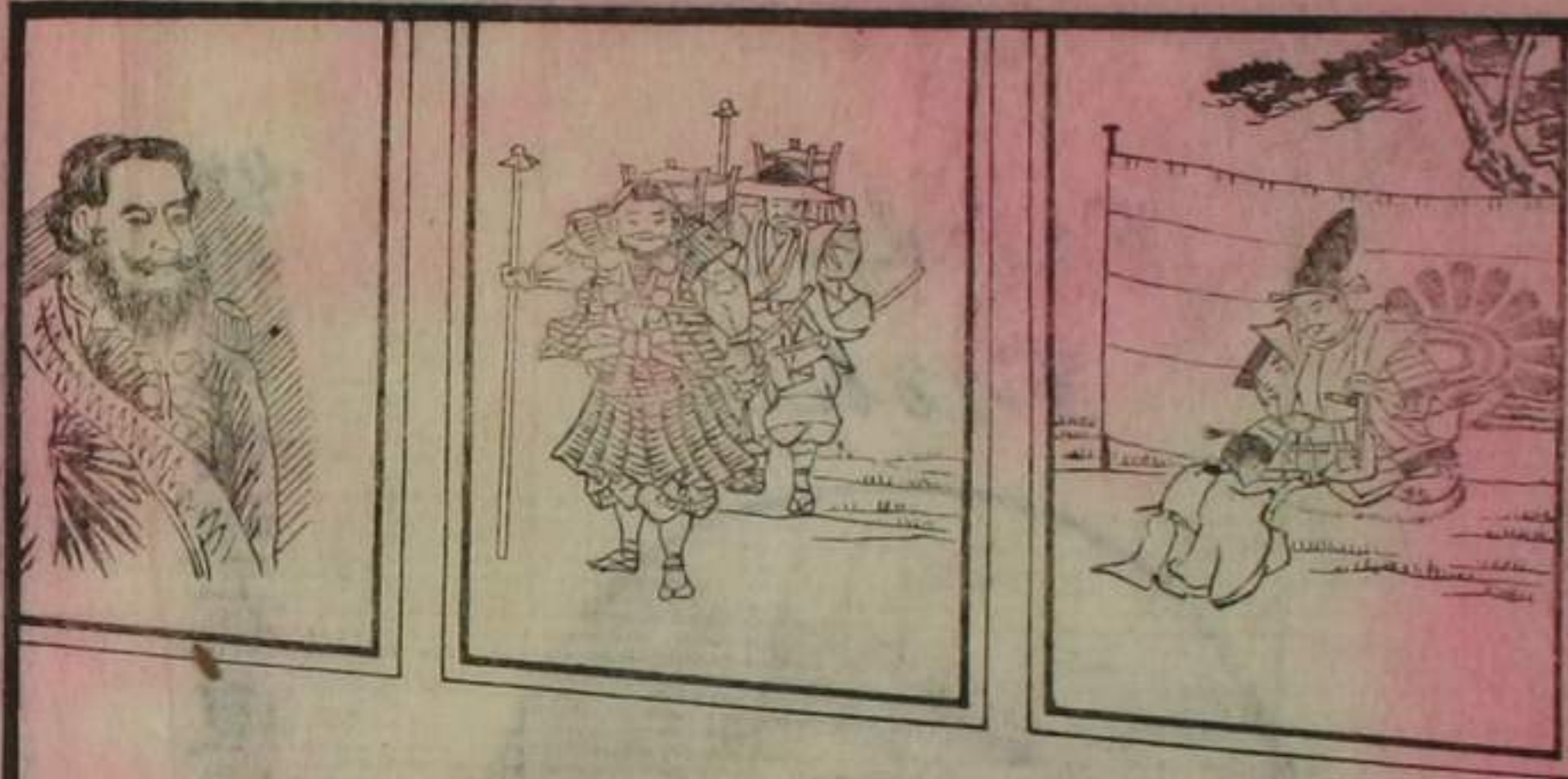
幼稚園始祖布禮倍爾氏之像

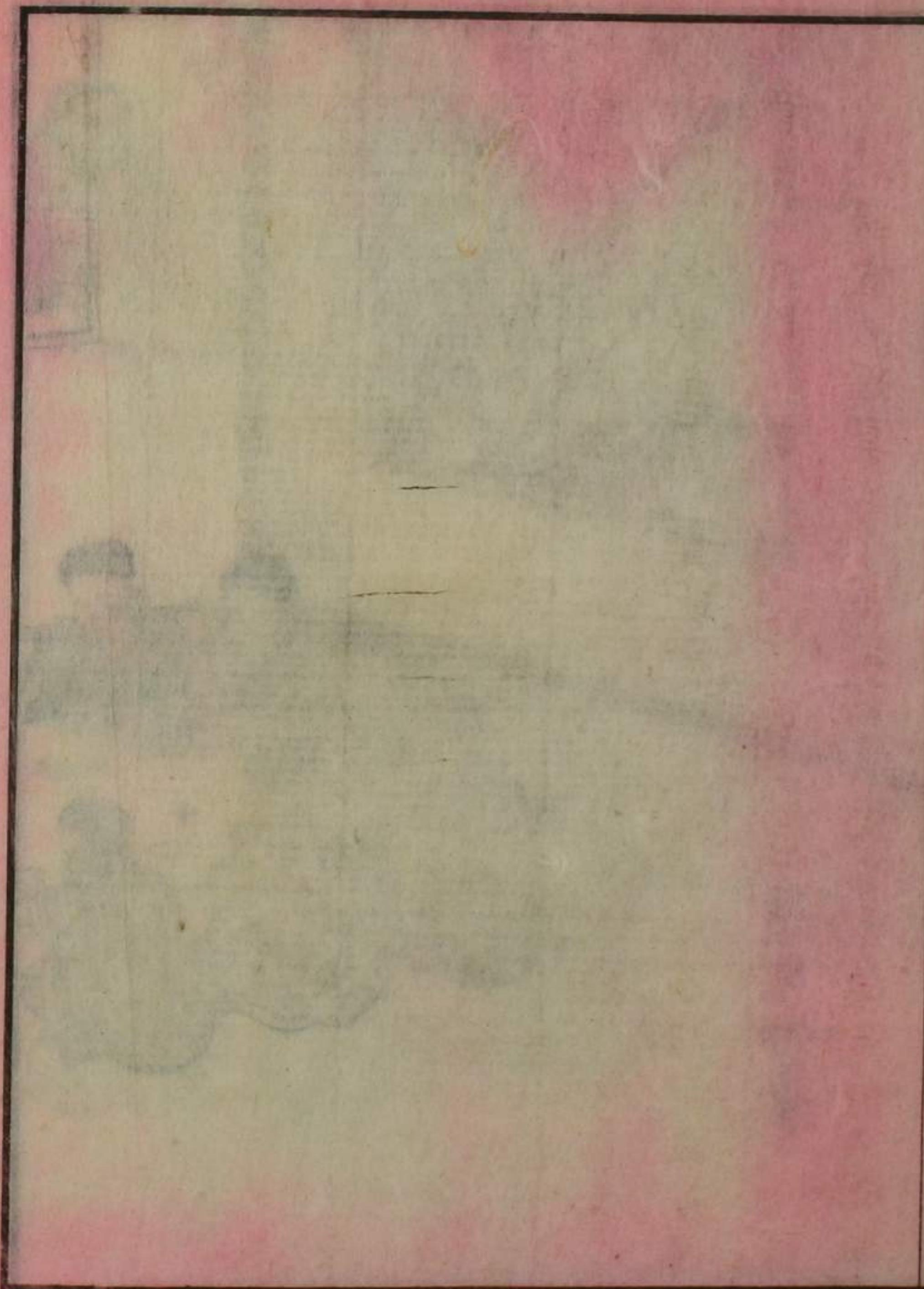
Friedrich Fröbel





學新竹書





幼稚園初歩

九例

一此の書四卷、幼稚保育の方法を載せ、其の中多くは歐米諸家の説に從ふが如し、若し其の玩具おもちゃの如き、或は我國在來のものを擧げて充つる者、容易に其を購求し得るを欲せざるが如し、

一書中載せる所、諸業の方法は、唯其の大略を擧げて示すもの、保母宜しく實地に就き、種々の方法を設け、保育せざるが如し、肝要あり、又諸玩具の如き書中載せる所の外、適宜の玩具あり、用ゐて妨がらぬ、唯危険の物あり

よひ風俗を齎せ、心性を害する物等、用ゐるゐるま  
一方今各地幼稚園の設ありと雖、世人未だ幼稚保育の  
肝要あるを知らず、教育に從事する學士と雖、或  
の論して幼稚園に、却て幼稚才能の發達を妨ぐるも  
のありといふ、是も大なるあやまりあり、予故に此の  
書を著し、世に幼稚園の設あるべきありざるを  
とを説き、又簡易なる幼稚保育の方法を説きて示せ  
るを、予の此の著あるに、實に教育に從事し、深く感む  
る所ありとあり、

明治十八年二月

著者 虚心識

幼稚園初歩

○ 目録

卷一

幼稚園の大意

保母の注意

細螺

雙六

智恵の板

組木



體操  
唱歌

卷二

人形

結法

包法

折物

切拔

色目

音話

卷三

物體

綴字

畫學

卷四

讀書

習字

算術

幼稚園初歩目錄終

幼稚園初歩卷一

○

幼稚園の大意

飯島半十郎 著



凡人とて子を愛せざるものありざるあり、故又人  
 皆我子の才智、他の群兒ぐんじに秀出しゅしゅつせんことを欲し、其の子  
 猶幼稚あるに自由の遊戯を禁じ、嚴則げんそくの教育に從事まつごとせ  
 しめんとも、あましく却て天稟てんれんの良能りやうのうを妨さまたぎ、教育の道みちに背  
 くものあり、何そ其の謬まちがなるの甚こきや、抑幼稚の遊戯  
 に自然の工藝こうぎおいて、教育に、即此の自然の工藝を擴充かくくわう  
 せしむるに過ぎざるあり、さすれば遊戯に就きて保育ほくおをあら

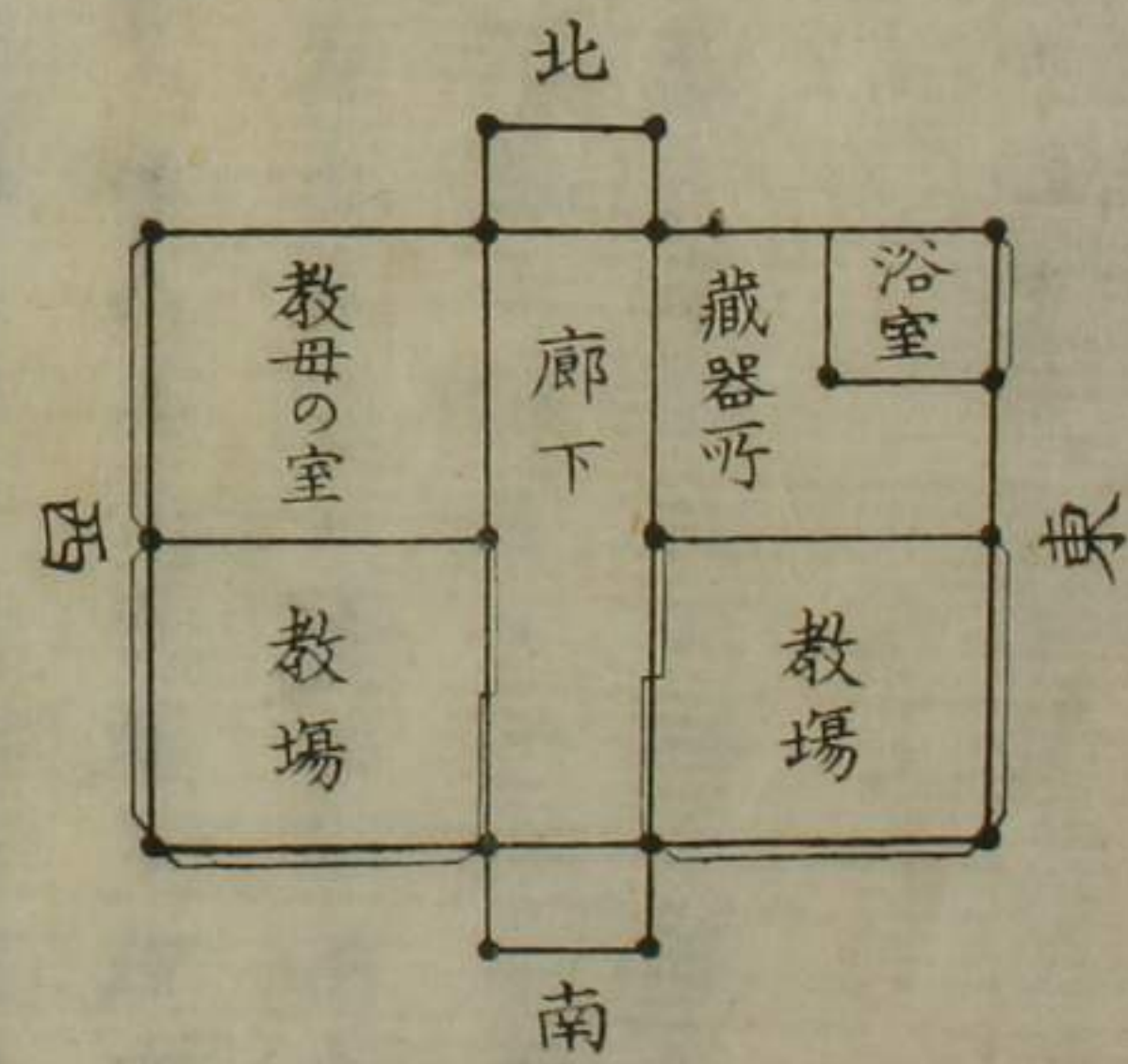
保育に就きて遊戯をおさしむるを、幼稚教育の要領  
を、この幼稚園の始祖、日耳曼人布禮倍爾氏の趣意も、  
亦蓋おと外からざるべし、既又遊戯に就きて保育を  
おとを知らば、幼稚園の設おくいあるべし、

幼稚園ハ、即幼稚を保育する所にして、歐米諸國皆其の  
設あり、歐米人おとを幼稚園と名つくるハ、幼稚を保育  
するハ、恰園中の草木を培養するに如くあるを以てお  
と、この園丁の草木を育養するや、先ッ苗畦を治め、種子  
を播き、其の發生の後不至リ蔓草を刈リ、虫害を除き、風  
雨霜雪の患を防ぎ、朝暮愛護して天然の性を養ひ、其の

一齊ニ生長するに及ひて、おとを他ニ移し終ニ向榮欣  
々として花を發し、葉を結ぶに至るあり、もし夫れ然ら  
むして發生の後直ニ生長せしめんおとを欲し、或ハ過  
量の肥料を施し、或ハ抜きておとを他ニ移すの如きは、  
却て生長を妨ぐるのこあり、遂ニ枯死せしむるおと  
往々おとあるなり、幼稚を保育する亦此の如く、慎まざ  
りあるべし、

凡幼稚園ハ、空氣清朗の地をとり、堂屋の築造極めて宏  
麗あるを要すべし、其の教場ハ、廣狹適宜おれとも大抵  
分ちて四室とおし、南面の二室を教場とし、東面の一室

を浴室及び藏器所と、西  
 面の一室を保母の室とせ  
 へ、即下圖の如く志ら  
 て場中の器具ハ、卓子、椅子、  
 敷物等あり、卓子の低く  
 て幅濶きものを要す、一卓  
 子ハ九十二人を座せしむ  
 へ、其の卓子の面の座み  
 當りし所ハ、一寸方形の線條  
 を畫し、假の定規とて幼



幼稚園略圖

稚諸工業をもち、その便に供せしむ、又椅子ハ、極めて低き  
 りのを要すへ、邦俗未と椅子ハ、慣とせしむ、あつて設あ  
 らざるも可なり、又敷物ハ、通常の疊表を用ふるも  
 適宜あるへ、其の他教場にて用ふる諸玩具及び石盤、  
 石筆、墨紙の類ハ、悉く自費を以て買へしむへ、  
 夫れ事故ありて、幼稚園を設くるおと能ハ、さきハ、家々  
 相議して、假し一二の客室或ハ近傍の寺院等を教場と  
 し、簡易の諸器具を供へ、以て幼稚を保育せしむへ、  
 幼稚ハ、自然親愛の情深くして、群遊を樂むものあり、故  
 ち必群集せしめて保育せしむへ、群集せしめて保育せしむ

へ、幼稚相競ひて自然天稟の才能を發達するものあり  
 世人或は一愛兒の爲め、一教師を聘し、幼稚の教育を  
 急進せしめんとする者あり、大なる謬あり、此の如く  
 て教育せし幼稚は、恰盆栽の樹の如く、遂は天然の美花  
 を發するおと能はず、天然の美果を結ぶ事能はず  
 且、況棟梁の材とあるに於いて、或は深く戒むべし、  
 既は幼稚園あるに、おとこの保育をおも、保母あくる、ある  
 へりとも、保母を撰ぶおと甚難し、老實ありて能く幼稚  
 を愛し、且學術に富める者即可おととも、此の如き者の  
 蓋今日容易に得るおと能はずあり、さして、從來幼稚

を保育するに熟達し、少く文字を解するものあり  
 可き、其の良保母の如き、宜しく他日を俟ち  
 ておとを得ん事を要すべし、

若夫と幼稚園を設くるおと能はず、又保母を傭ふおと  
 能はず、又家々相謀りて教場を置くおと能はず、慈  
 母たる者宜しく、此の書を讀み、幼稚保育の大略を知り、  
 幼稚を群遊せしめ、其の遊戯中より導きて教育を施す  
 要すべし、嗚呼子を愛するに、教ふるに、おとなきあり、教  
 ふるに、遊戯中より導くおとなきあり、

保母の注意

一幼稚教場に來らば、先づ一列にあらばねま、順次其の姓名年齢等を言ひしめ、保母一々其名を帳簿に記載し、時として其の父兄の名および郡區番地等を言ひしめ、おのづか後順次に座位に就るをわづし、一幼稚を三等に分ち、三歳四歳を三等とし、五歳六歳を二等とし、七歳を一等とし、おのづか其の業も亦等級によりて、差異あるべし、  
 但毎等の幼稚男女を分ち、性質を撰ひ、六人或は十二人を一組とし、其の業に就らしむべし、時として其の長

幼相混せしめ、又長をして幼を助らしむるよしあるべし、おと肝要あり、  
 一幼稚諸業をおもひ當り、倦怠の念を生せしむるよしあるべし、おと其の業に飽きて少く厭ふ意あるを知らし、直に他の業をおさしむべし、その小學教則の如く、何時間の何科と厳に規則を設くるよし宜し、そのよし、さりとて屢業を換ふるも亦宜し、そのよし、只遊戯業中知らしむ、時間を消し、昏暮に至るを忘るよし、おむるを要し、

一幼稚を保育するに、固より愛憎あきを要す、さきど人情稍あき、愛憎の念を生し易きものあき、保母とする者、確乎として堅く公平の二字を守り、決して偏頗の措置をあきへしむ。

一保母たる者、決して幼稚を欺くへしむ、假令啼泣するあきあるも、あきを慰むるに與ふる能はざる物を與へんとしむ、爲を辱しむるあきをなすへしあきいふしむるに、幼稚を欺き、幼稚亦保母を欺き、遂に他人を欺くに至るあり、最慎むべし、  
一幼稚も、憤怒を發し、業をあきする時、組合を外し

ねき憤怒の晴るをもちて、後に入らば、あきさ  
ま、他の幼稚の業を妨ぐるあき、

一幼稚も、相争ふあきあり、保母能く長幼の序及び父母の遺体を毀傷せしむるあきあり、詳細に言ひ聽らせ、事理を審判し、決して偏頗の措置をあきへしむるに、

一幼稚をして各々文画一を所持せしめ、其の所有の諸器具を藏めしめ、日々出たしてあきを藏むるあきを教ふべし、物品を保護して所藏するに、あきあき園中肝要の教課あきあり、

一此書載る所の諸業ハ只其の大略を記する所の  
して其の保育の詳細に至るて、固より實地ニ就き  
適宜の措置をおとすと肝要あり、米人の説ハ幼稚園  
の教授書を見て、幼稚を保育せんとするハ、恰字書中  
載る所の製造法を閲し、自時辰儀を造るを得べし  
とありふの如しと、宜なる哉言や、

幼稚園教育の諸業ハ、只其の大略を記する所の  
して其の保育の詳細に至るて、固より實地ニ就き  
適宜の措置をおとすと肝要あり、米人の説ハ幼稚園  
の教授書を見て、幼稚を保育せんとするハ、恰字書中  
載る所の製造法を閲し、自時辰儀を造るを得べし  
とありふの如しと、宜なる哉言や、

細螺

細螺撒、細螺彈、細螺掬の遊戯ハ、幼稚ニ數目を教ふる  
初歩ありて、且掌中工藝をおとの階梯を、此の遊戯  
の方法ハ、能く人の知る所あるべし、今其の大略をあけ  
て示すと、左の如し、

細螺撒

幼稚の出席の順序ニ從ひ、卓子の周邊ニ圍座せしめ、細  
螺數百を中央ニおき、保母先ツ其の中より最大なる細  
螺二粒を撰ひ出し、假ニおきを玉と名づる、さて細螺を  
一ツニツ三ツ四ツ五ツ六ツ七ツ八ツ九ツ十と朗聲ニ



唱へておきを算へ、左傍より順次又配り、或ハニツ宛算  
 へ、一ツニツ三ツ四ツ五ツと唱へ、左傍より配り、時と  
 ころ三ツ宛五ツ算へ、又四ツ宛五ツ算へおととて終り  
 九々法を知るに至らむべし、かゝりて數百の細螺を  
 當分は配り盡し、保母幼稚は命して、各々一或ハ二三を  
 卓子の中央より出さしめ、その最大の細螺即玉二粒を  
 掌中におき、先ツ細螺の裏表を示し、さして撒きて裏ニツ  
 そろひたるを、表ニツ揃ひたるを、おきを優等と裏一  
 ツ表一ツたるを劣等と定むるよしを言ひ聽かせ、左傍  
 より順次又撒りむべし、撒きて優等あるが、先きお各

細螺撒の圖



々の出したる中央の細螺を  
 領取し、又一或ハ二三を中央  
 より出さしめ、再び優等おき  
 へ、おきを領取し、劣等たるを、  
 玉を次座の幼稚におくを、撒  
 りむべし、おきを撒くの法  
 は、先ツ左手を以てし、次き  
 右手を以てすべし、順次お撒  
 くおと六回或ハ十二回お  
 て、各自は細螺の數を算へさ

せ、其の中多數あるを第一等とし、多數を得るも算數を失はる者へあきを第二等とし、三等四等員數よりあきを定め、又等級より座位を定むべし、又一法細螺を中央に積みあき、優等者より數粒を領取し、劣等者より、玉を次座より數回より員數を算ふるも亦可あり、

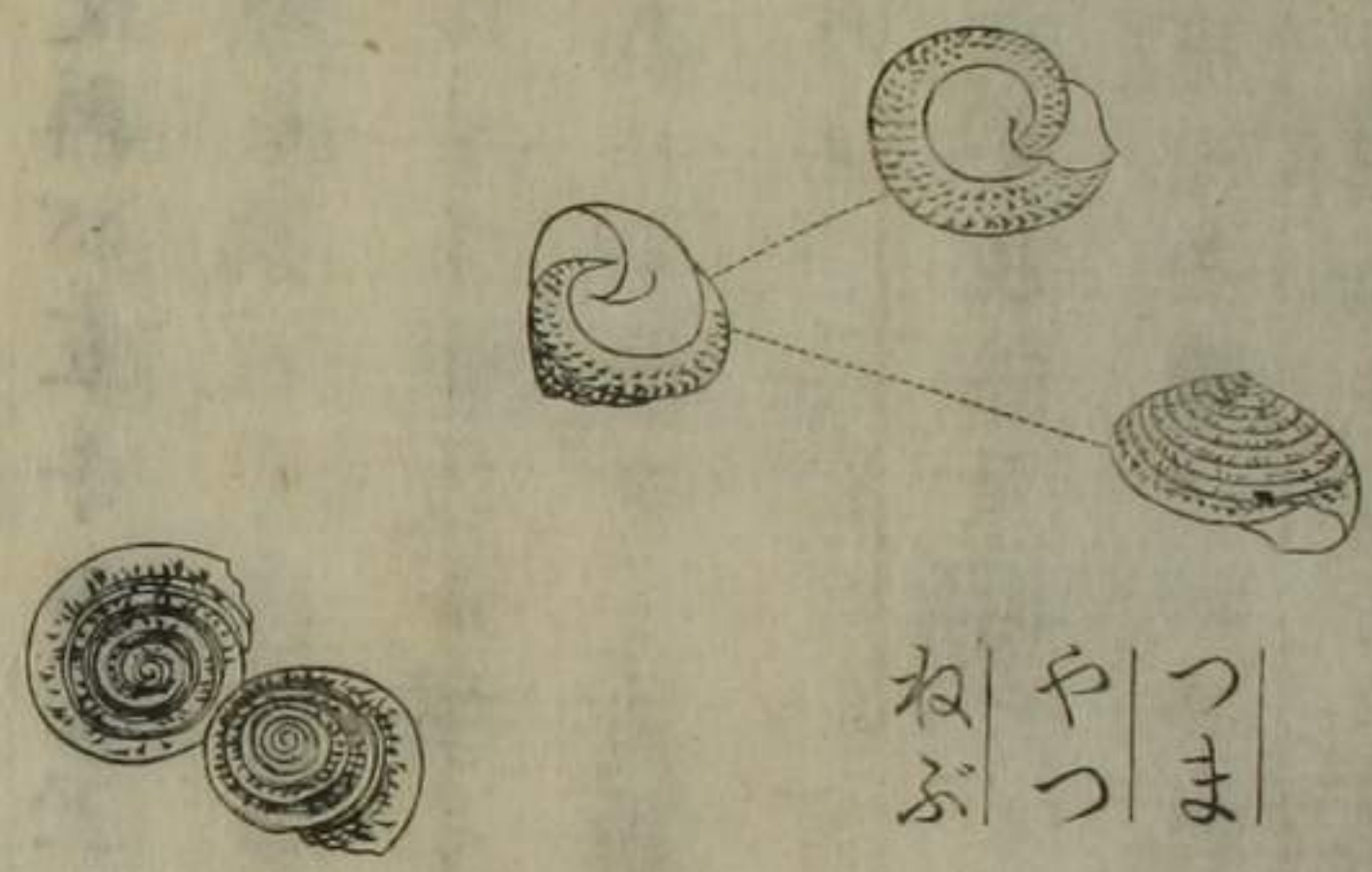
### 細螺彈

細螺彈へ、細螺を算へて分配する處と前の如くして、最大の玉を撰び、右手にてあきを撒き、其の表裏に構ひ、右手の拇指と食指をりて、甲を彈きしめ、

中より其の賞として、中央より出る細螺數粒を領取し、又再び左手にて玉を撒き、あきを彈き、中より中央の細螺を領取し、中らさば玉を次座より取るべし、此の如くして順次に彈く處と六回或は十二回より、各自より其の領取せし員數を算へ、等級を定むる處と前法の如くをべし、

又細螺數粒を撒布して彈く一法あり、幼稚や前法より熱達せむ、更し此の法を教ふべし、先し細螺を分配する處と前法の如くし、各々一或は二三を出さしめ、あきを拾ひて皆掌中よりあき、さて握りて卓子の中央よりあき、

細螺彈の圖



順次は弾き、甲乙相中らゝめ  
 一粒ツ、おとを取、撒きた  
 る細螺皆弾き盡さば更は各  
 々より一或ハ二三をいざさ  
 ゝめ、左手をりておとを撒き、  
 弾きて取るべし、もく夫れ中  
 らさまば残りの細螺を拾ひ、  
 あつめて、次座はかふるべし、  
 此の如く順次は弾くおと六  
 回或ハ十二回あつて、其の得

る所の細螺を算ふるおと前法の如し、此の一法中は  
 規則數條あり撒きて相重かりたるりの、おとをねぶと  
 いふ、ねぶハニツ共はおとを拾ひ、再び撒きの疎ある所  
 は撒くべし、又彈おんとして指頭他の細螺は觸るゝも  
 の、おれをつまとりふ、つまの過おま、其の罰として本  
 人より二三粒の細螺を出さしめ、撒布中はねおむ  
 べし、又甲を弾きて乙は中り、丙は觸るゝりの、おとをや  
 つとりふ、やつハ最嫌ふ所おま、弾きて中らざると同  
 しく、細螺をあつめて次座はかふるべし、

細螺掬

細螺掬ひ、細螺を算へて分配せよとせ、及び撒くおと前  
法の如く、さて大ある蛤貝を左手又ハ右手よりち、お  
とよて掬ひ取るあり、おの業おもやつ、つまねぶ、おどの  
制禁あり、制禁を犯もの、又ハ掬ひあやまつおとあまど、  
蛤貝を次座はおらるるべし、其の他大抵前と同じ、  
此の他種々の方法あまども略せ、保母宜しく實地を就  
き、適宜の方法を設くべし、

雙六

雙六の戲ハ、誰も能く知る所あり、其の種類さまざま  
あまども、幼稚の爲め、最益あるハ、道中雙六は過き  
たるハあし、蓋古人童蒙をして地理を學ばしむるの  
一端とせしものあり、今古人の意を繼ぎ、皇國巡回  
雙六、皇國航海雙六、萬國物産雙六等を製し、もて幼稚  
園の一戯具とあし、幼稚をして地理、物産等の大略を  
知らしめんことを欲せしものあり、

幼稚を團座せしめ、保母先ッ皇國巡回雙六を披き、あま  
ハ皇國內、人口三万以上の土地を巡回せしむる雙六あり、先

東京を出て静岡、名古屋より順回して、弘前、箱館に至り横濱に歸りて止む、其の巡回して早く横濱に至るものを第一の勝利と定むるよしを言ひ聴かせ、さて幼稚をして各々名刺を出ださしめ、おとを東京振出しの所におき、細螺六粒を握り其の表面を數目と定め、おとを撒き表六あれば、名刺を取りて一二三四五六と算へて神戸に至り、一あれば、静岡に至り、もし裏六あれば、東京に滞在し名刺を其のうちにねくあり、此の如くして左傍より順次におとを撒き、競争して箱館に至り横濱に歸るおと、此の際、保母の幼稚の問ひんとする意を迎へ

て明了に繪解をあそびと肝要あり、今其の大略を擧げて、示を去と左の如く、

皇國巡回雙六

長將	藤原	進	兵衛	東京振出し
熊本	弘前	駿	敦賀	静岡
高松	秋田	上り	福井	名古屋
徳島	島	横濱	富山	京都
長門	米澤	新潟	金澤	大坂
萩	廣島	岡山	神戸	野

○東京の三府の一ふして、其の繁華あるの、東洋第一と稱せらる、もと江戸と云ひし、明治元年皇居を定めらき、始めて東京と稱せ、

○静岡の、我國第一の高山と稱せらる富士の南面ある駿河の國はあり、東京を距るおと、九四十七里、

○名古屋の、三府に次きたる繁華地ふして、尾張の國はあり、東京を距るおと、九十九里余、其の舊城の金の鯨に能く人の知る所あり、

○京都の、三府の一ふして山水秀靈の地あり、延暦以來の帝都ありし、今上皇帝に至り、東京は遷り給ふ、東

京を距るおと、百三十一里余、山城の國はあり、

○大坂の、三府の一ふして、古來商賈輻輳運輸至便の地と稱せらる、攝津の國はあり、東京を距るおと、九百四十四里余、

○堺の、古昔外國の互市場とて、和泉の國はあり、東京を距るおと、九百四十七里余、

○神戸の、外國互市場五港の一ふして、港内水深く繫泊至りて便あり、攝津の國はあり、東京を距るおと、九百五十四里、此の地は汽車の設あり、大坂、京都を経て近江、美濃に至るべし、

○岡山ハ備前の國ニありて東京を距る去と、九百八十  
六里、運漕便利の稱あり、

○廣島ハ安藝の國ニあり、山陽第一の都會ありて、其の  
傍ちる巖嶋ハ我國三景の一あり、三景ハ陸前の松島、  
丹後の天の橋立、及び此の地ちるを、東京を距る去と、九  
二百三十三里余、

○萩ハ長門の國ニあり、東京を距る去と九百七十里  
余、もや毛利氏の封土とて、東京を距る去と九百四十

○和歌山ハ南海第一の都會ありて、紀伊の國ニあり、東  
京を距る去と、九百六十一里余、其の傍の和歌の浦ハ、

三景ニ次ちる美景の地あり、

○徳島ハ和歌山ニ次ける都會ありて、阿波の國ニあり、  
東京を距る去と、九百三十一里余、藍を産ちる多し、

○高松ハ讃岐の國ニあり、東京を距る去と、九百八十五  
里余、其の傍七八里の所ニ、金比羅神社あり、參詣ちる  
者、常ニ多し、

○熊本ハ有名の都會ありて、肥後の國ニあり、東京を距  
る去と、九百三十五里余、城址あり、今鎮臺の營所た  
り、明治十年西南の役ニ、西郷隆盛來り攻め、抜く去と  
能ハむして、敗ち歸る、

○長岑ハ、五港の一ホクテ肥前の國ニあり、寛永年間ヨ  
シ支那荷蘭ト貿易セシ舊市場あり、東京を距るホト、  
九三百四十四里余、

○鹿兒島ハ、薩摩の國ニあり、東京を距るホト、九三百八  
十九里余、ホト鳴津氏の封土ナリ、

○鳥取ハ、山陰著名の都會ホクテ因幡の國ニあり、東京  
を距るホト九百九十九里余、

○松江ハ、出雲の國ニあり、東京を距るホト、九二百三  
十二里余、此の地ハ湖あり、宍道といフ、近江の琵琶湖  
ニ次ける大湖ナリ、湖中舟楫の便多シ、

○敦賀ハ、越前の國ニあり、海港ホクテ賈船輻輳ニ東京  
を距るホト、九百四十有余里、

○福井ハ、越前第一の都會ホクテ、運輸の便多シ、東京を  
距るホト九百四十一里余、

○富山ハ、越中の國ニあり、一都會あり、東京を距るホト  
九百十里余、

○金澤ハ、加賀第一の都會ホクテ、ホト前田氏の封土ナ  
リ、東京を距るホト、九百二十七里余、其の繁華あるハ、  
尾張の名古屋ニ次ク、

○新瀉ハ、五港の一ホクテ越後の國ニあり、運輸極めて



便かきとも、港内水浅くして、巨船を繋ぐと能はず、  
東京を距るおと、九八十九里余、

○米澤ハ、羽前の國はありて、山間の一都會あり、東京を  
距るおと、九八十二里余、

○仙臺ハ、加賀の金澤尾張の名古屋は次ぎたる繁華の  
一都會あり、伊達氏の封土とて、陸前の國はあり、  
東京を距るおと、九九十二里余、其の傍ある松島灣ハ、  
三景の一なり、實は美景の境なり、

○秋田ハ、羽後の國はあり、東京を距るおと、九百四十九  
里余、もと佐竹氏の封土とて、秋田欸冬、其の名高し、

○弘前ハ陸奥の國の一都會なり、東京を距るおと、九  
百九十一里余、

○箱館ハ、五港の一なり、渡島の國はあり、港内水深く  
して、碇泊頗便あり、東京を距るおと、九二百廿九里余、  
鮭、鱒、昆布、海鼠等産出多し、

○横濱ハ、五港中繁華第一の互市場あり、港内水深く  
て、歐米諸國の賈船、常は輻輳せり、武藏の國はありて、  
東京を距るおと、九八里余、

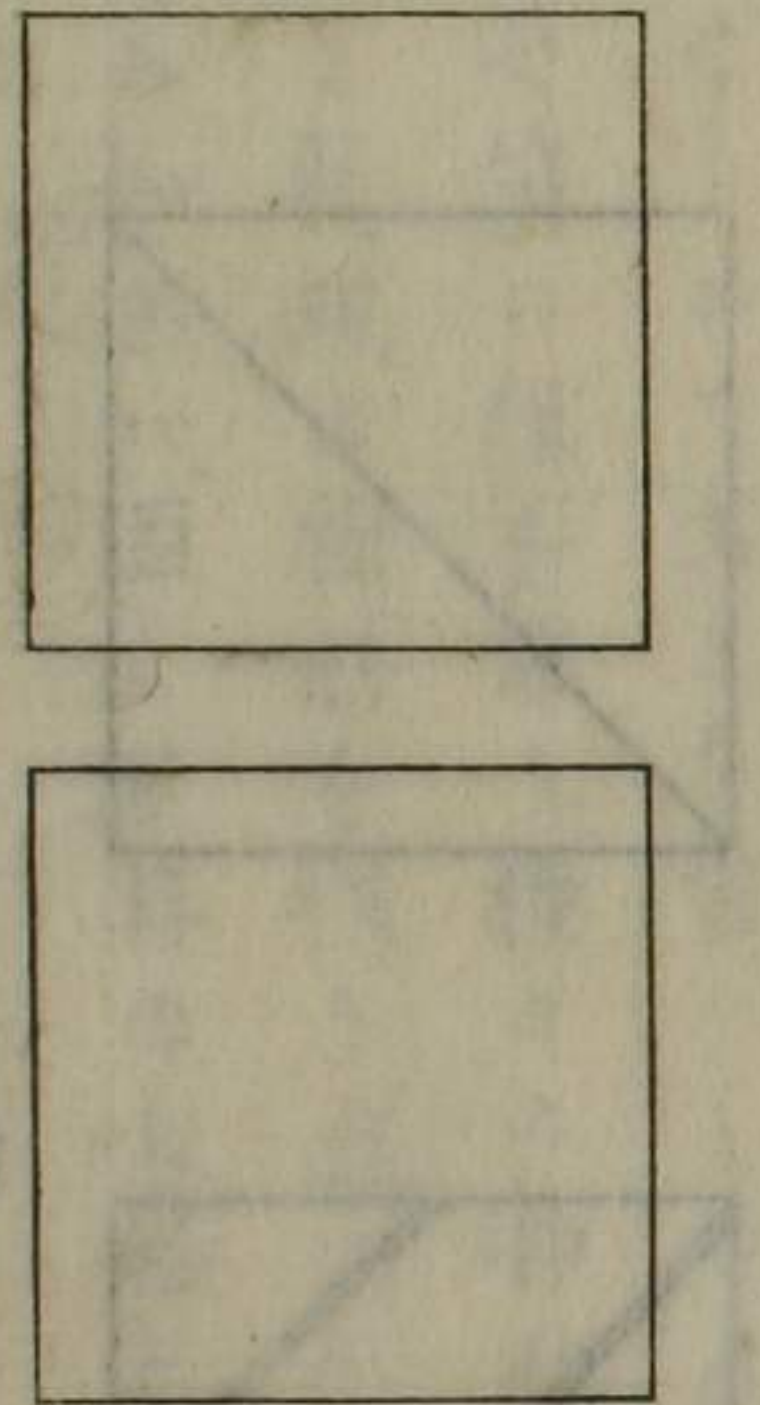
東京より右の各地を巡回し、箱館に至り、汽船は搭し、横  
濱に歸りて止む、此の他、皇國航海雙六、萬國物産雙六等

の繪解ハ略モ此の諸雙六の繪解ハ他日一小冊子と  
シ、雙六を副へ各書肆におきて發賣せしむ。

○此の諸雙六の繪解ハ他日一小冊子とシ、雙六を副へ各書肆におきて發賣せしむ。○此の諸雙六の繪解ハ他日一小冊子とシ、雙六を副へ各書肆におきて發賣せしむ。○此の諸雙六の繪解ハ他日一小冊子とシ、雙六を副へ各書肆におきて發賣せしむ。

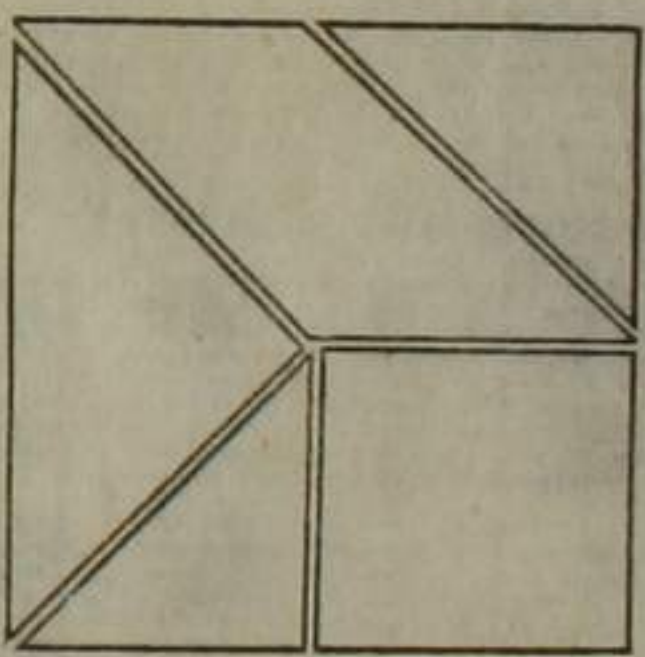
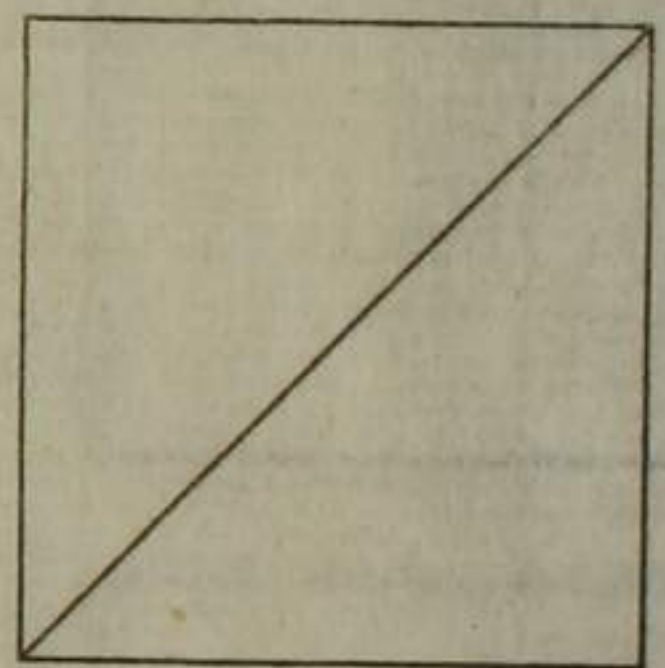
智惠の板

此の遊戯ハ幼稚をして、諸物の形狀を想像せしむる  
を要ス、即工學、画學の階梯ナリ、支那の發明ス  
テ、闘智器と稱ス、西説ハ、佛帝拿破崙の發明セシ遊  
戯具ありといフ、我國も古くより傳へてあり、



今ハ殆絶へぬ予因りて  
新ニ製シテ幼稚園の一  
具トシ、  
幼稚を團座せしめ、保母  
先ツ上の二ツの正方形

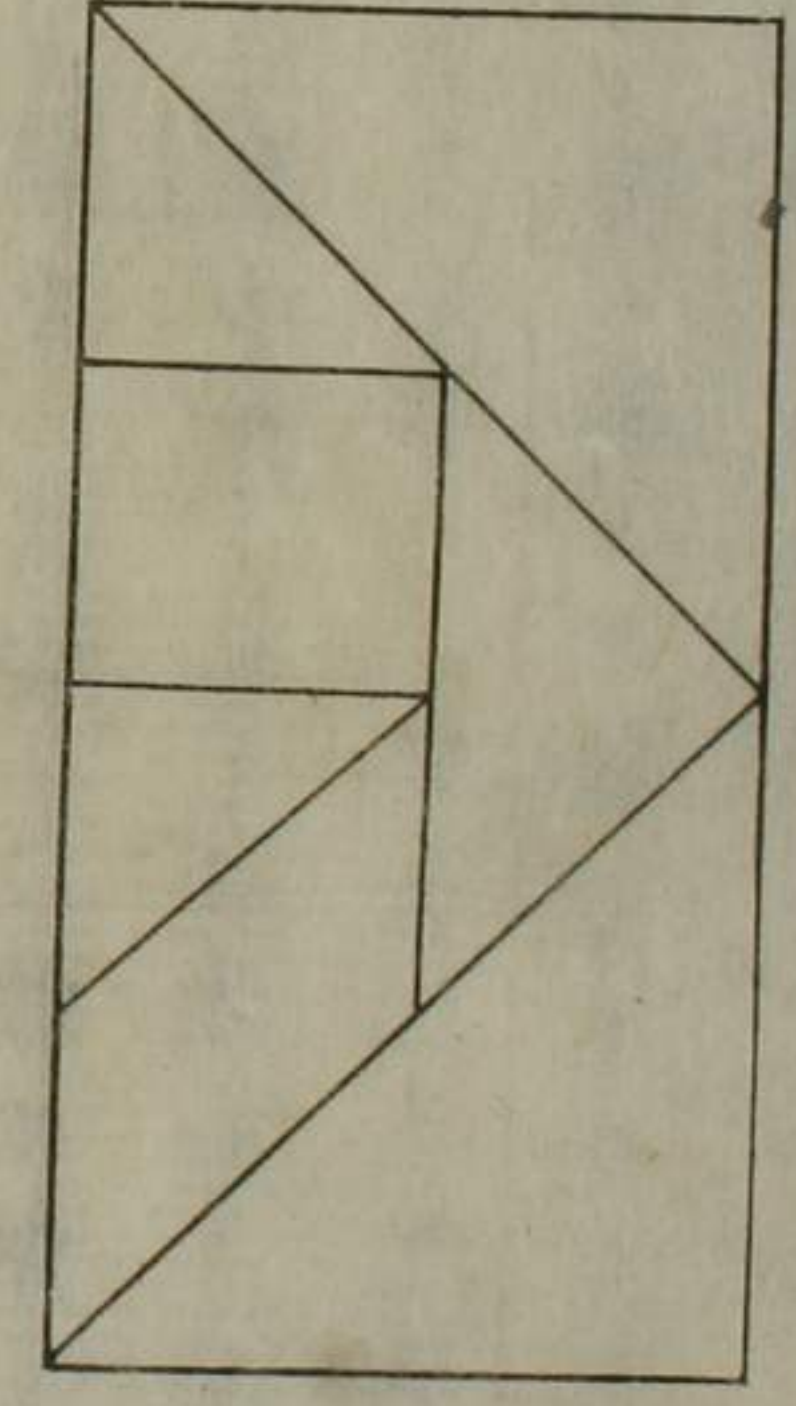
二枚を示し、さておとを離せば二箇の三角形とある、又



一枚をもちて五箇とあり、三角形三箇、不等三角形一箇、四角形一箇とある、左圖の如く、おの七箇の板をめて組ミ合せ、下圖の如く諸陶器式、諸建築式、及び諸人物式、諸動物式等を作るおとを説きある、先ッ諸の物形を組ミ合せ、さておまへ何と似たるやと問ひ、皿あり、壺あり、

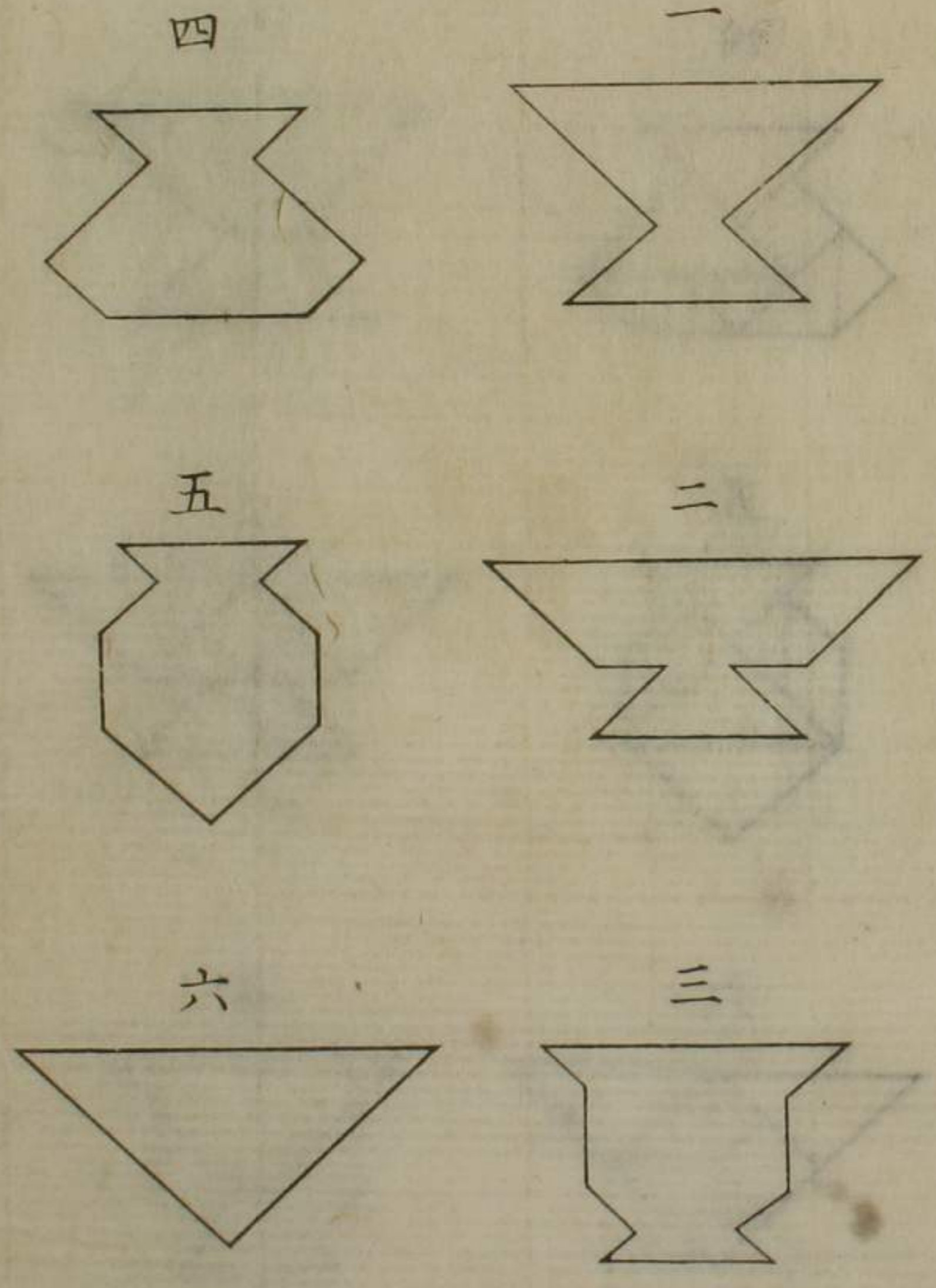
瓶あり、杯あり、天神のお宮あり、庫あり、時計臺あり、おまへ橋又似たり、おまへ支那人又似たり、おまへ婦人又似たり、行く又似たり、座するに似たり、跳るに似たり、船小似たり、船座するに似たり、鵝の如く、鶏の如く、鷹の如く、魚の如く、獸の如くおと、幼稚をしと種々の想像を生ぜしめておとを言ひしめ、おあしと後又幼稚をしと自七箇の板を取り、種々の物形を作らおむべし、幼稚の、妙又新規の物形を作り出さおりのあり、下圖又載せる所の如き、固よ其の大略あり、

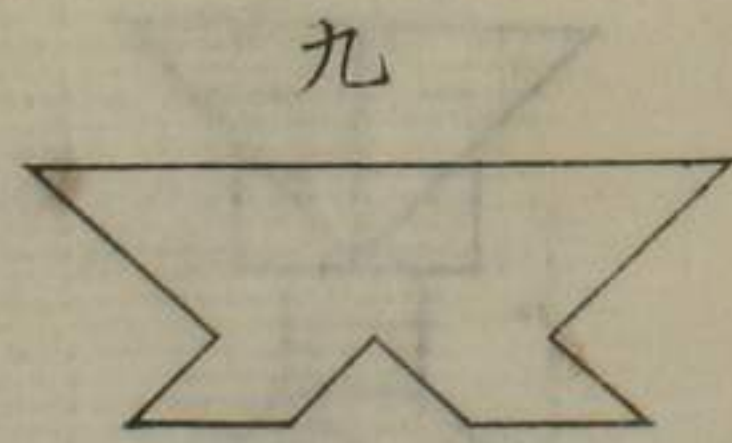
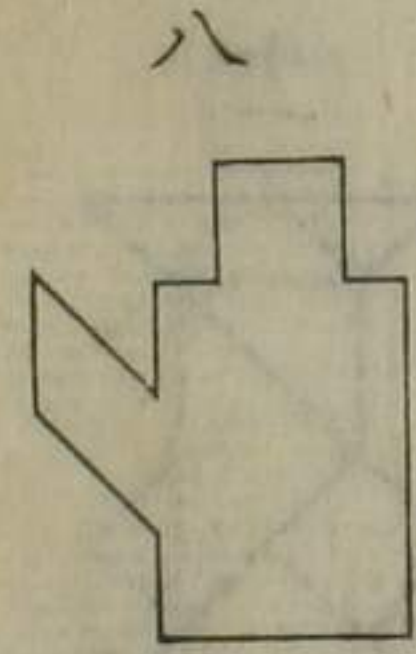
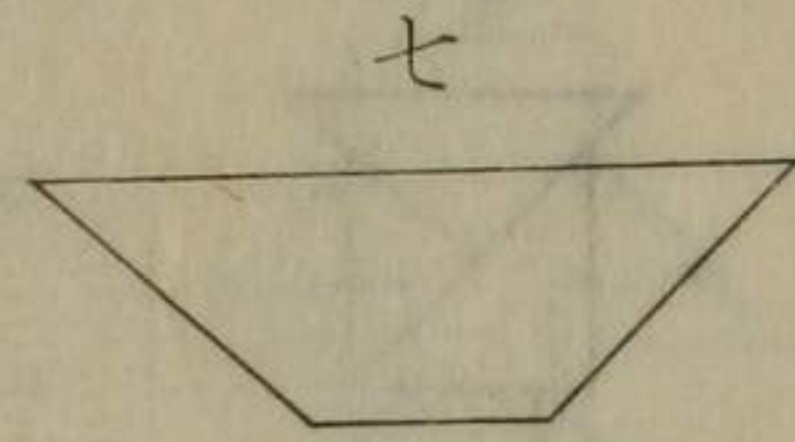
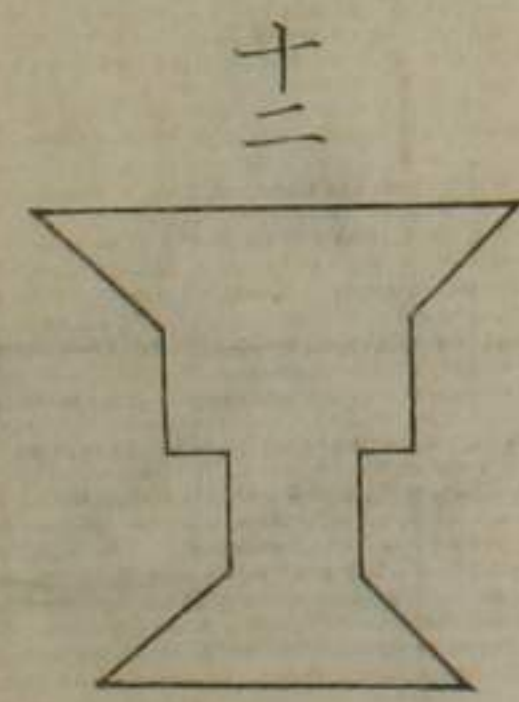
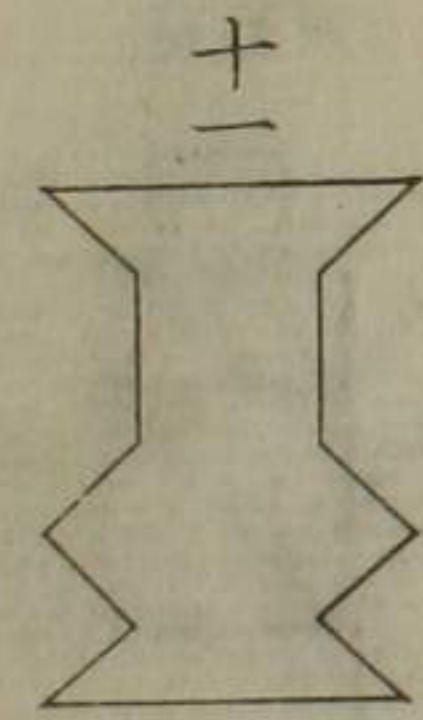
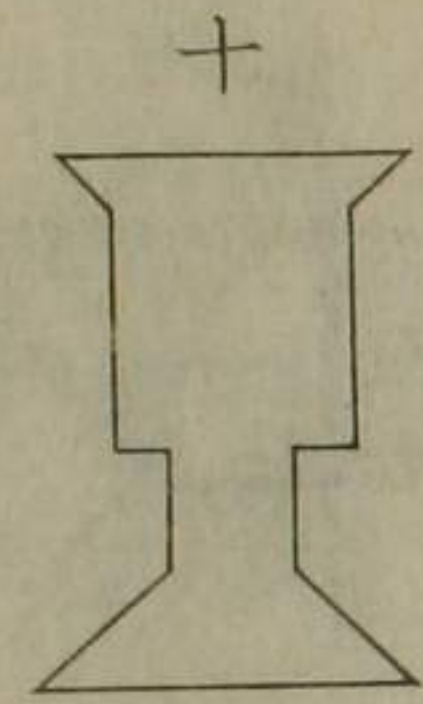
智恵の板割合



板の櫻又の厚朴ほうのきかど宜し、厚さの一分又過くべ  
うぐい、他日製して各書肆におきて、發賣せしむ  
べし、

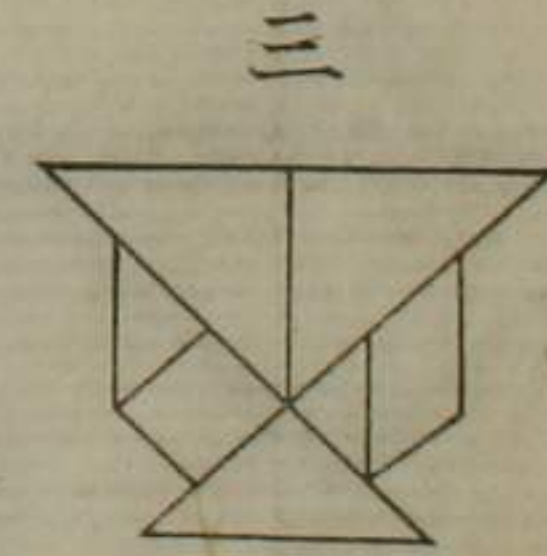
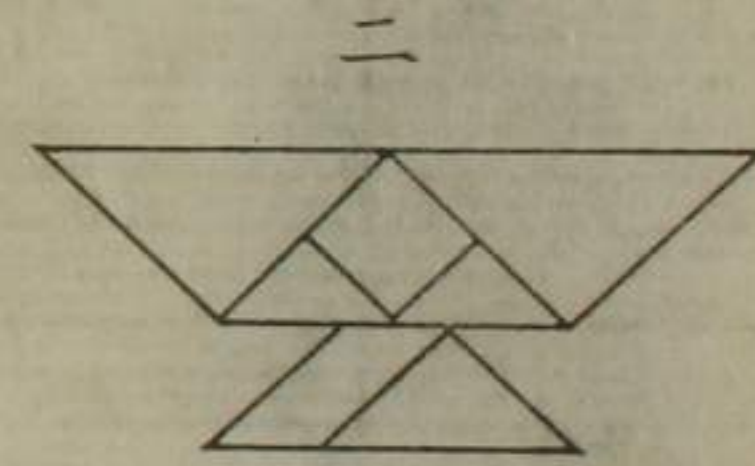
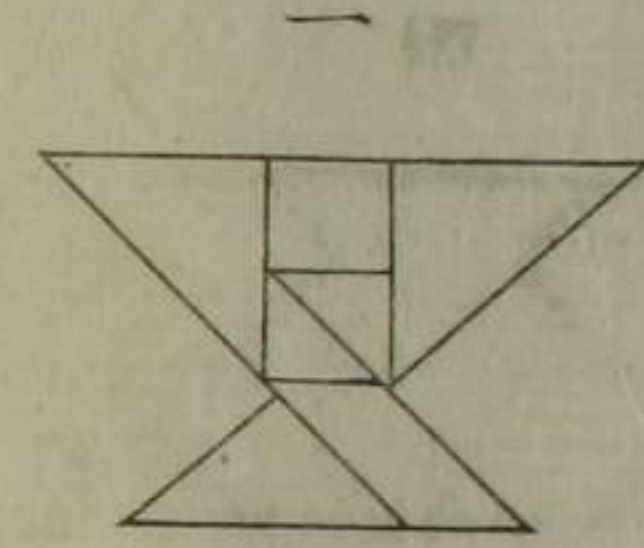
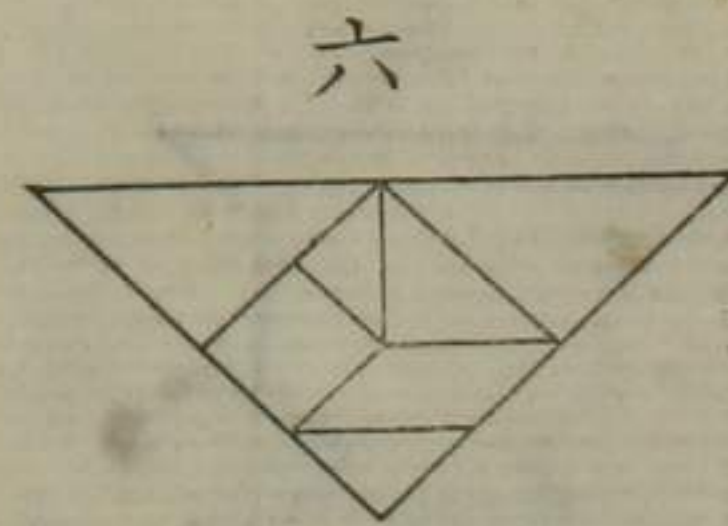
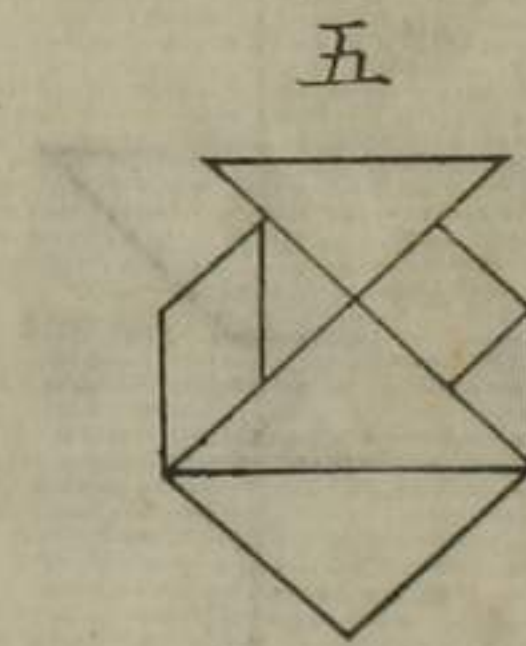
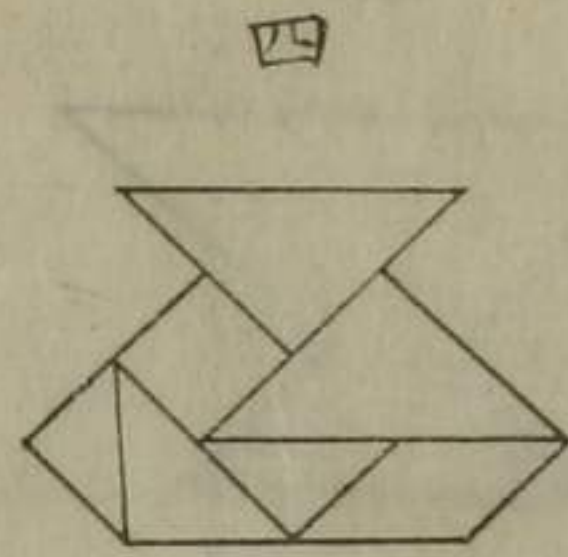
諸陶器類式



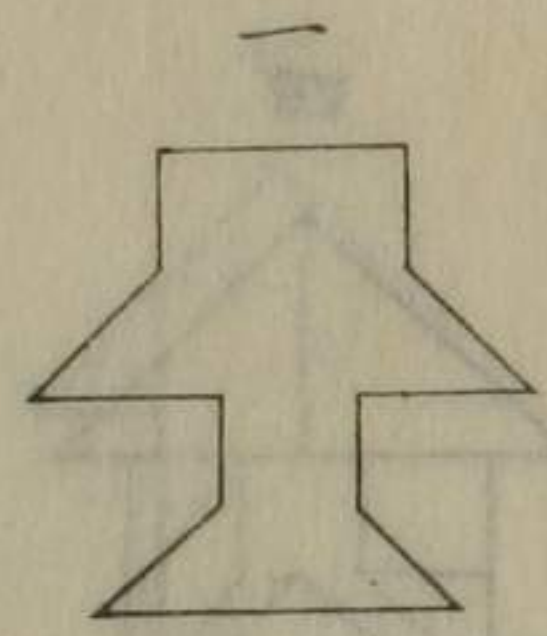


諸器式

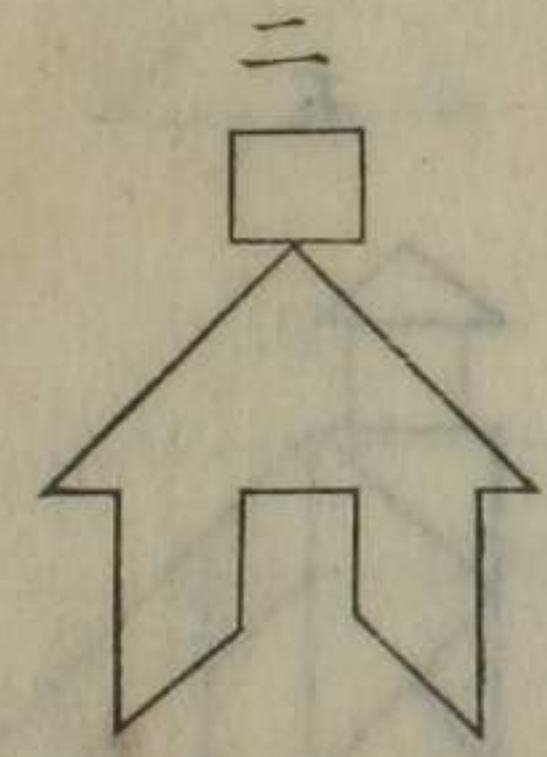
諸器式



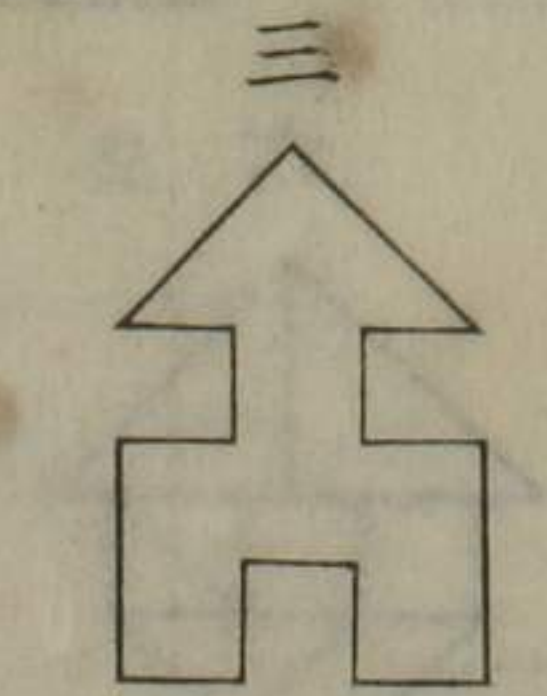
諸建築式



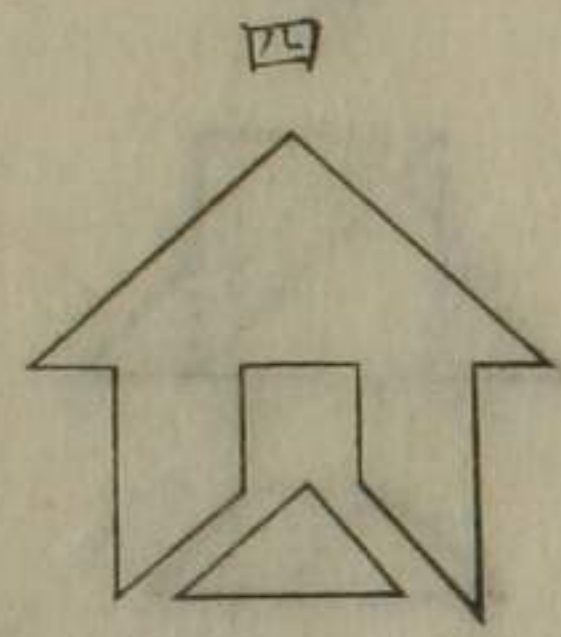
一



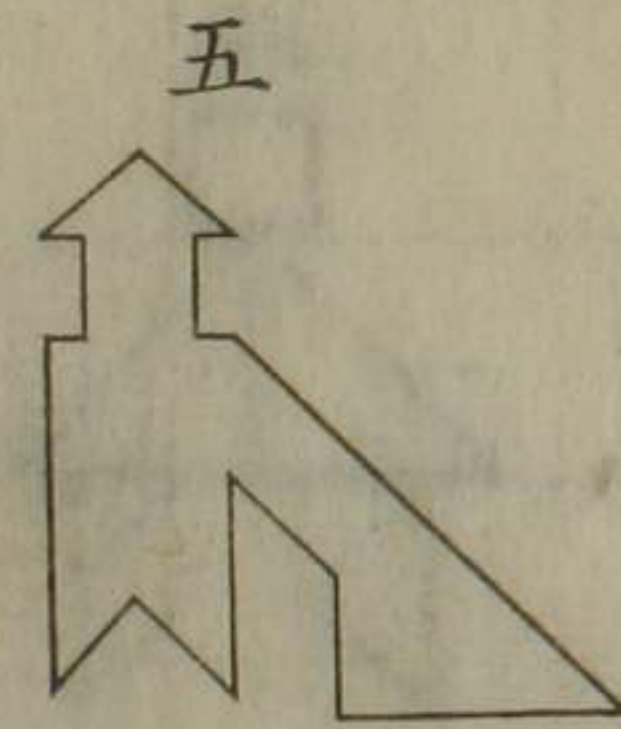
二



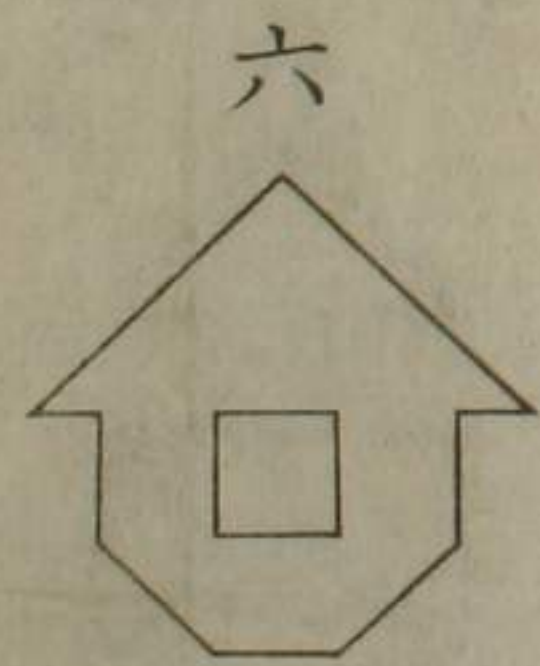
三



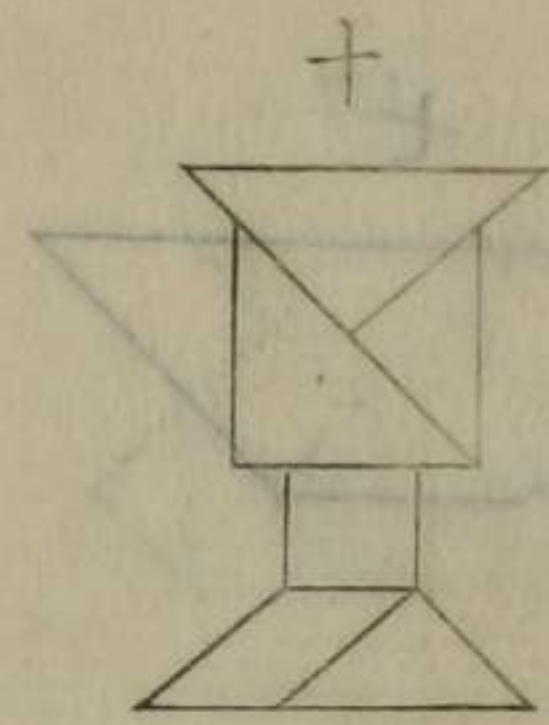
四



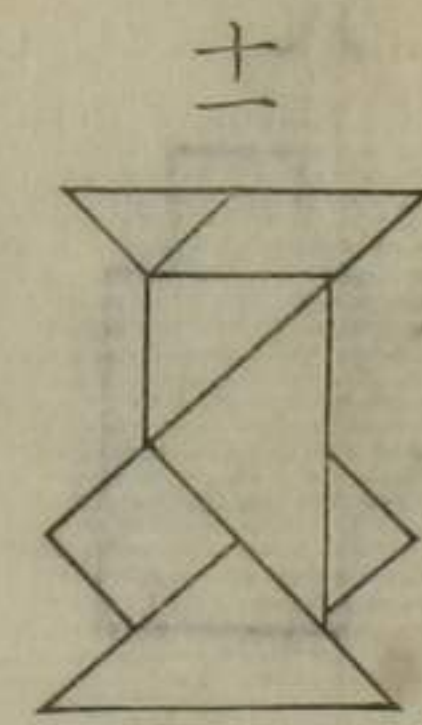
五



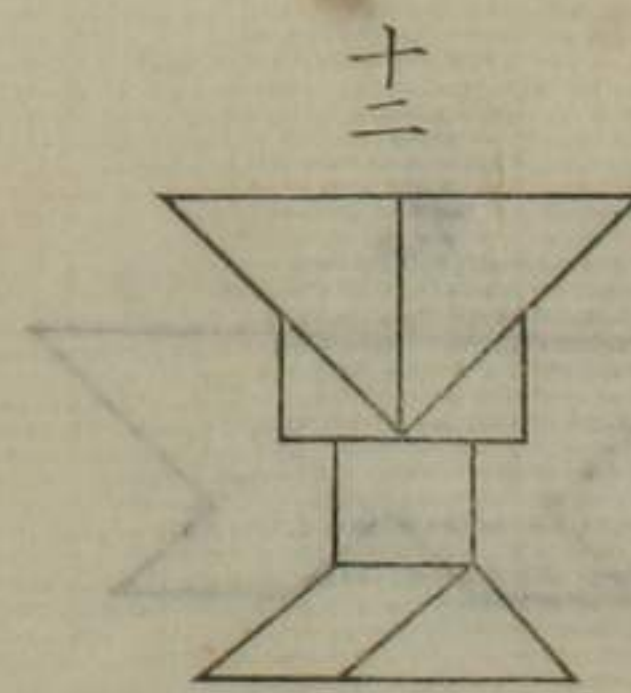
六



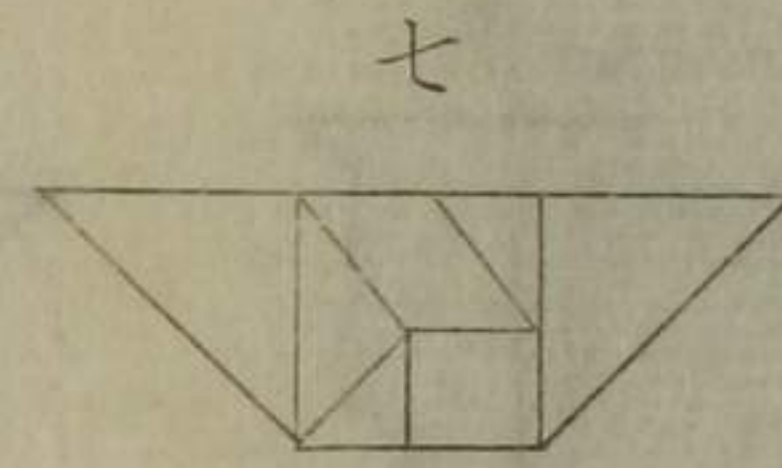
十



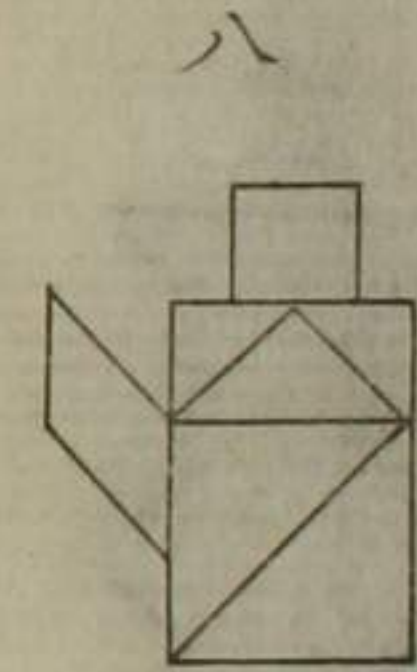
十一



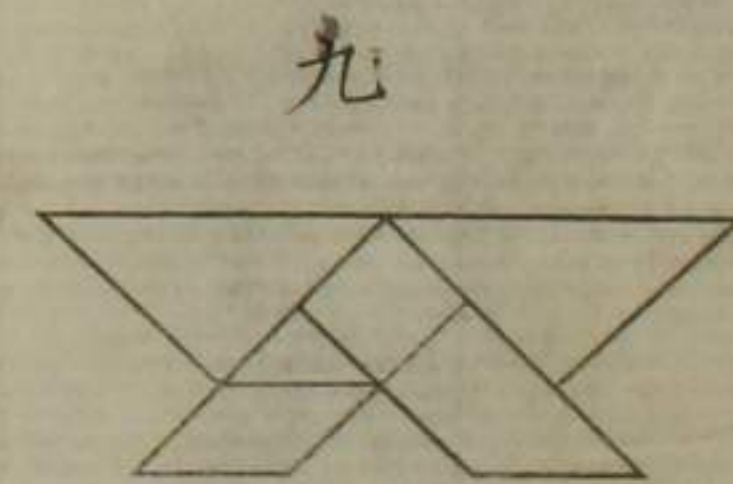
十二



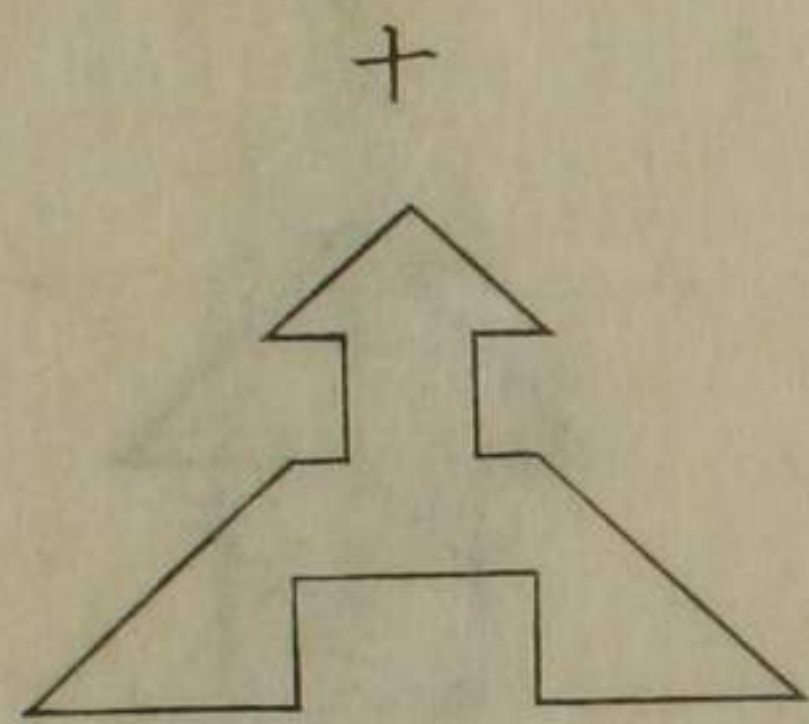
七



八

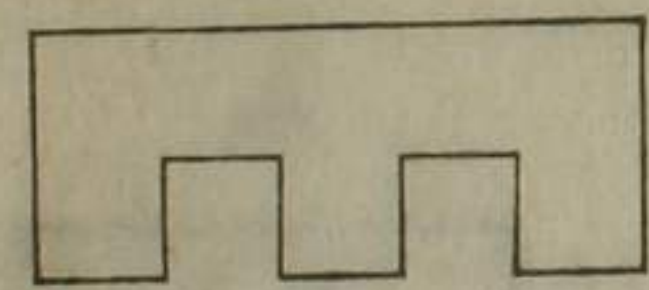


九

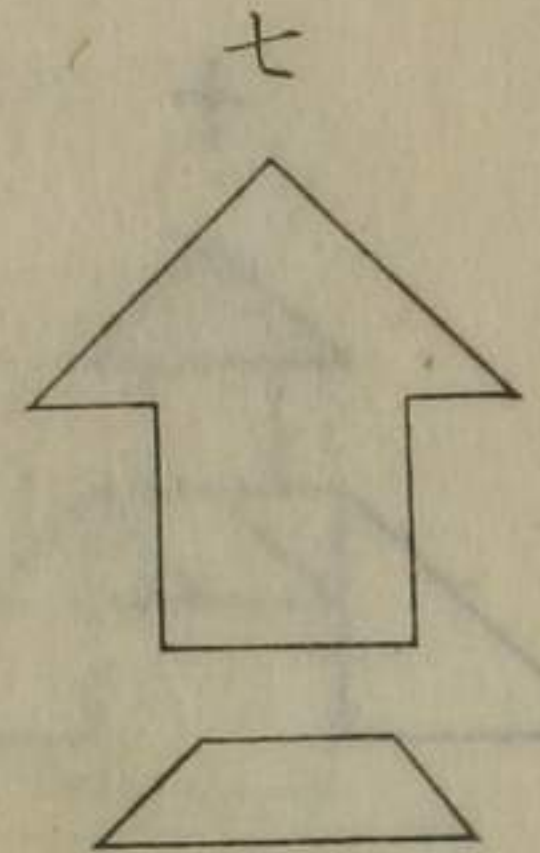
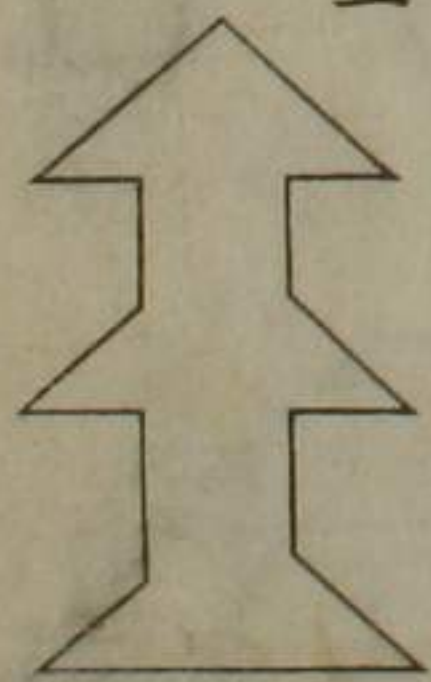


十

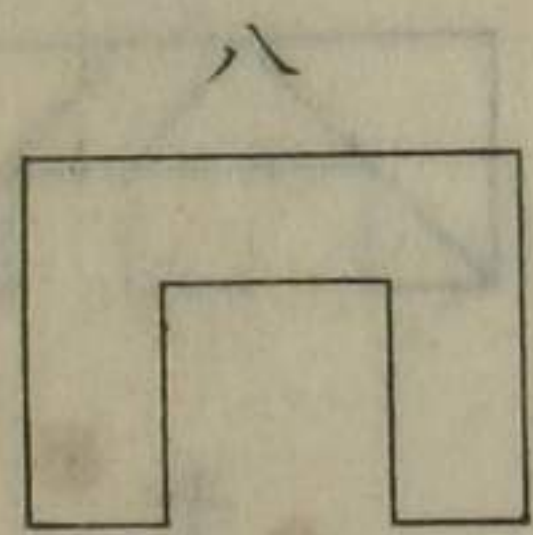
十一



十二

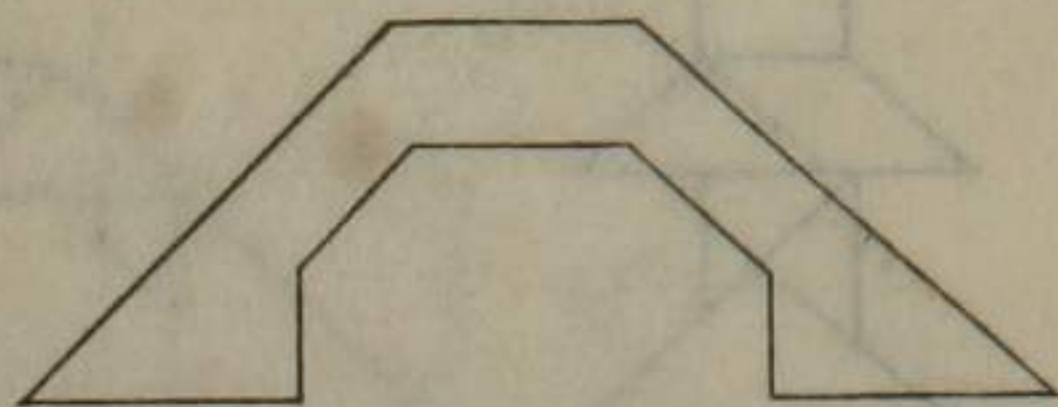


七

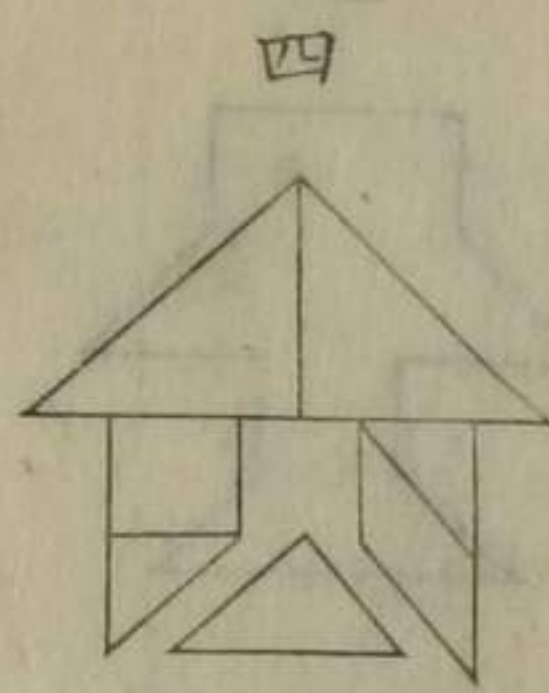


八

九

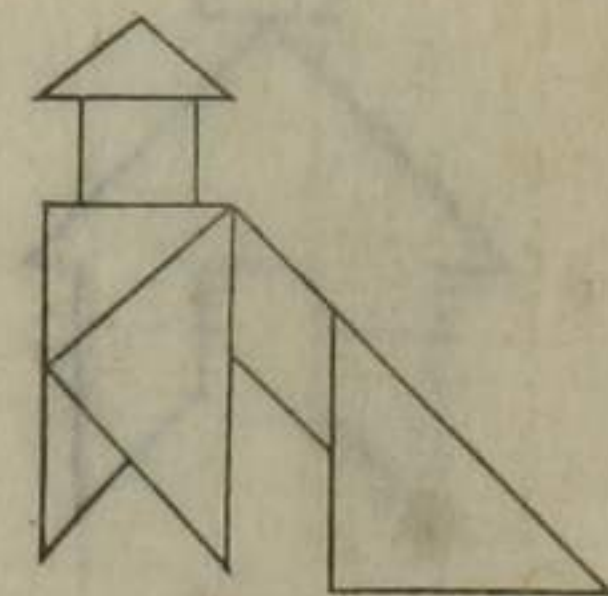


諸製法左

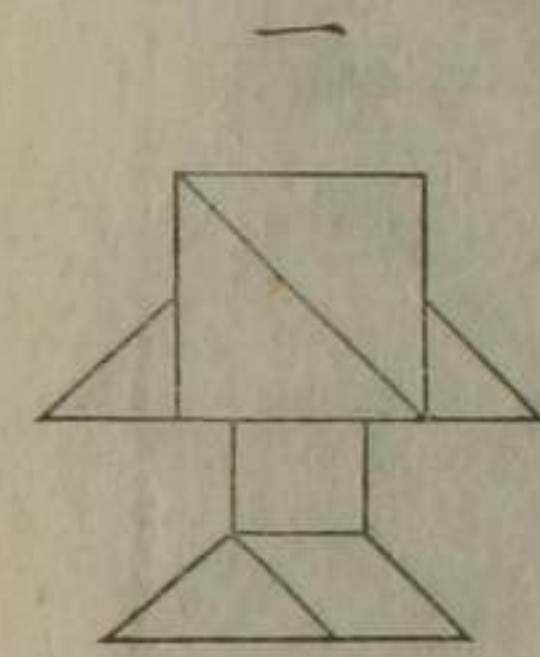
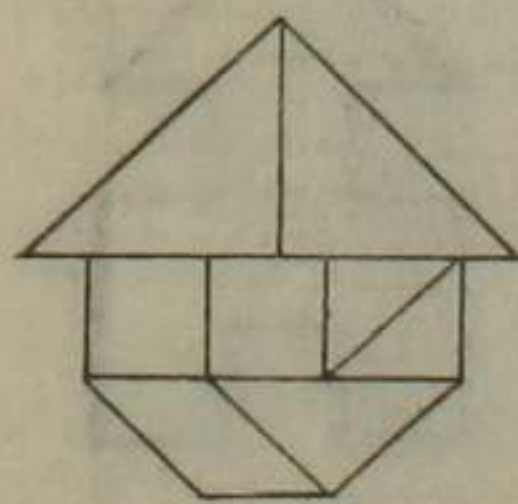


四

五

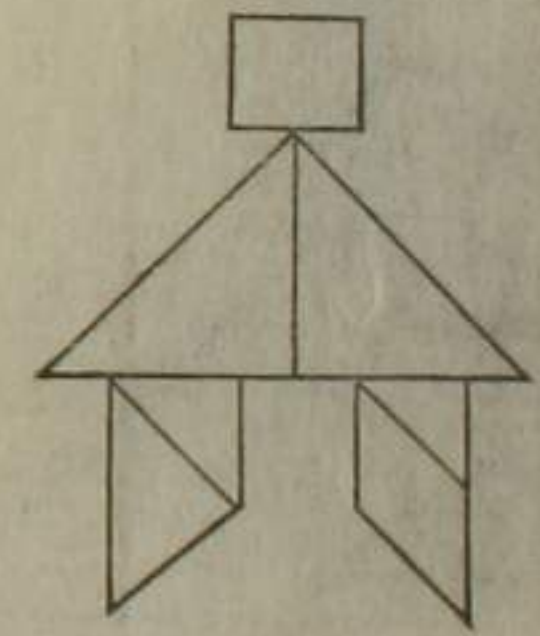


六

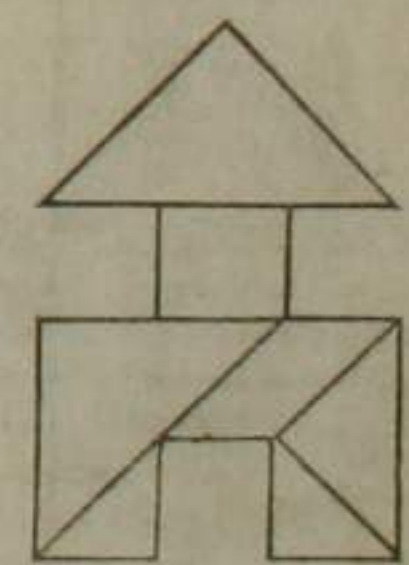


一

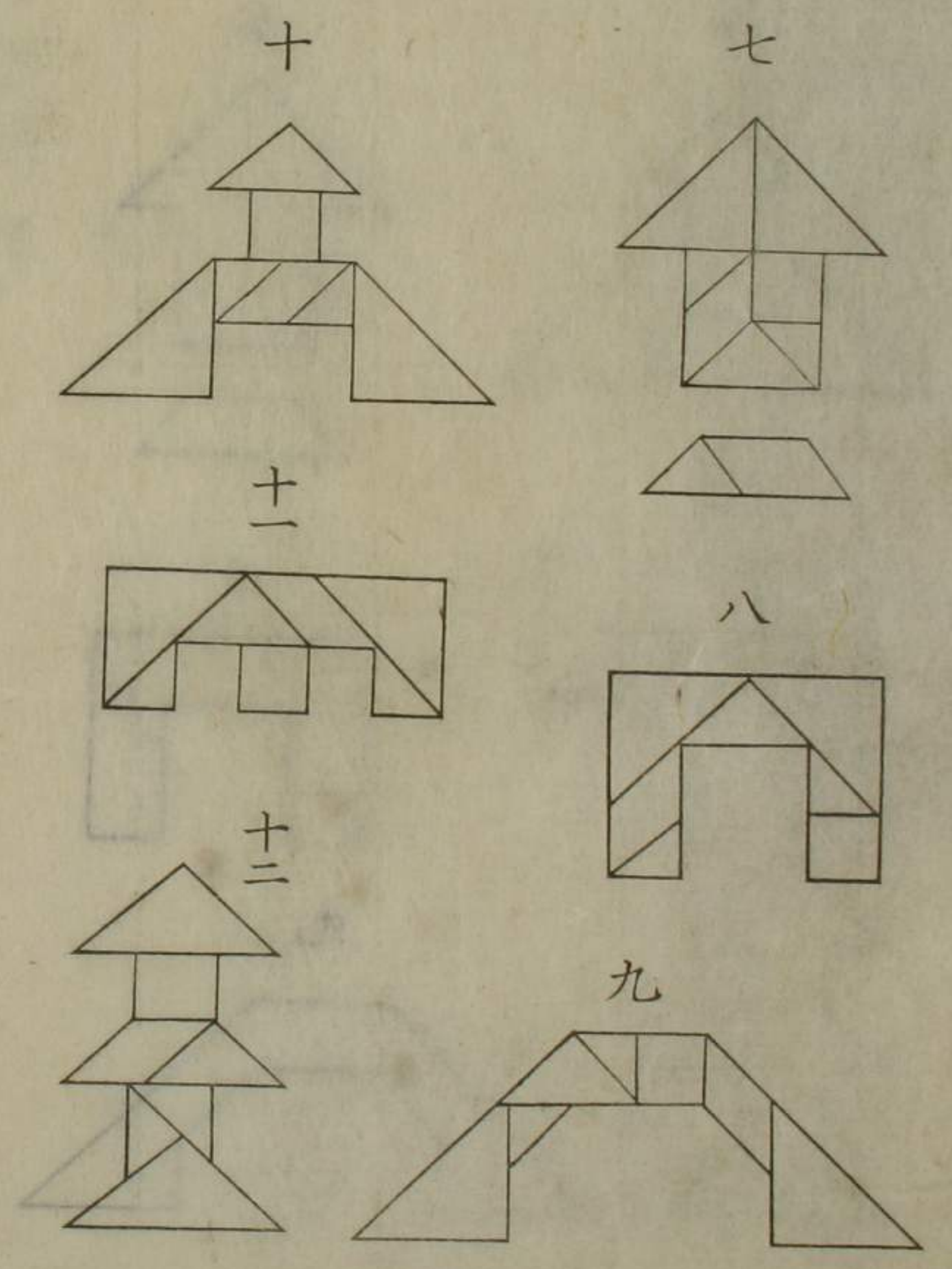
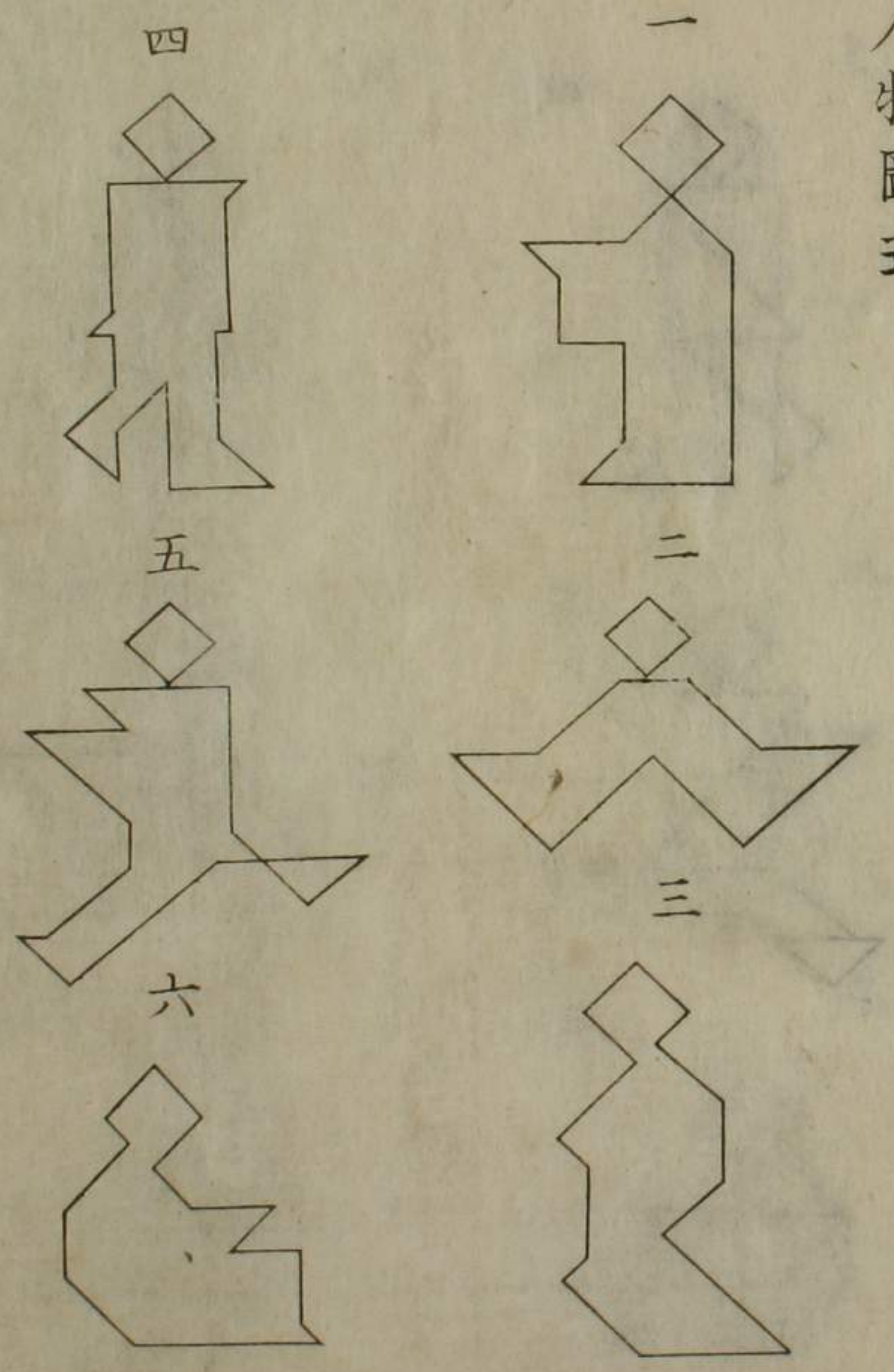
二



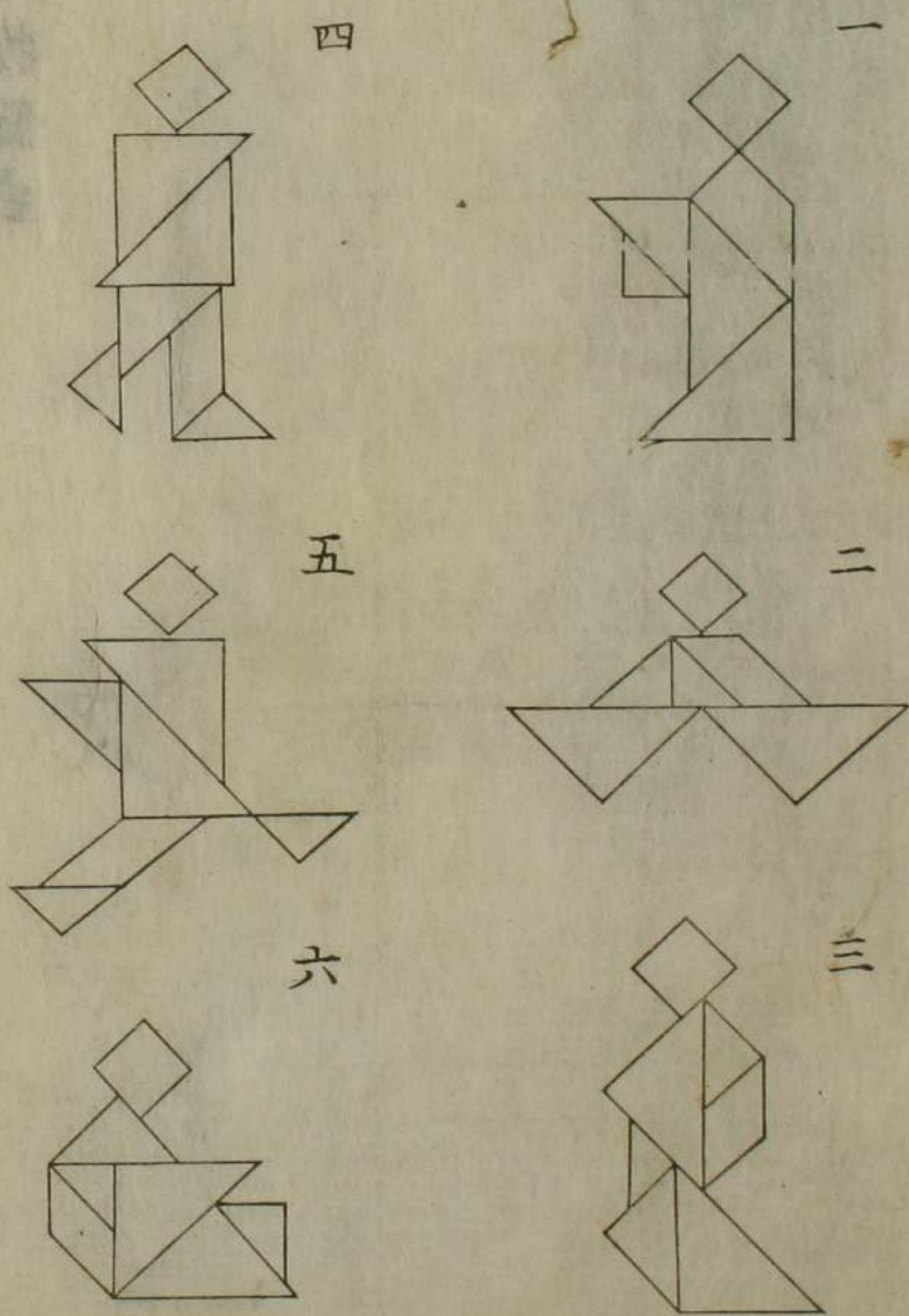
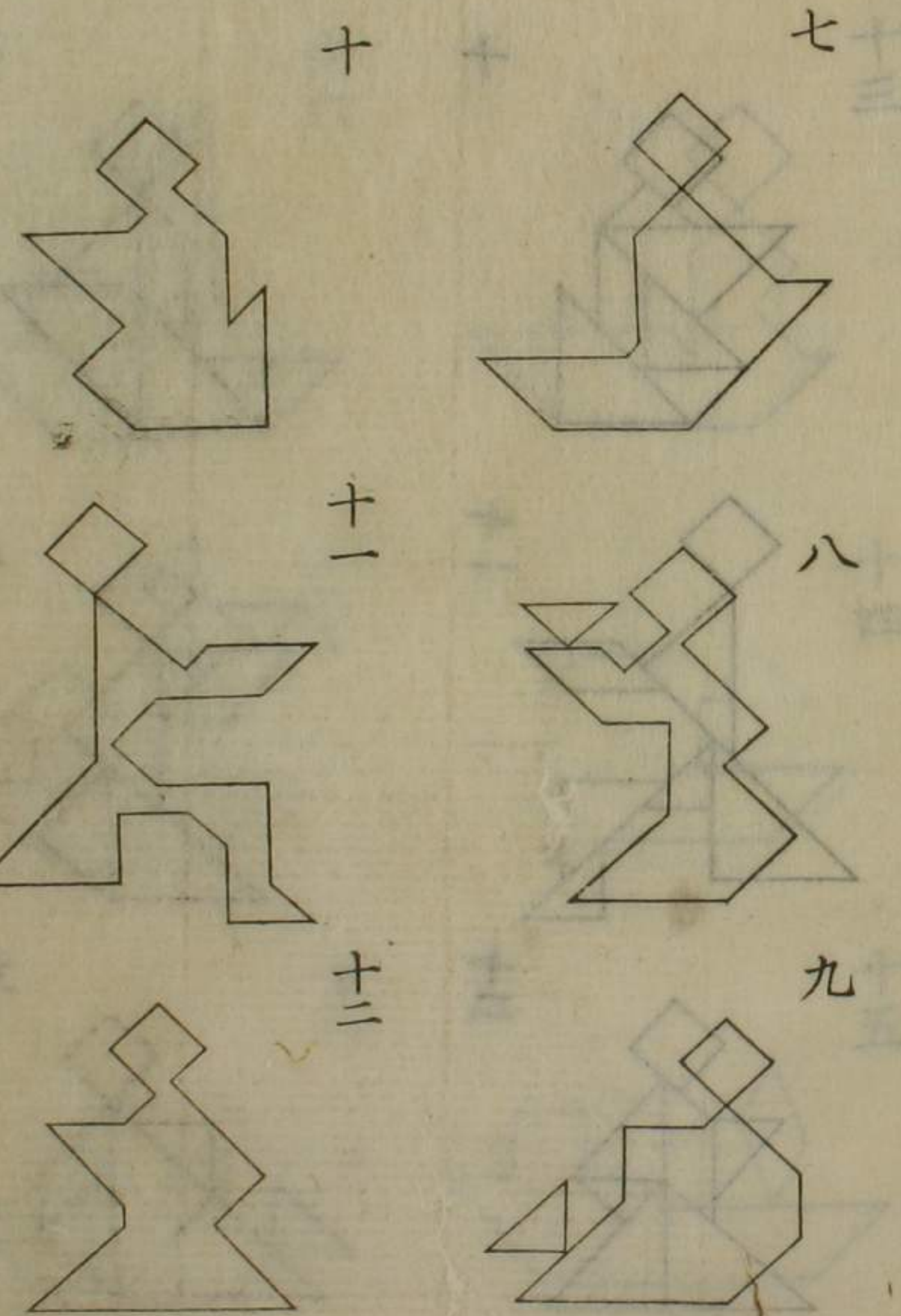
三

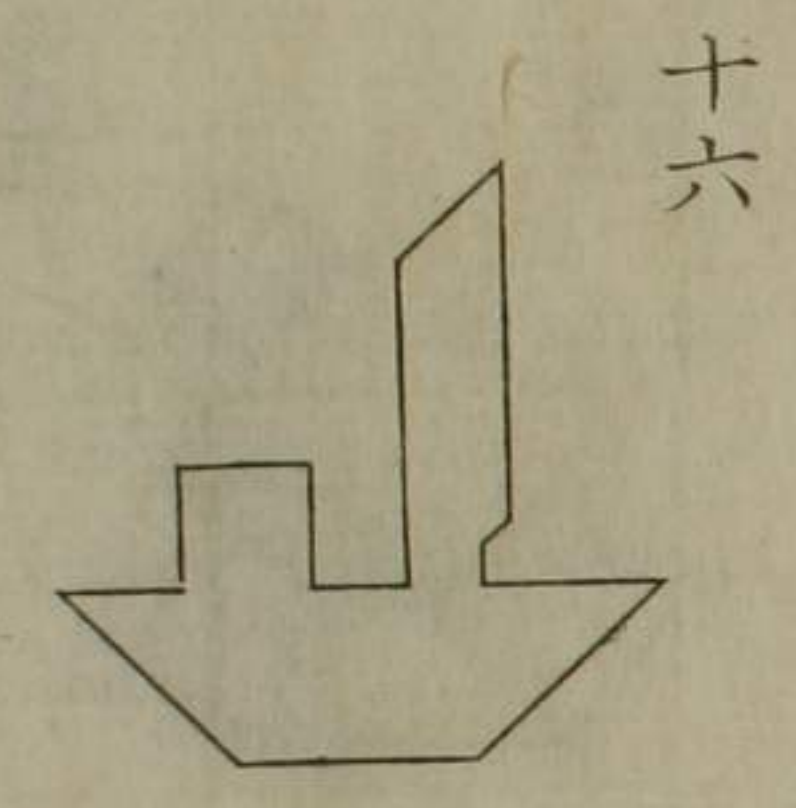


人物圖式

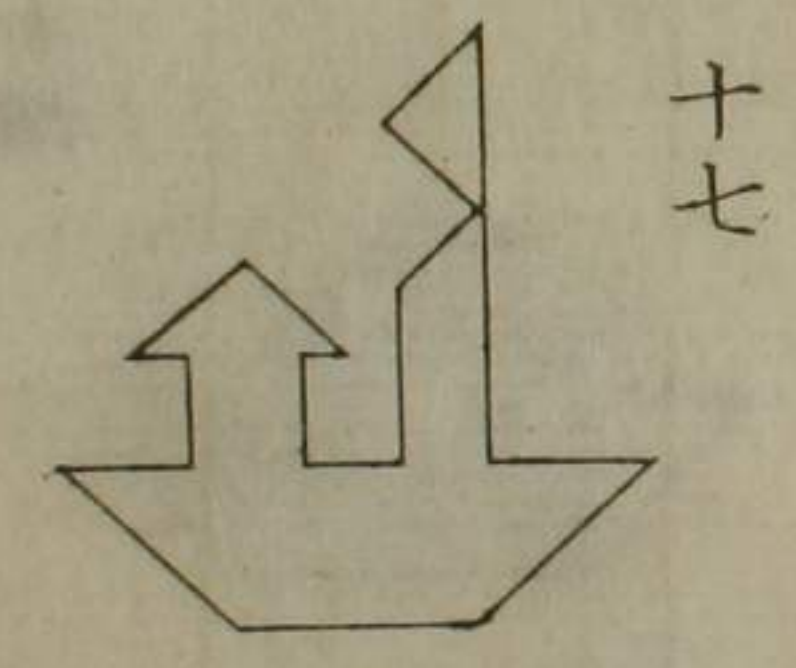




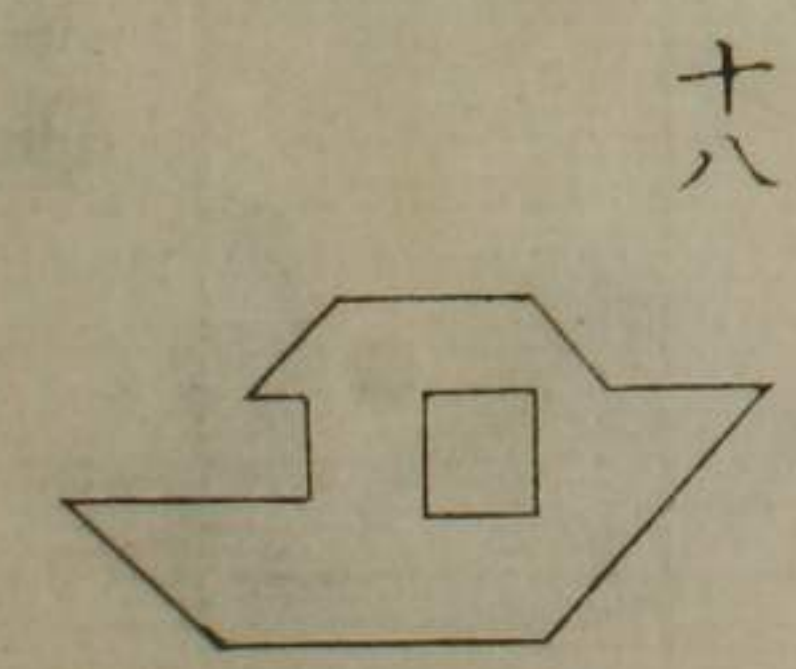




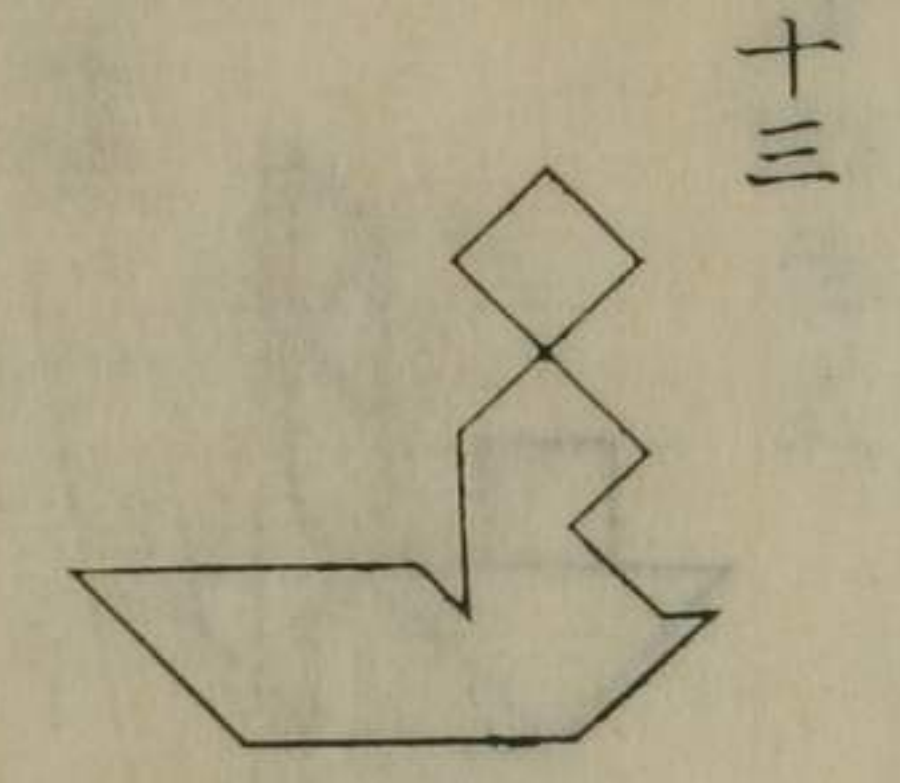
十六



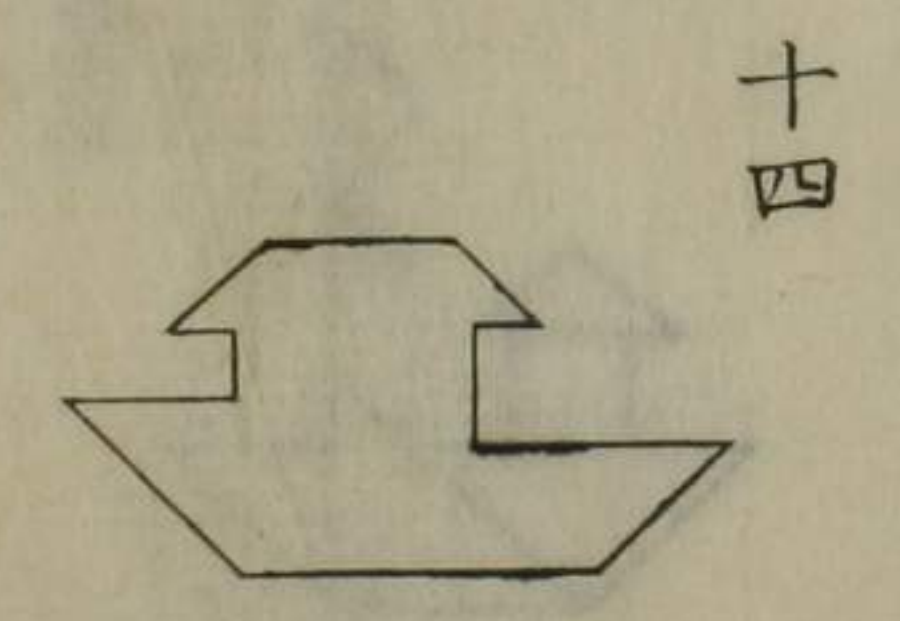
十七



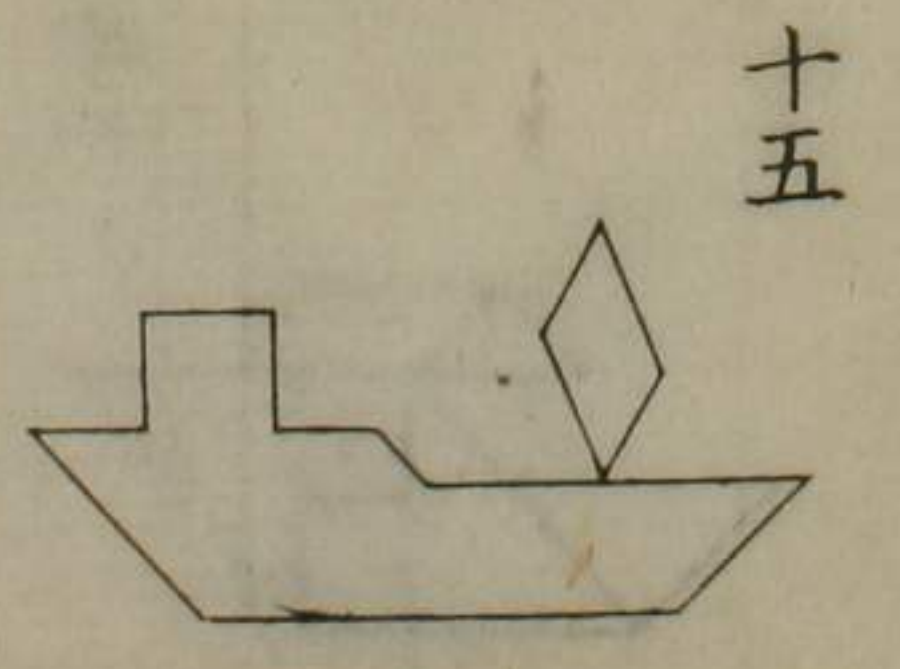
十八



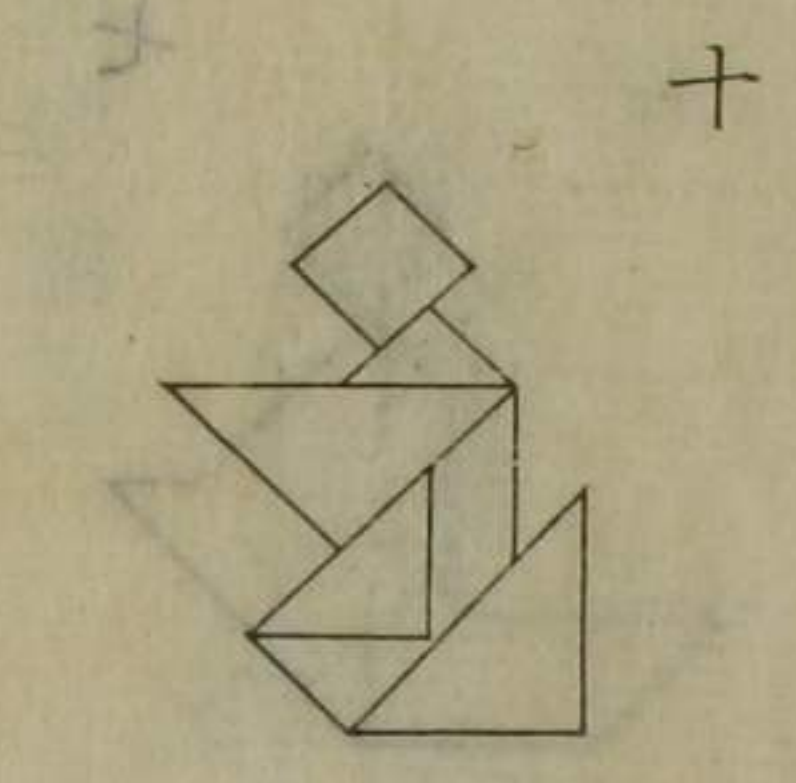
十三



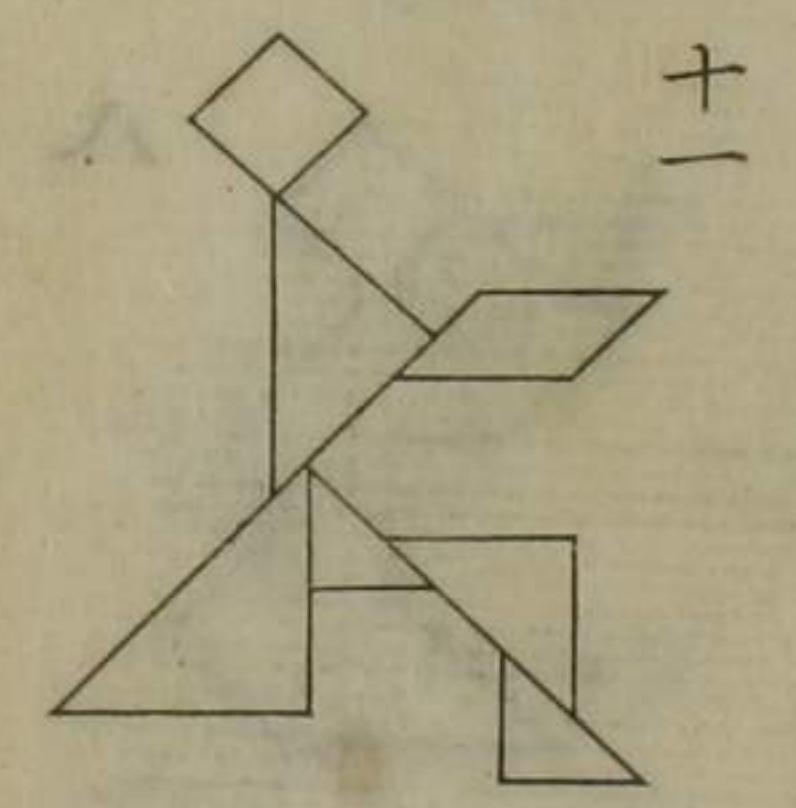
十四



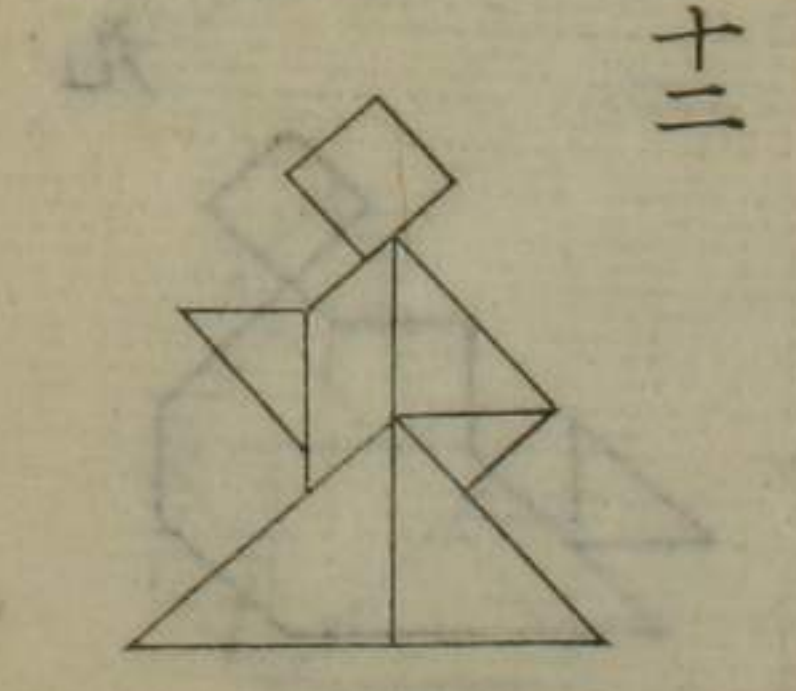
十五



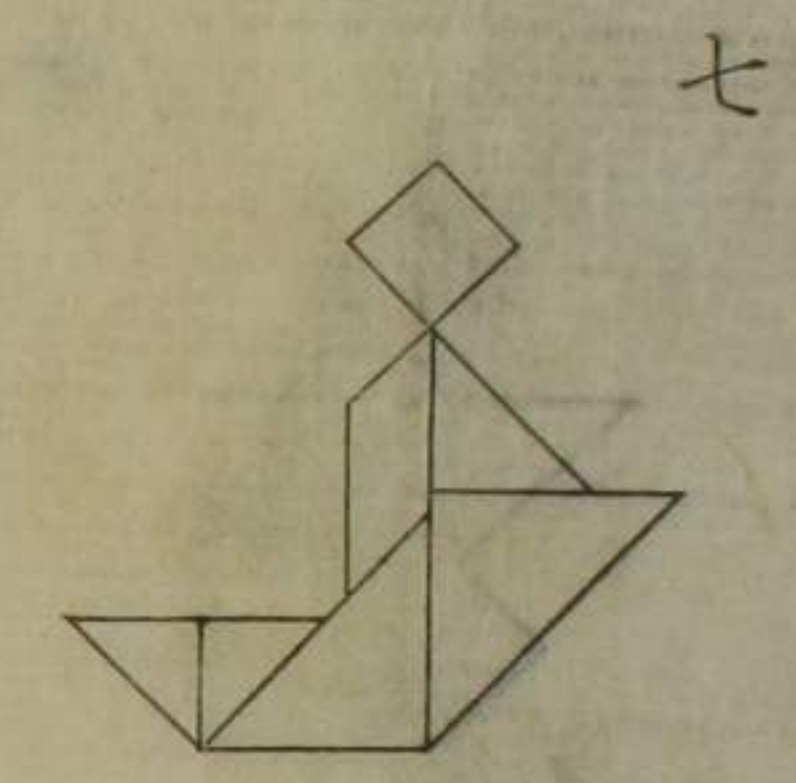
十



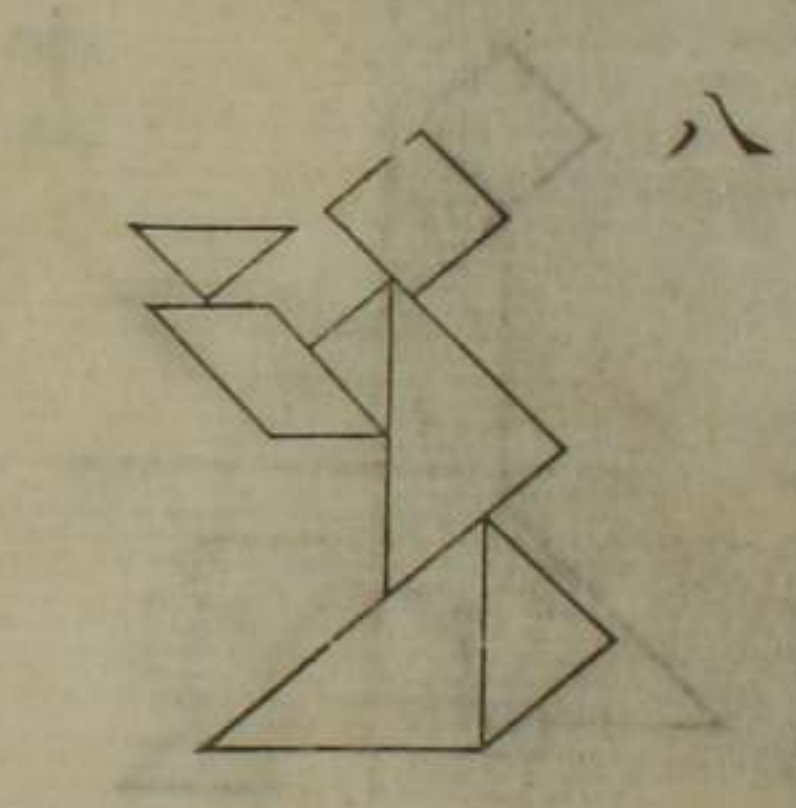
十一



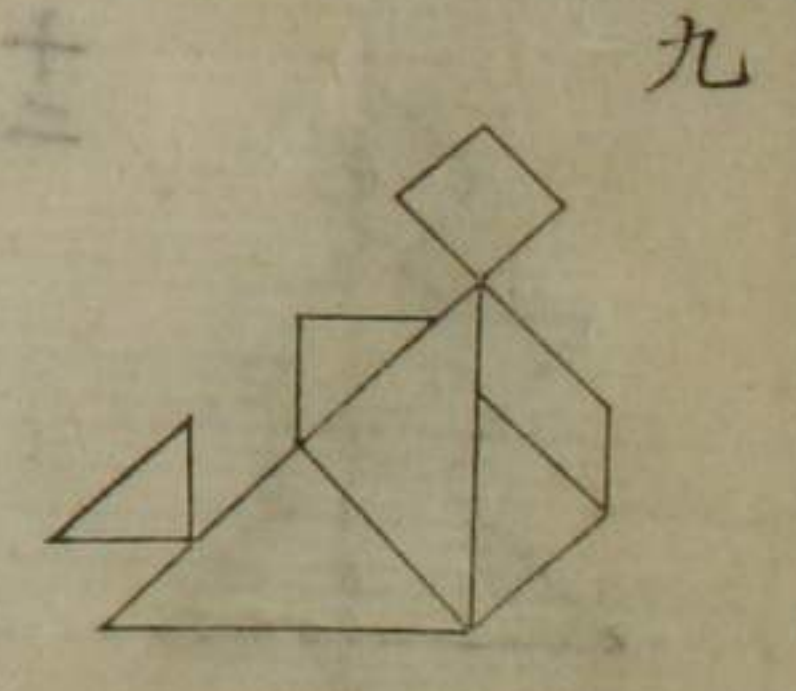
十二



七

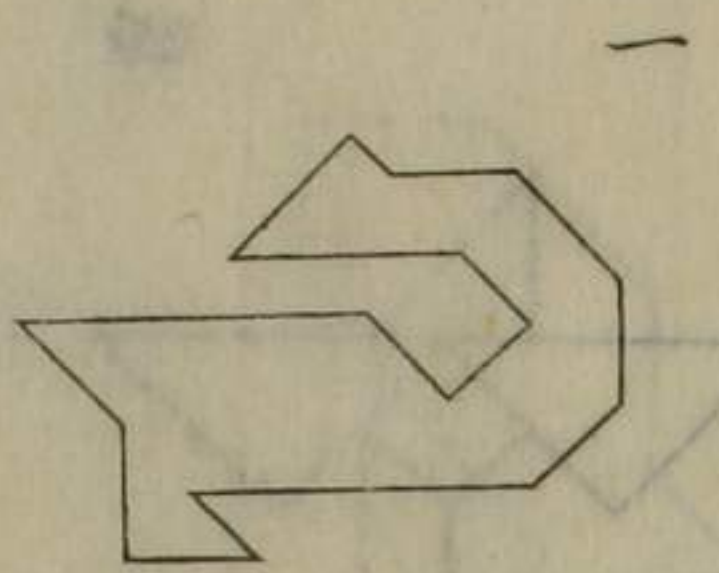


八

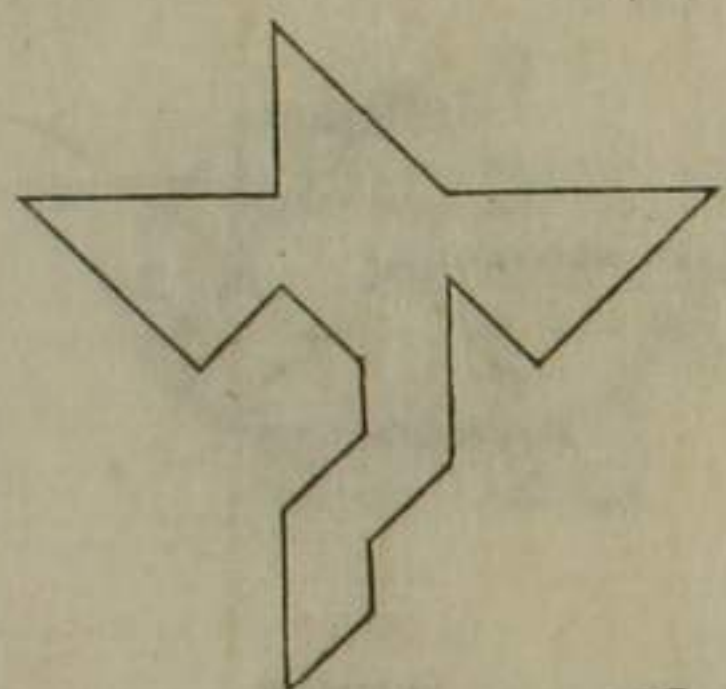


九

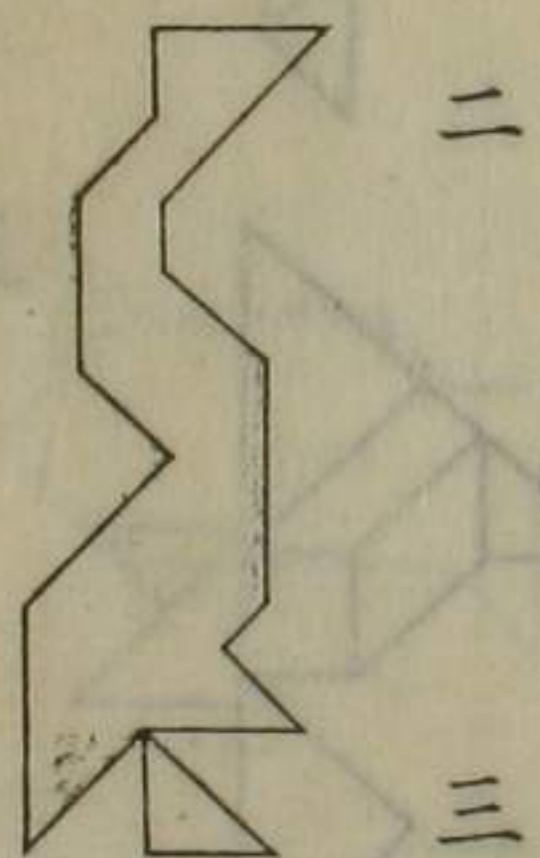
諸動物式



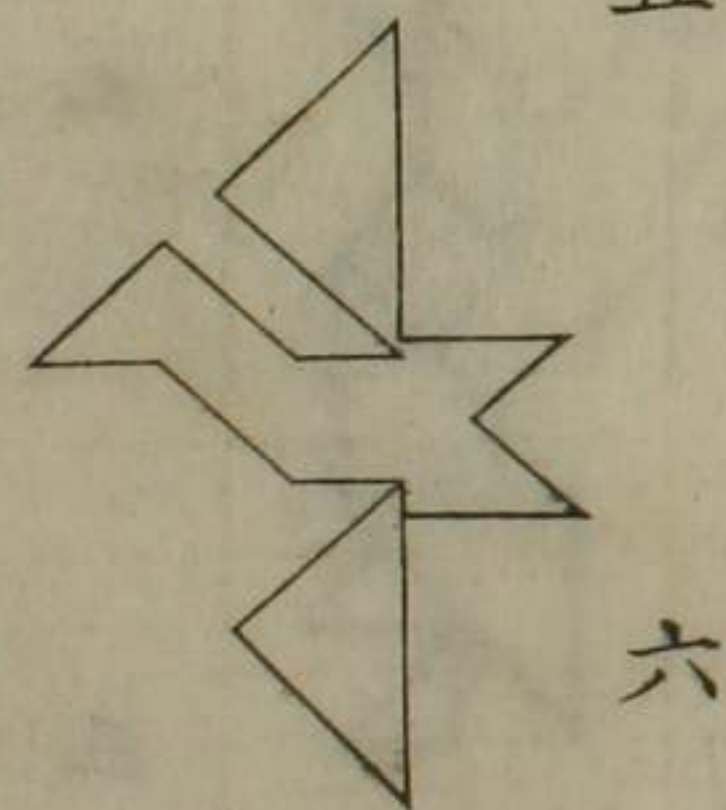
一



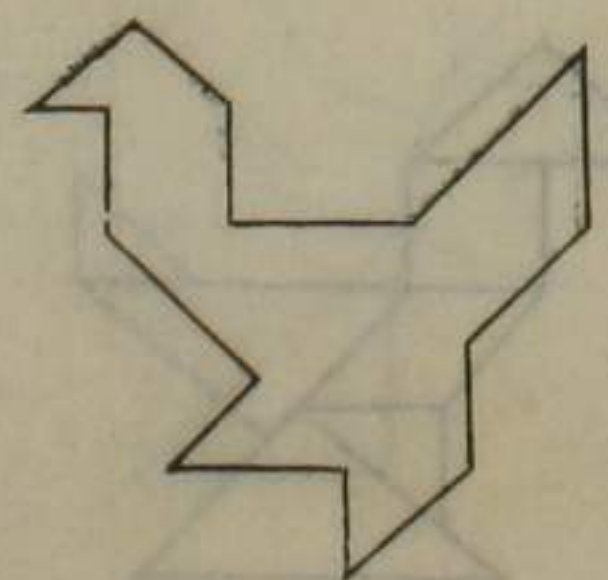
四



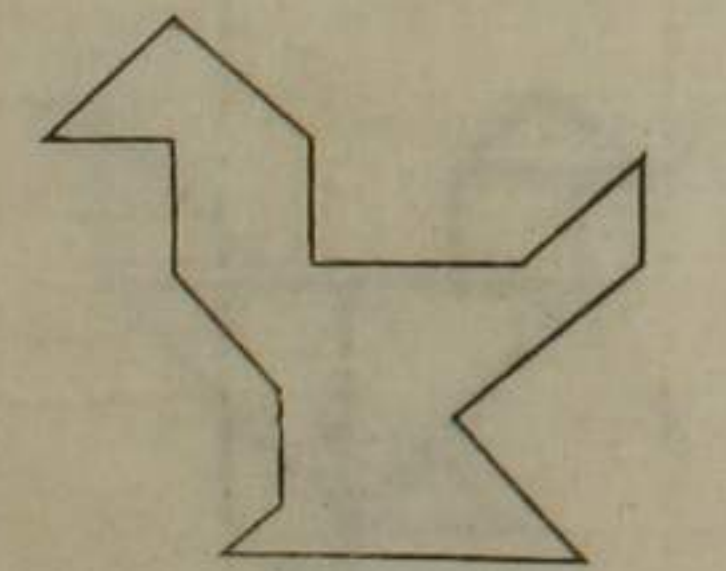
二



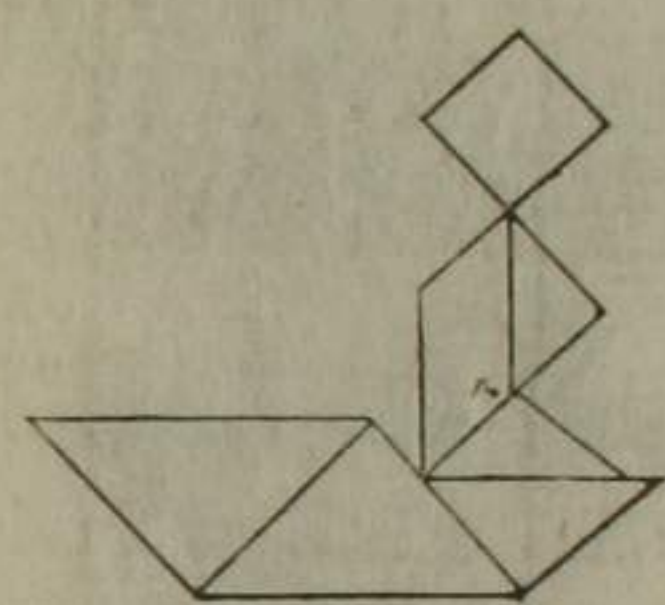
五



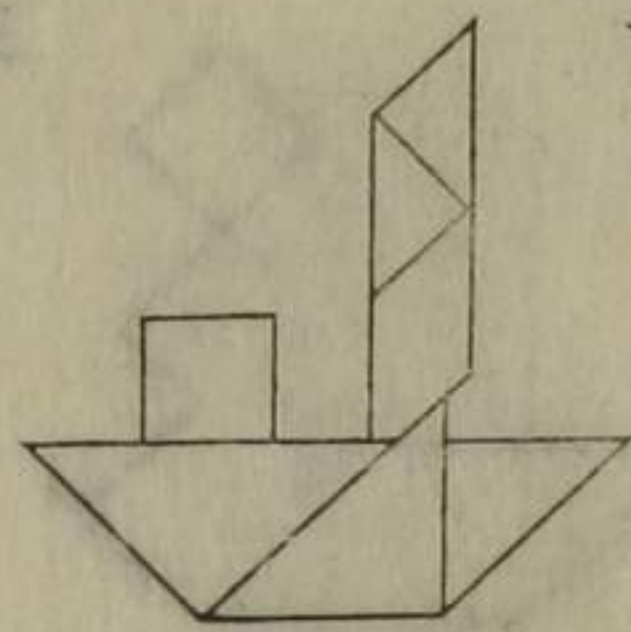
三



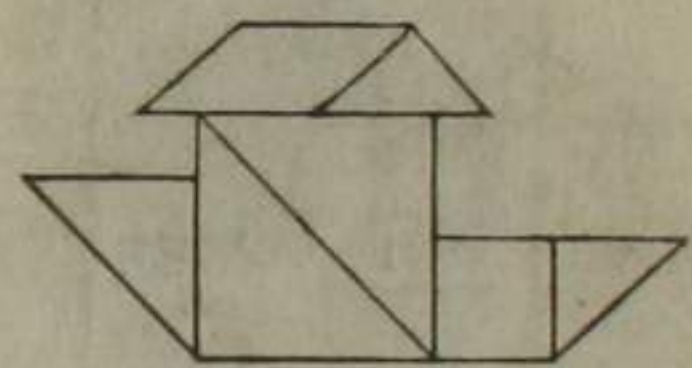
六



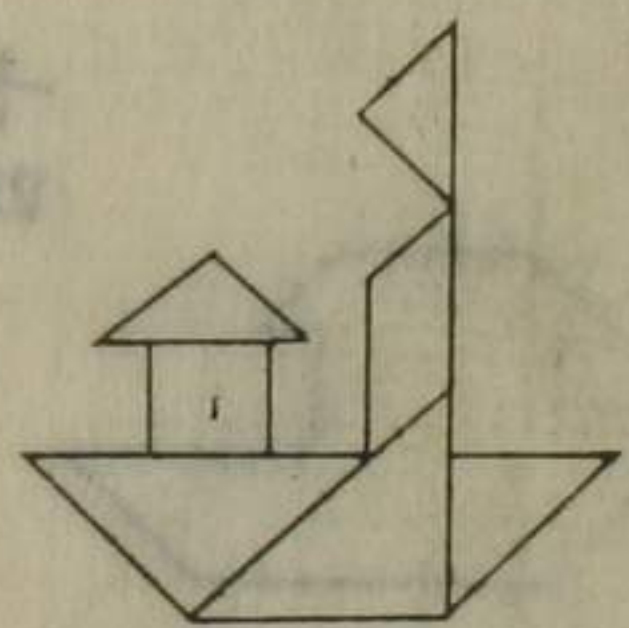
十三



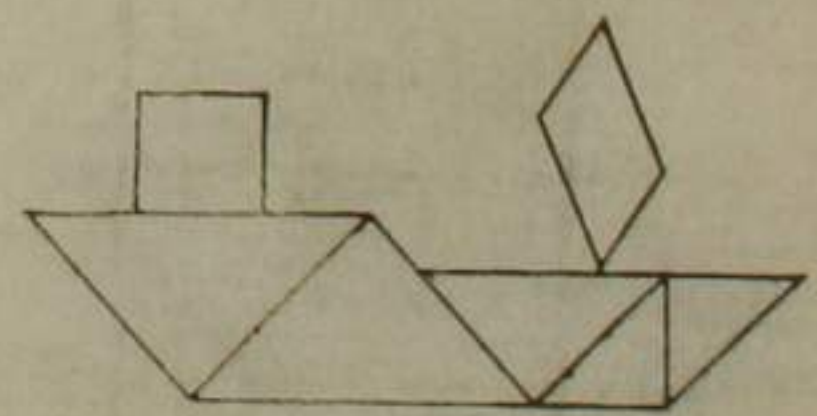
十六



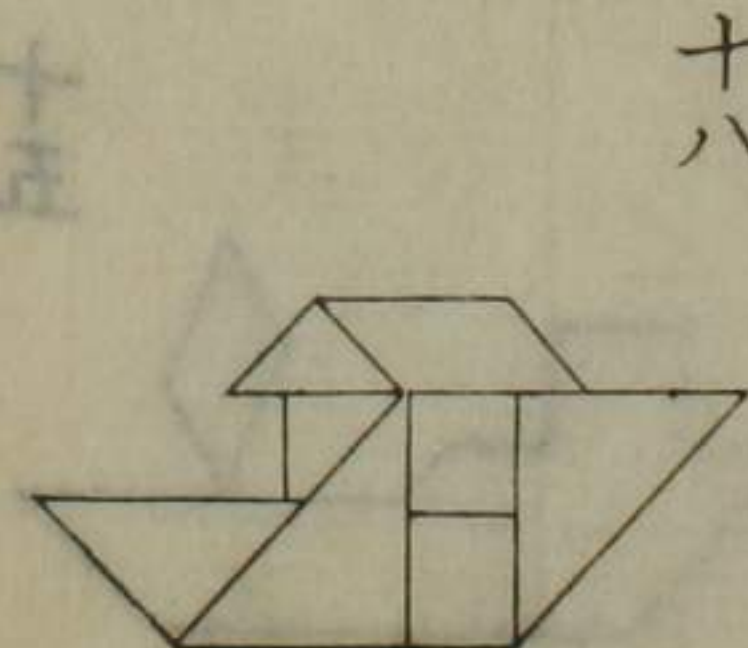
十四



十七



十五

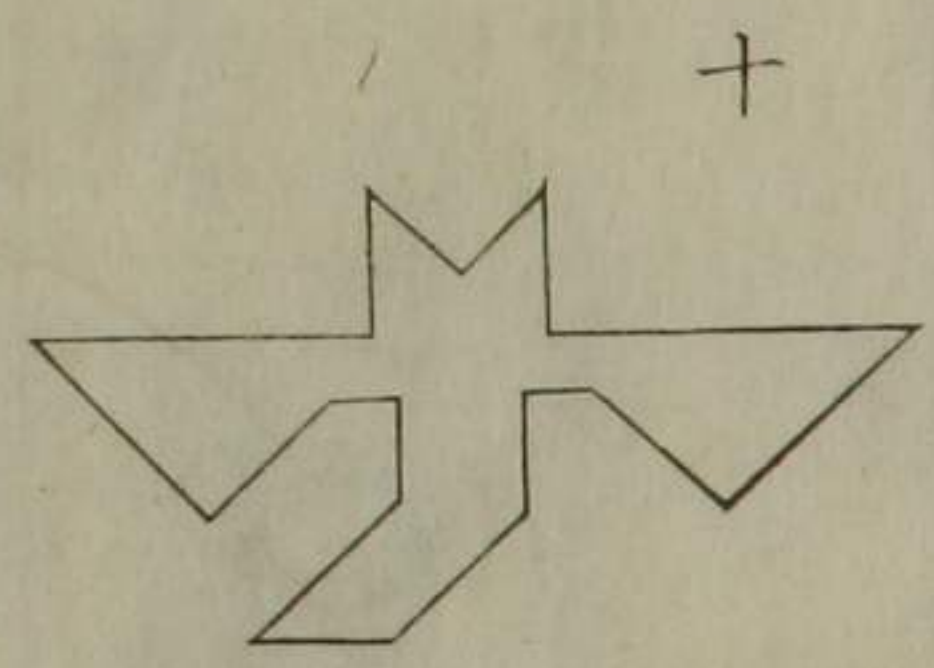


十八

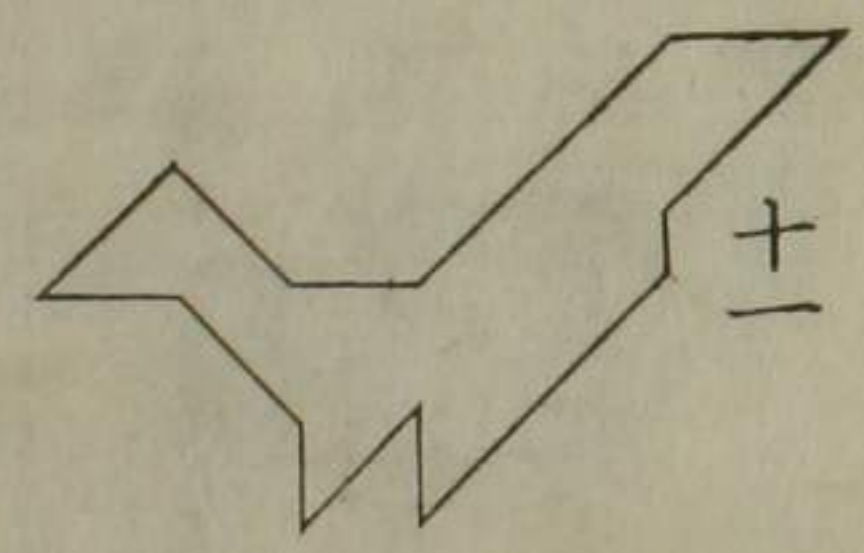
十三

十四

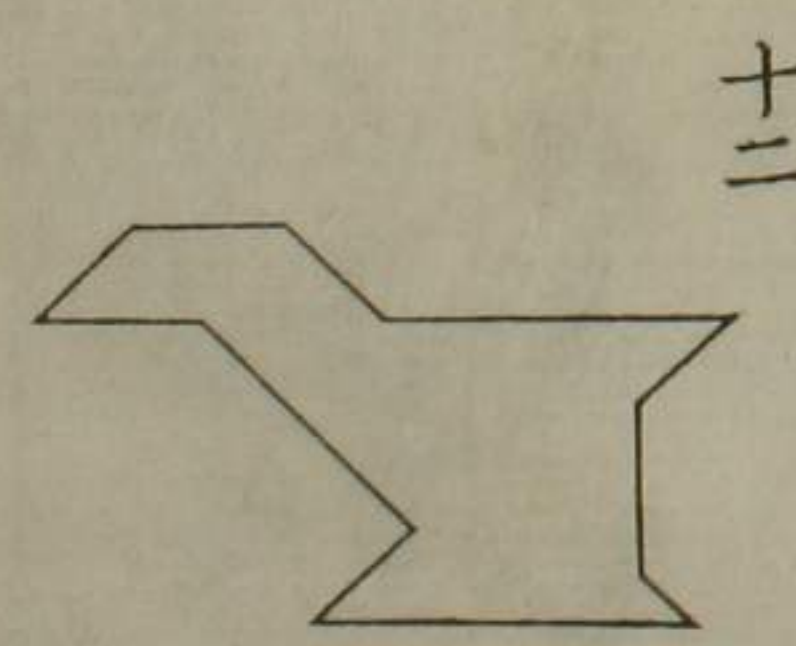
十五



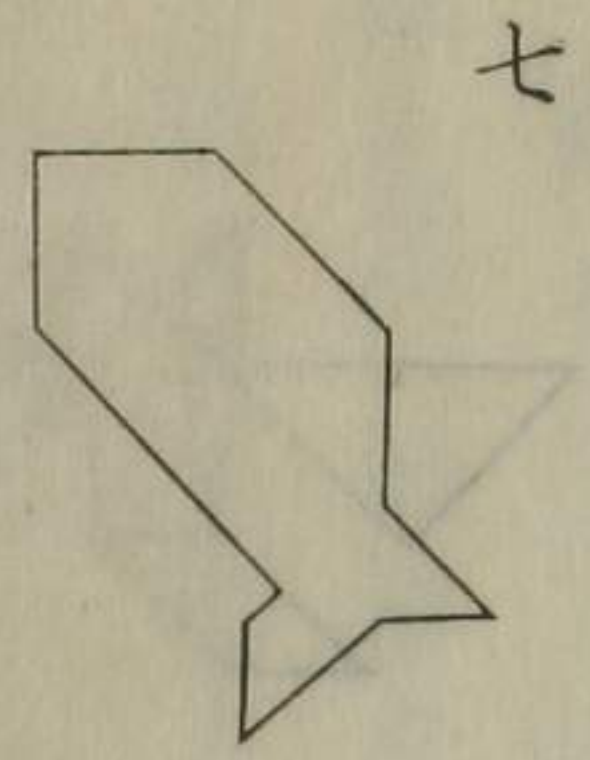
十



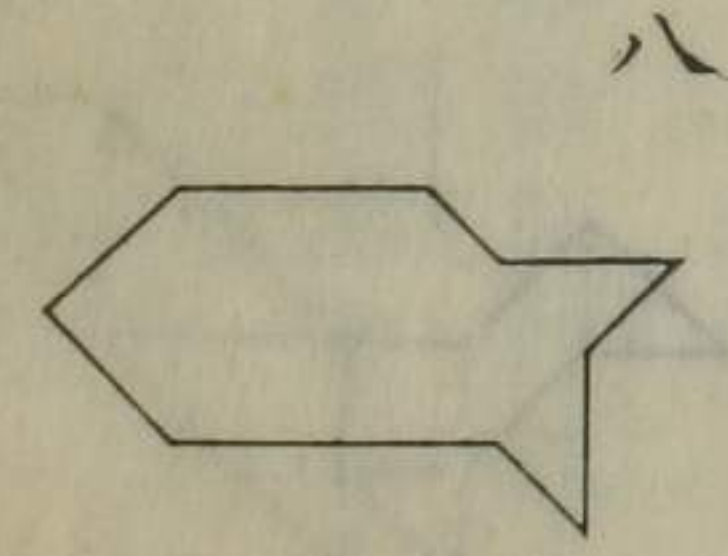
十一



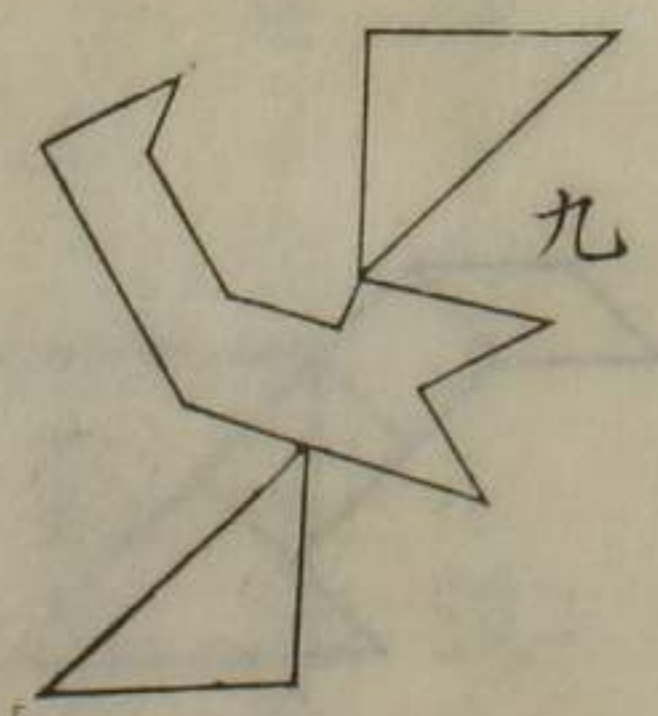
十二



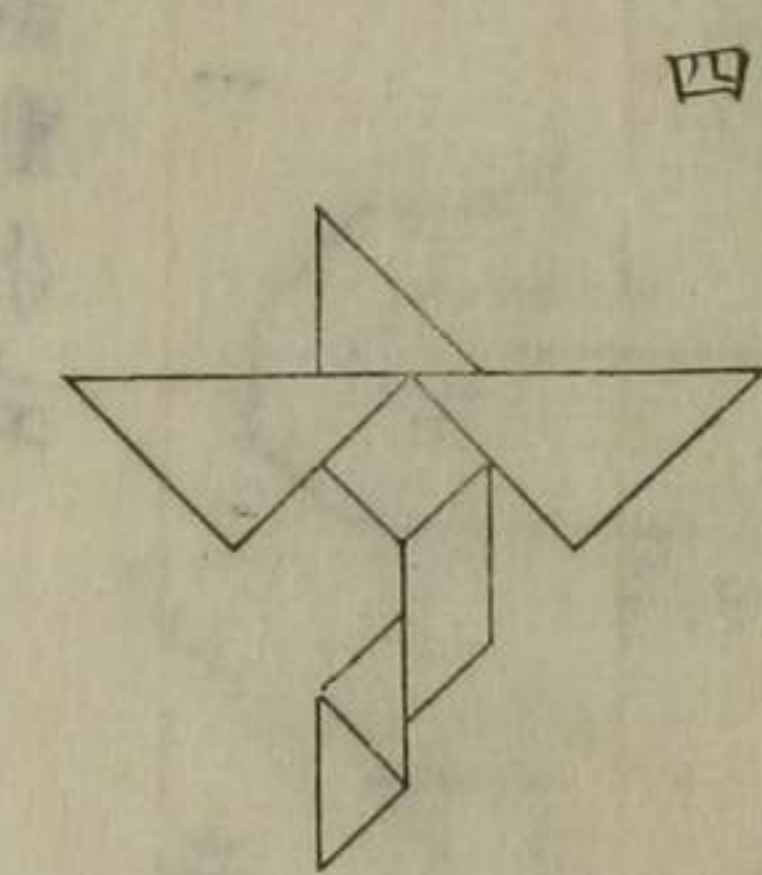
七



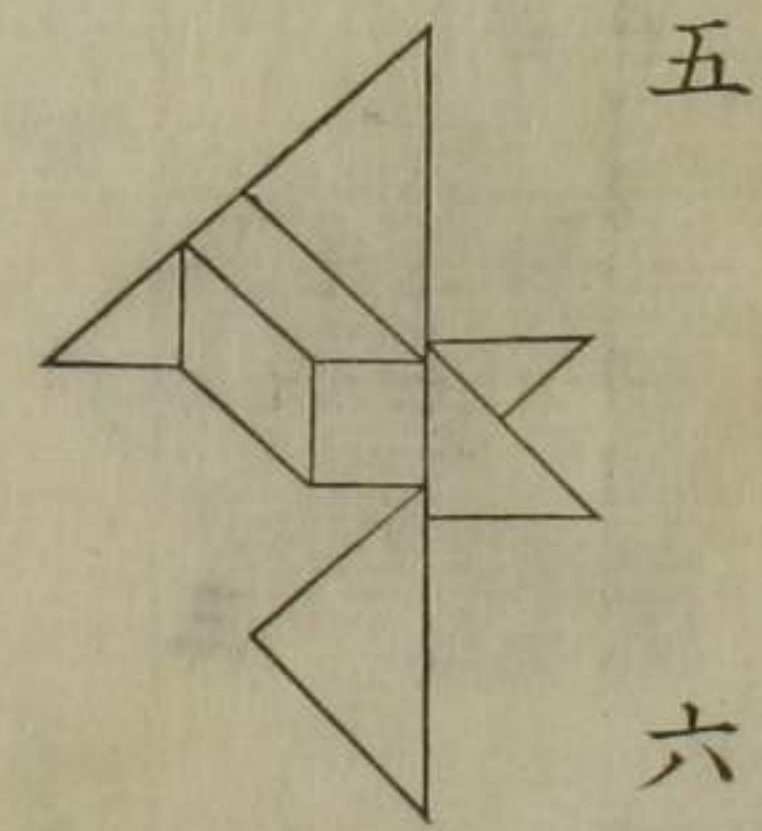
八



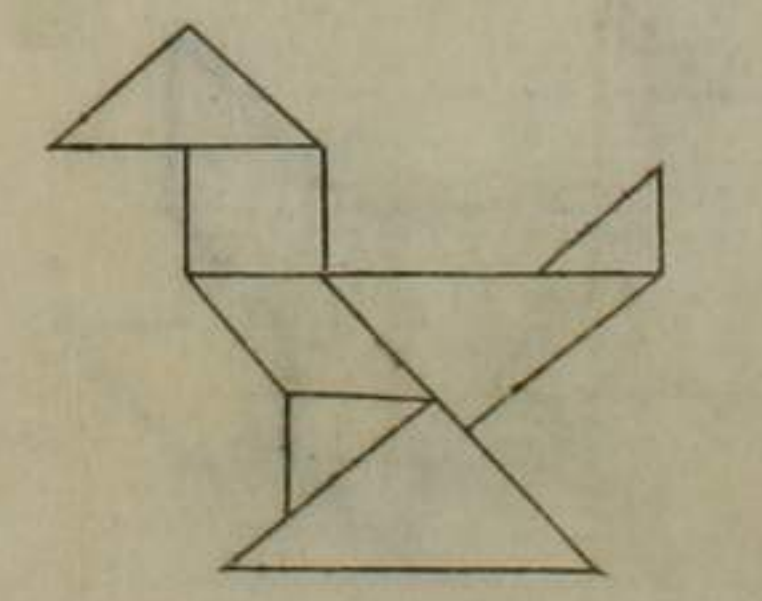
九



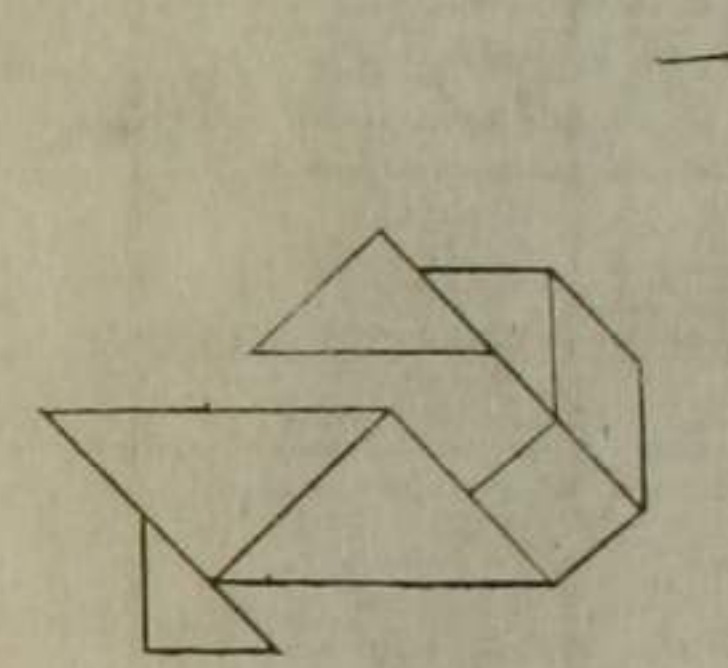
四



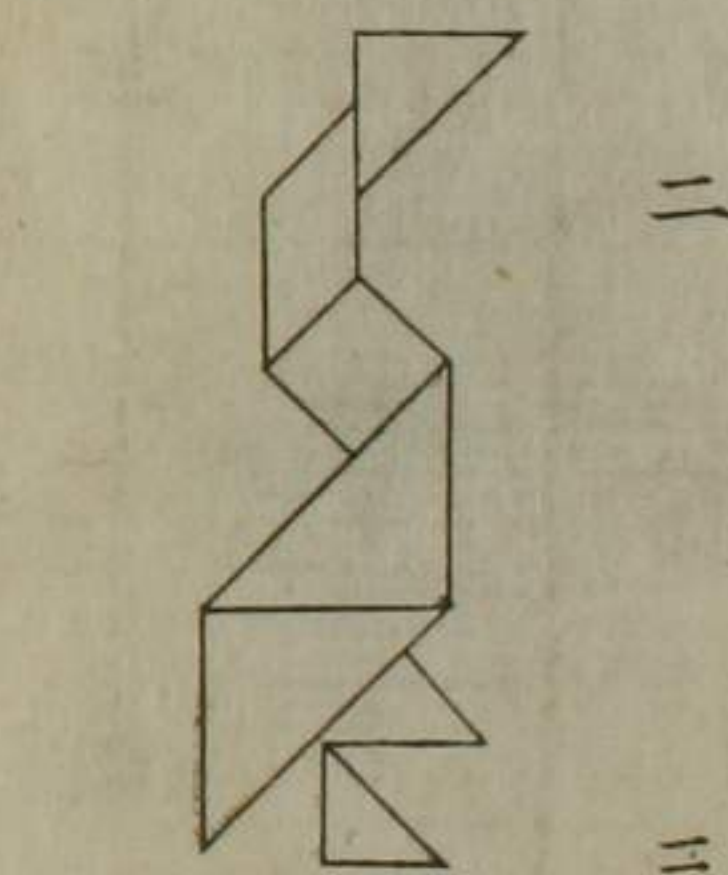
五



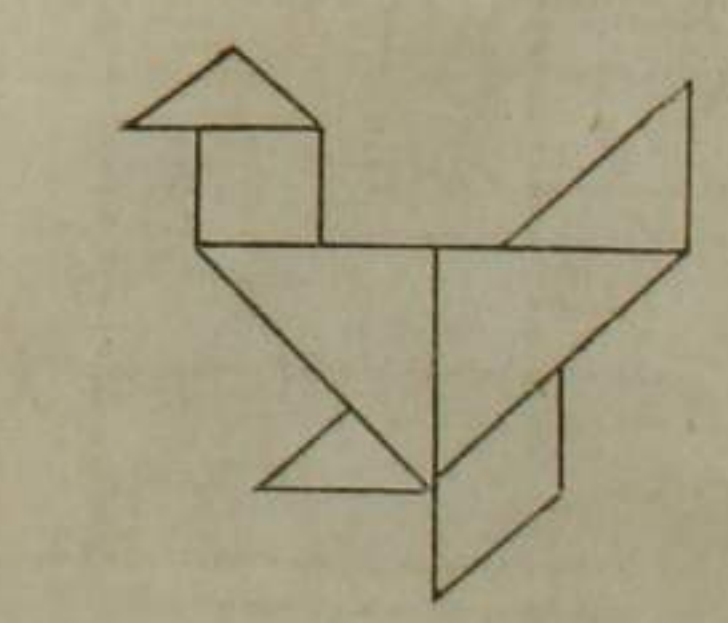
六



一

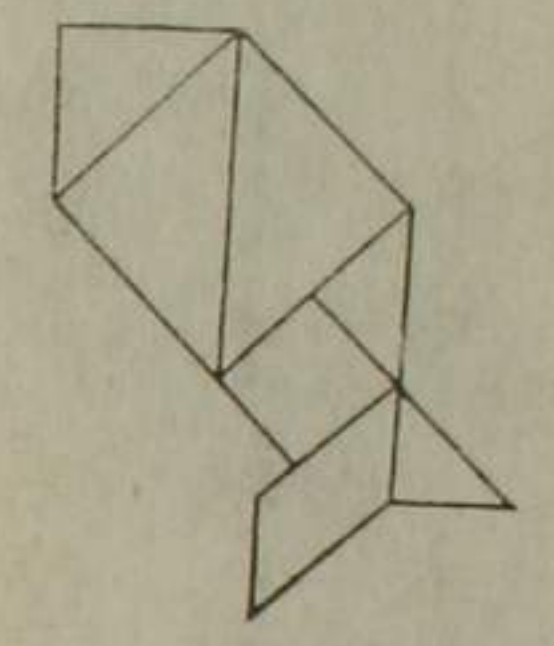


二

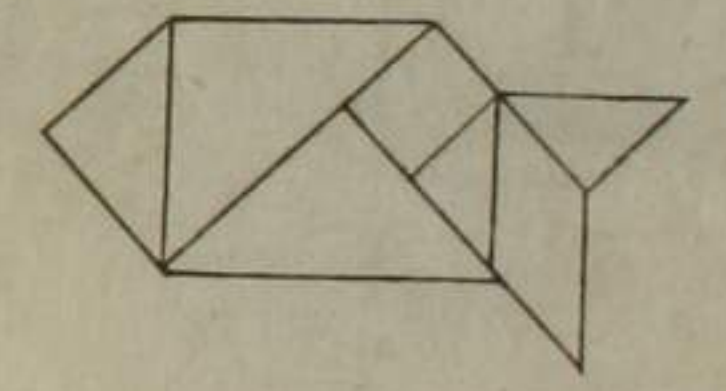


三

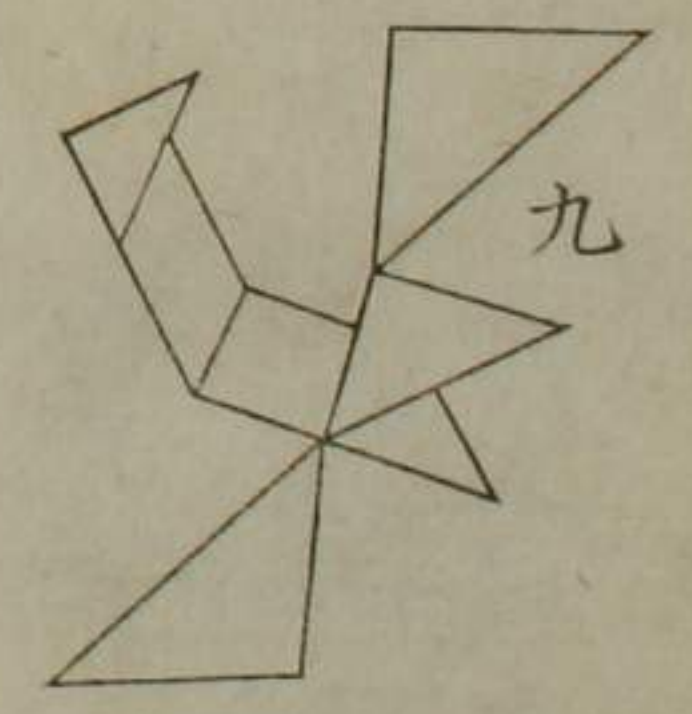
七



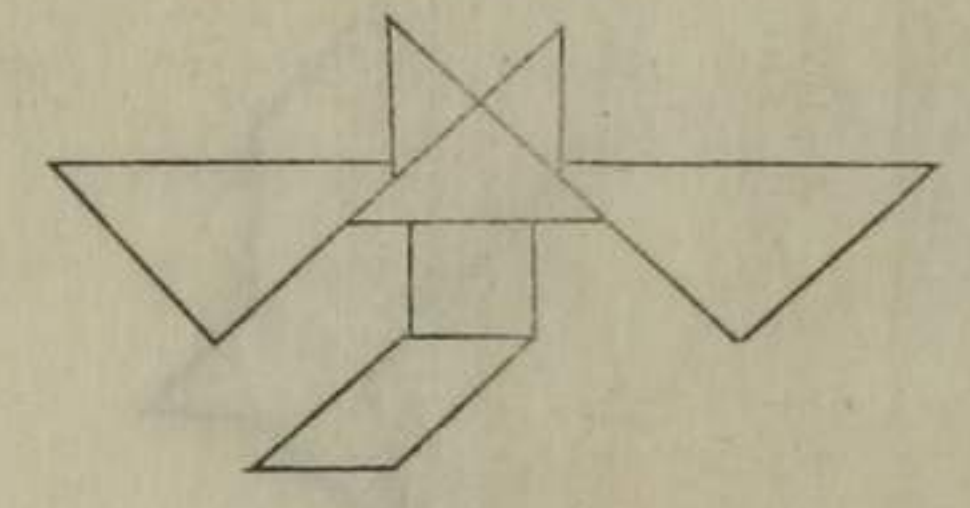
八



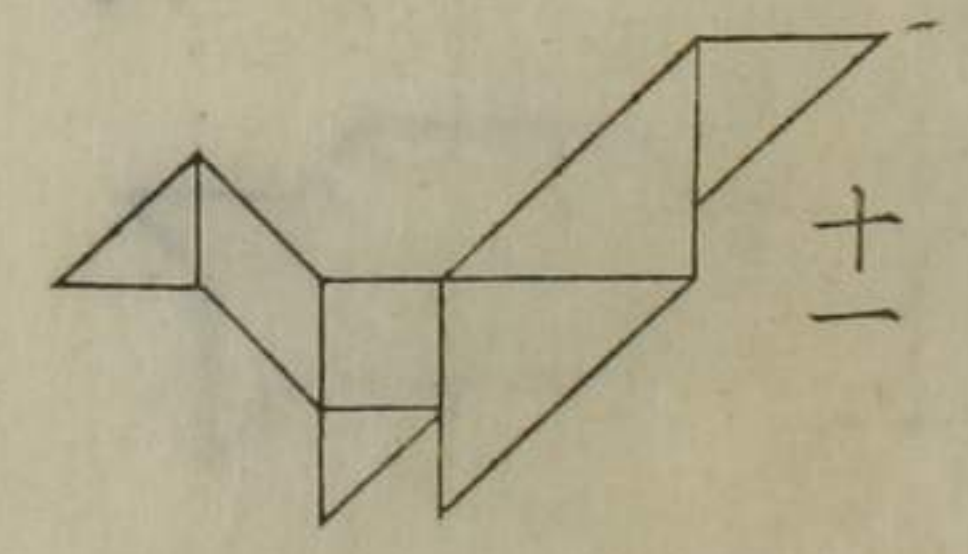
九



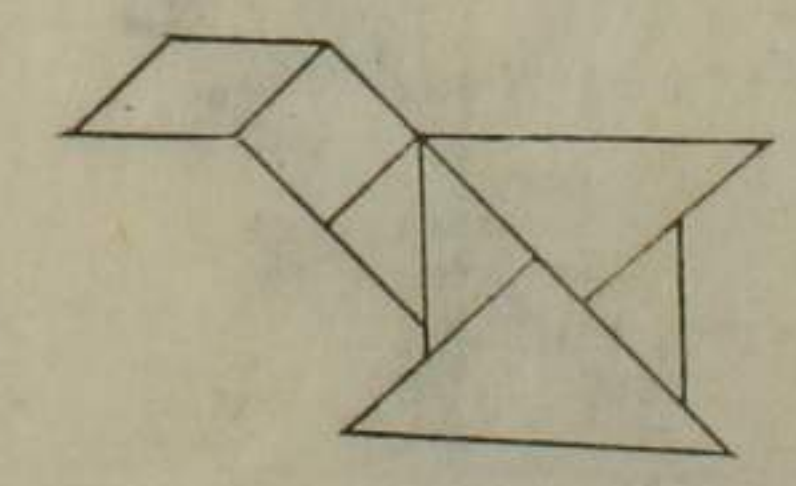
十



十一



十二



### 組木

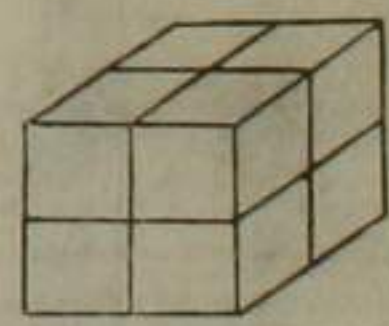
此の業は、幼稚の器物を熟視し、後よちを毀ち、毀ちて後よ再びちを修繕せんとする自然の性質は、基づき、工業の知識を誘引する一具あり、即他日土木學、建築學等の端緒たり、組木を分ちて二とちを、骰子木ちを、柝木ちを、ちを積ち、ちを重ね、諸の形狀を作らしめ、漸次熟達する不及びて、其の數を増し、或は三角形の木、或は六角形の木等を以て種々のものを作らしむべし、本文載する所の諸圖は、只大略を示せるのみ、詳細は、文部省刊行の幼稚園に就て見るべし



骰子木

保母先ッ八箇の骰子木を出  
たし、四角は積ミ重ね、立方角  
あるおとを示さべし、即第一  
圖の如し、次きよ上の四箇を  
取りて、下の四箇は列めらる  
と、第二圖の如くし、さておれ  
何の形は似たりやと問ふ  
幼稚各其所見は就き、或は  
板は似たり、或は床は似たり

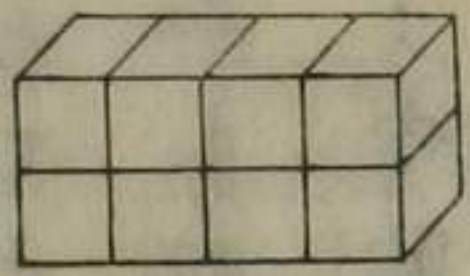
第一圖



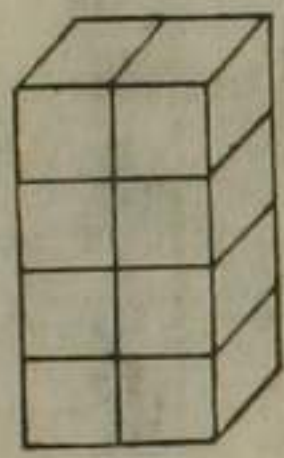
第二圖



第三圖



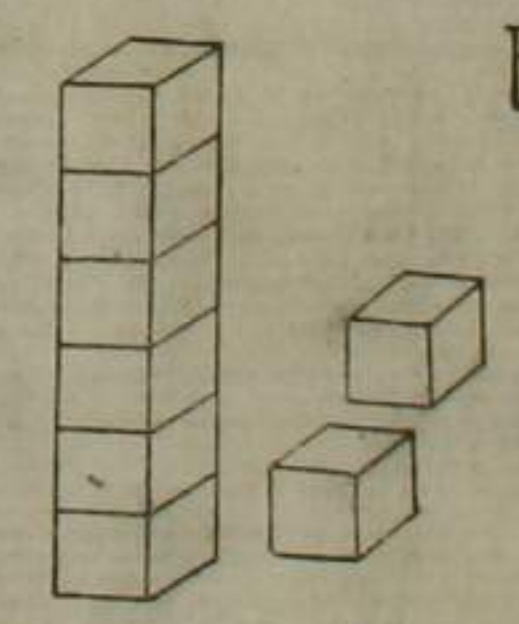
第四圖



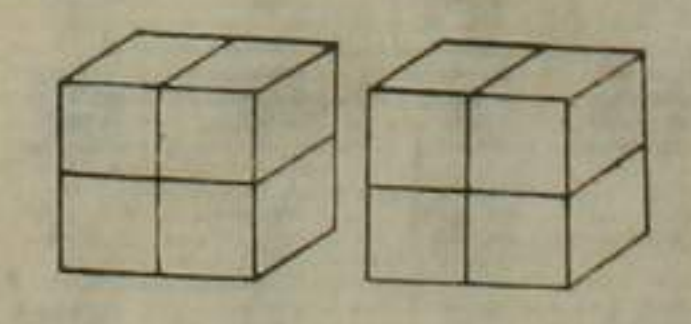
かど答へしめ、更は板は何の  
板は似たりや床は、何の床は  
似たりやると問ひ、其の答は  
對し詳細は解きあらしを  
せべし、○第三圖の如くあら  
べて、おれ何の形あるや、恰  
石垣の如く、高きや、低きや、短  
き、長きを問ひ、各自は答  
をかきしめ、其の解きあらし  
をさしべし、○第四圖の如く

あつて、おの石垣ハ高く堅固ありや、又崩れやまきや、又石垣ハ何の爲め設くるやを問ひ、各自答をあさしめ詳細解き明さべし、○第五圖の如く重ねて、おの何の形も似たるやを問ひ、柱も似たまと言ひ、寺院の柱も學校の柱も、何處も此の如き柱を見たりやを問ひ、さてお

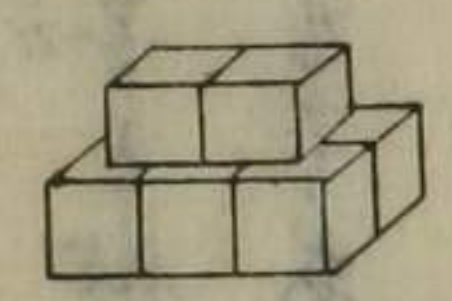
第五圖



第六圖

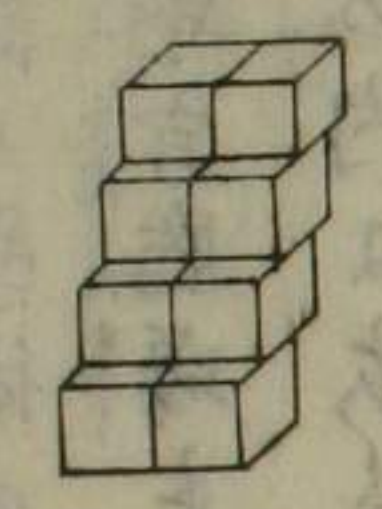


第七圖



の柱ハ何の爲め建つものなるや、家根を支ふるものあるの棟梁を支ふるものあるを問ふべし、○第六圖の如く組立て、おの何の形も似たるや、家の入口の兩側にある石垣も似たる、此の石垣ハ堅固ありや、否を問ふべし、○第七圖の如く組立て、おの椅子も似たる、おの上は腰

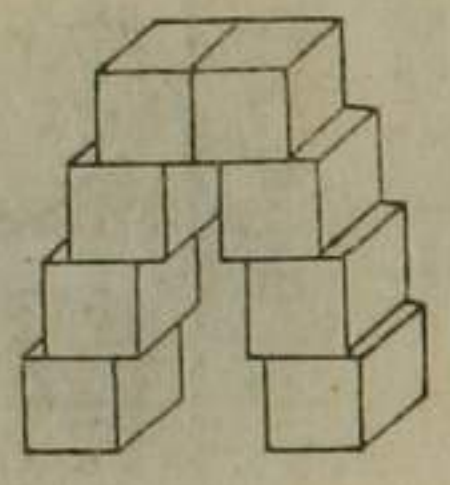
第八圖



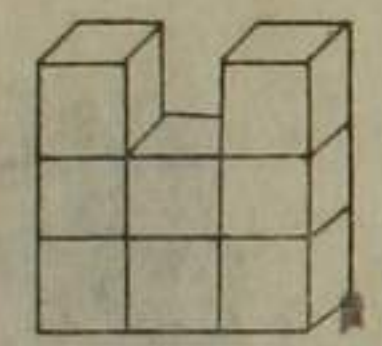
をのくるゝ、誰ちりや、父あるゝ、母あるゝ、否演説家ある  
 べし、演説の、學術の演説の、政治の演説の、政治の演説の  
 らの、警察官臨場をべし、○第八圖の如く組をあげて、お  
 れの家の内にある要用のりのあり、さて何するや、二階  
 の階子あるべし、家の昇口あるべし、あど答へしめ、階子  
 の邊の圓まの宜しき、直角あるの宜しき、又木の階  
 子と、石の階子と何するよろしきや、石あるゝ、腐朽の患  
 あちきとも、もくあやまちておつゝ、時の、負傷しやせし、  
 木かれ、さしたる負傷もあるやとありふ、されど、腐  
 き又、毀れやせきあり、○第九第十漸次は組を合せ

て、問ひをねおし、又解きあるをべし、其の詳細の問ひ又  
 解きあるの如き、ゆせよを實地にあるされば、ちよ  
 ちと能はざるを、今只其の大略を記するのこ、保母た  
 る者、よろしく注意をべし、

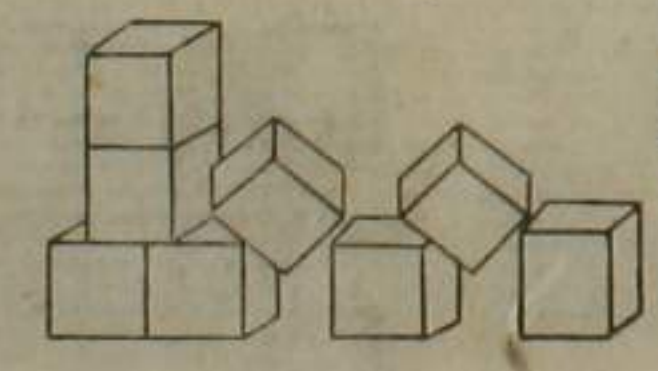
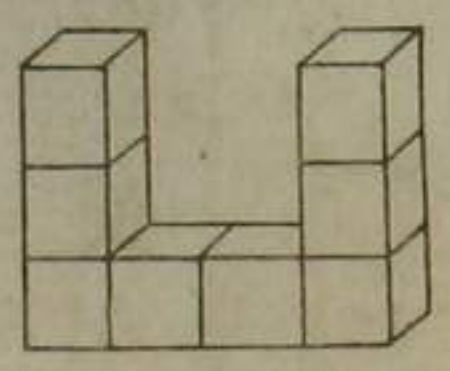
第九圖



第十圖

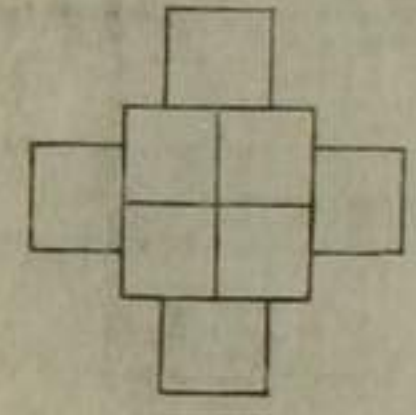


第十一圖

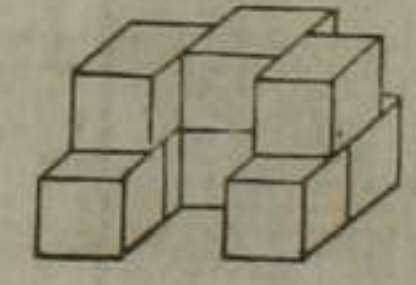




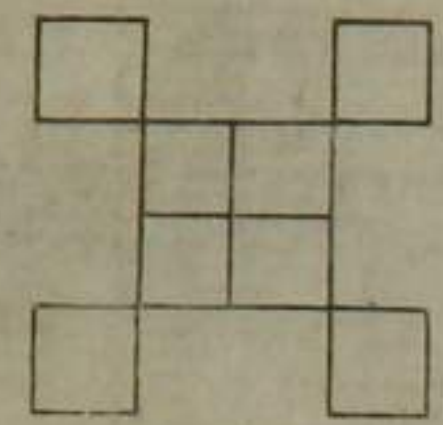
第十二圖



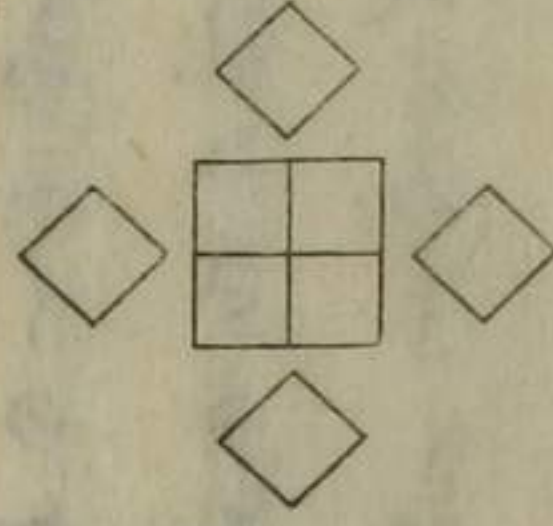
第十三圖



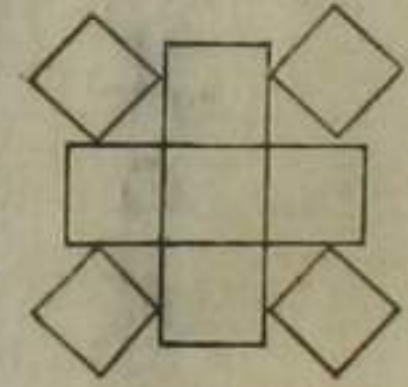
第十四圖



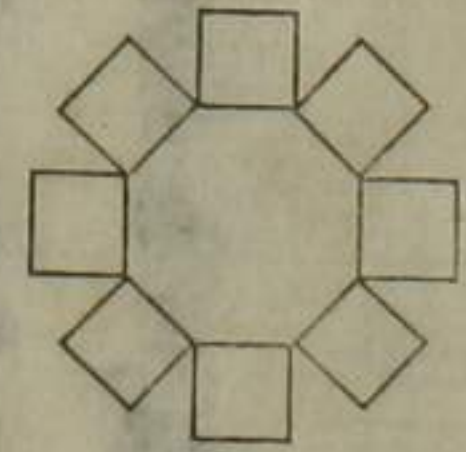
第十五圖



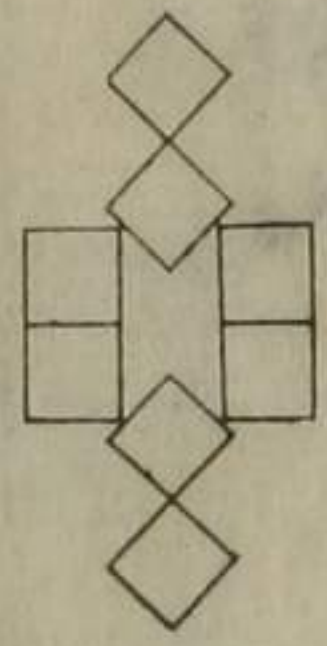
第十六圖



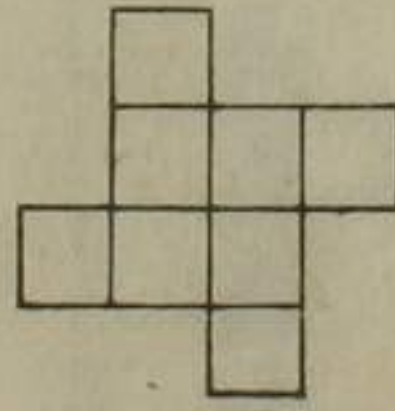
第十七圖



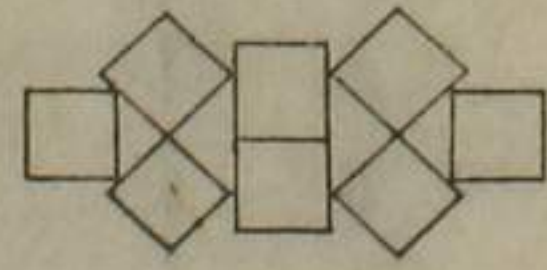
第十八圖



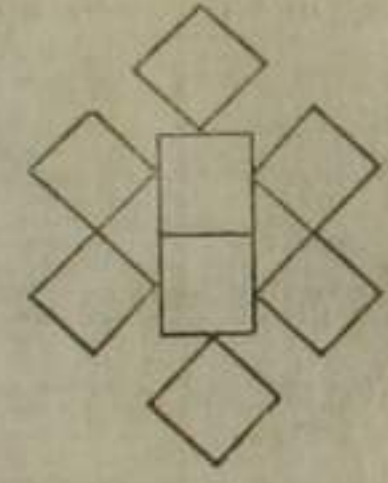
第十九圖



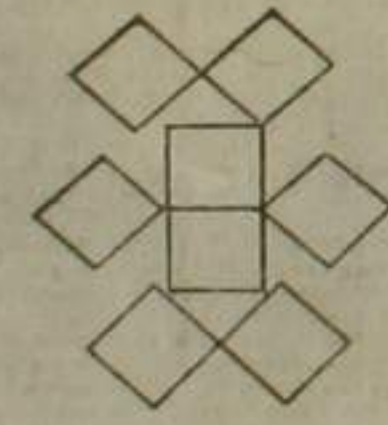
第二十圖



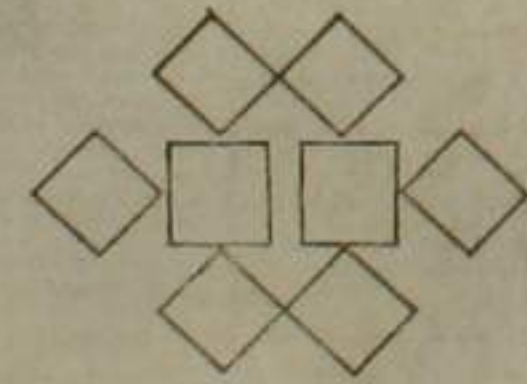
第二十一圖



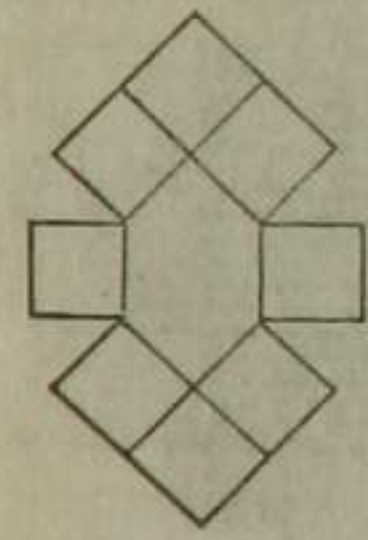
第二十二圖



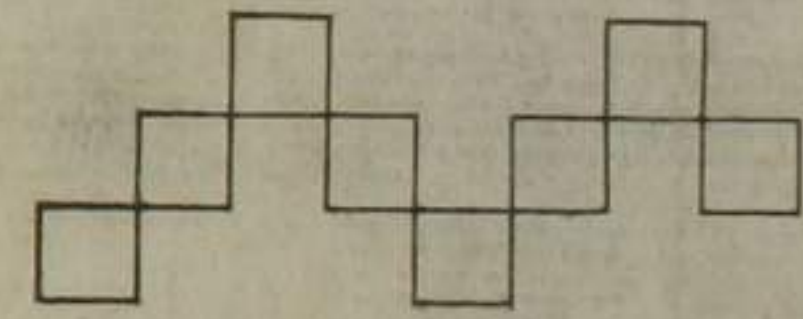
第二十三圖



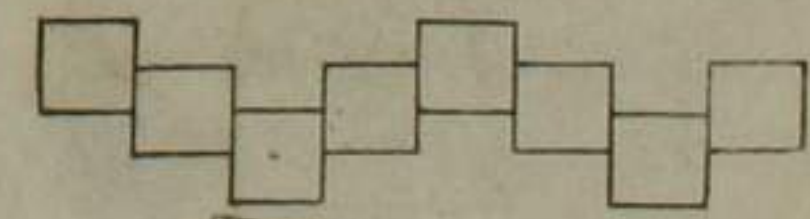
第廿四圖



第廿五圖



第廿六圖



柝木

此の玩器ハ、立方形の木片四枚を重ねて、縦又斷ちた

るものみして、即八箇の柝木形あり、其の木料ハ組木

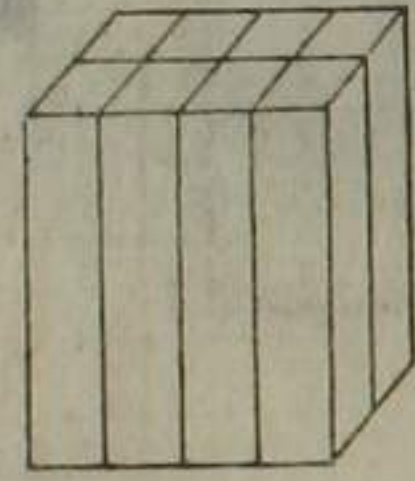
と同しく厚朴及び櫻あど宜し、

保母先ッ柝木八箇を取り、其の形の骰子木又去とある

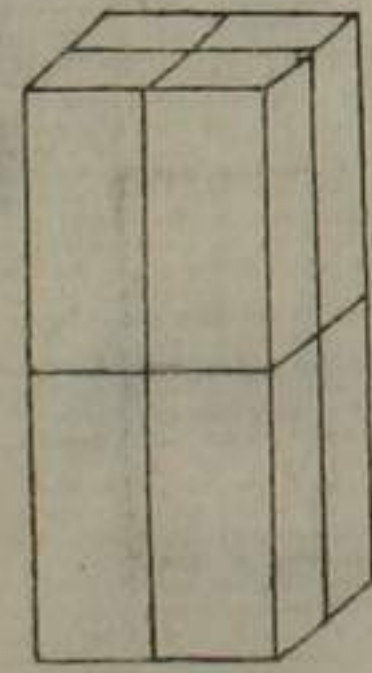
ことを示し或ハ立方形又あつべ、或ハ長方形又あつべ、

漸次又導きて前の如く諸の物形を作らむべし、

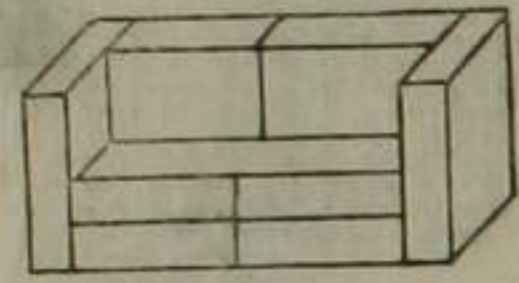
第一圖



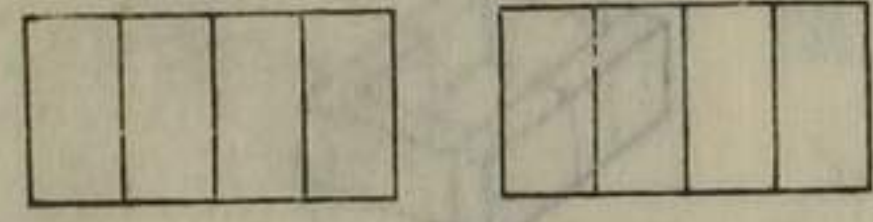
第二圖



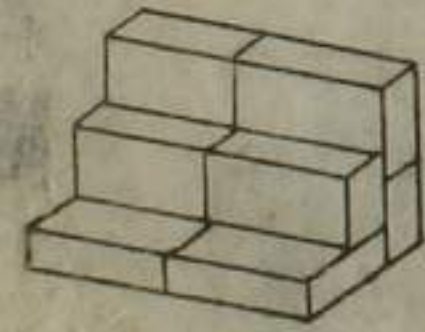
圖十第



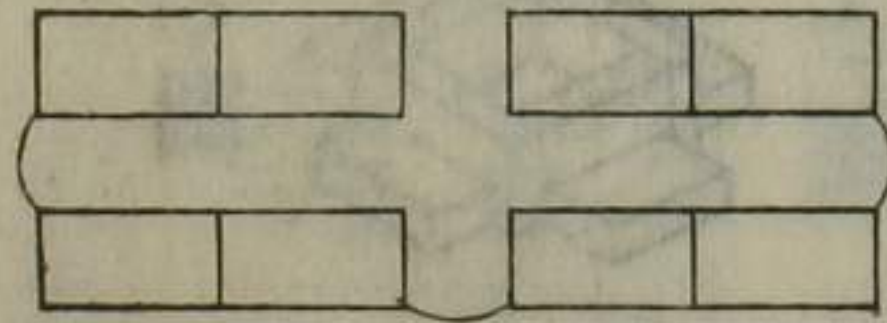
圖七第



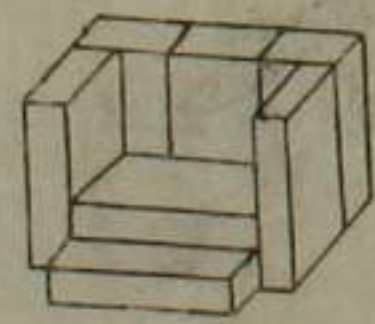
圖一十第



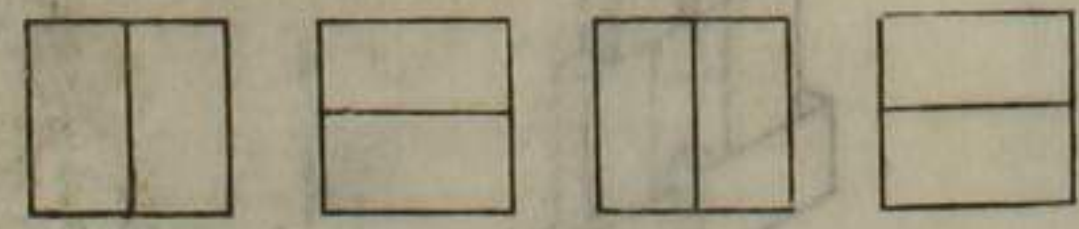
圖八第



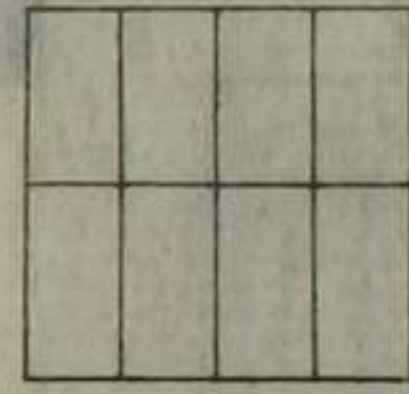
圖二十第



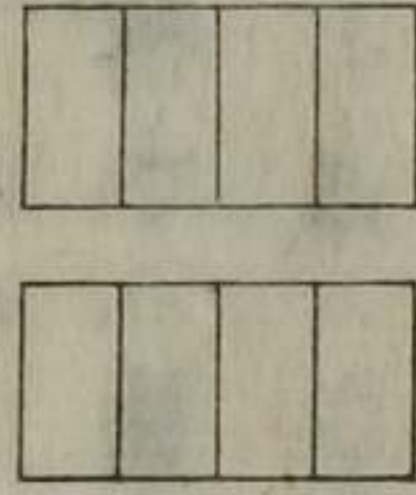
圖九第



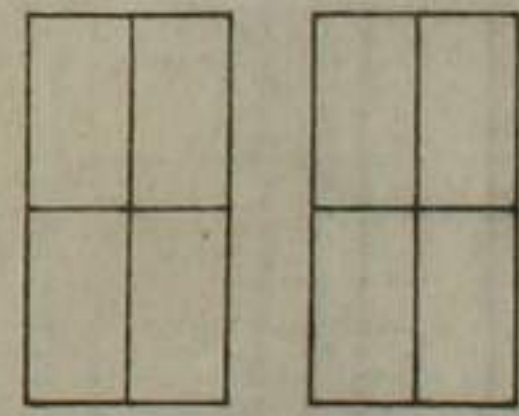
第三圖



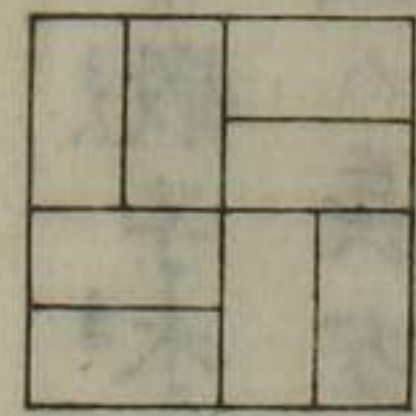
第五圖



第四圖



第六圖

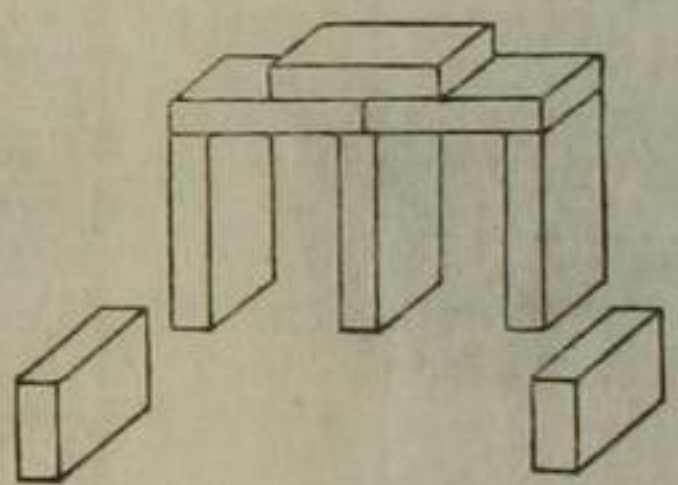


Handwritten Japanese text in vertical columns, likely describing the diagrams or construction techniques. The text is partially obscured by the diagrams.

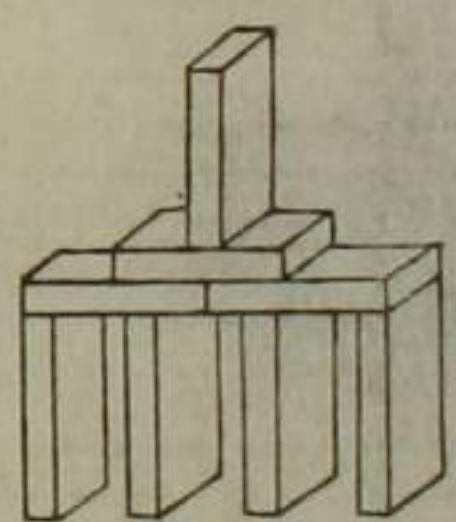
Handwritten Japanese text in vertical columns, likely describing the diagrams or construction techniques. The text is partially obscured by the diagrams.

幻術圖初卷

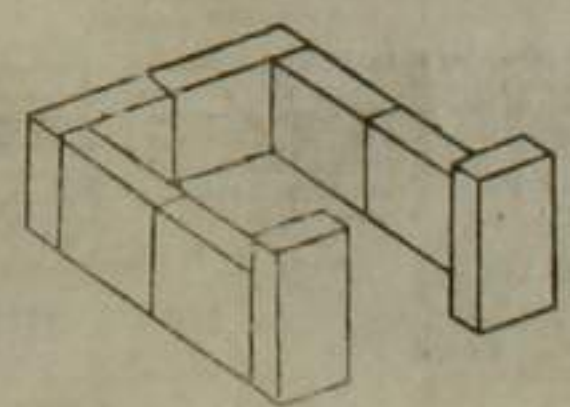
第十三圖



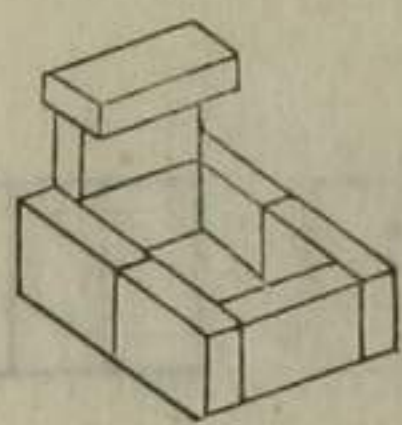
第十四圖



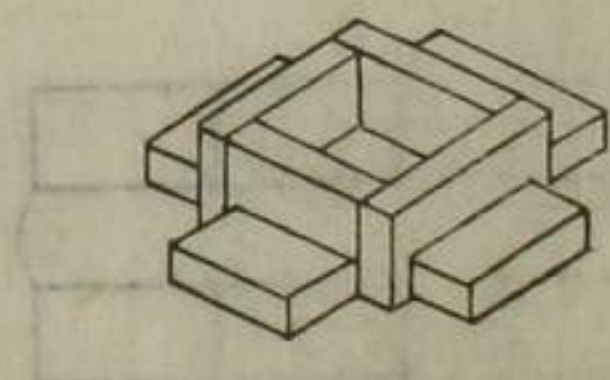
第十五圖



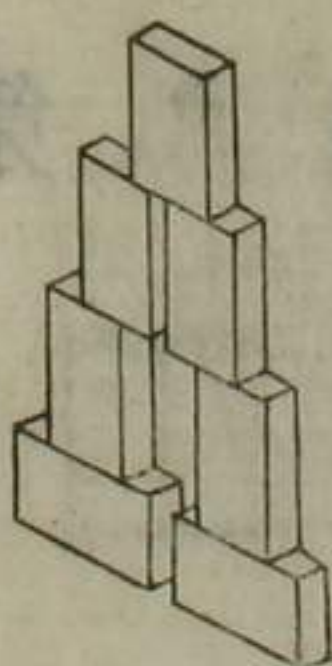
第十六圖



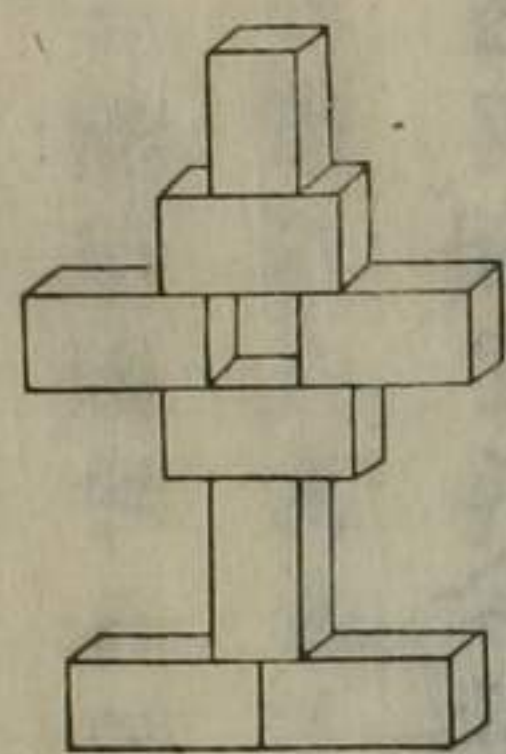
第十七圖



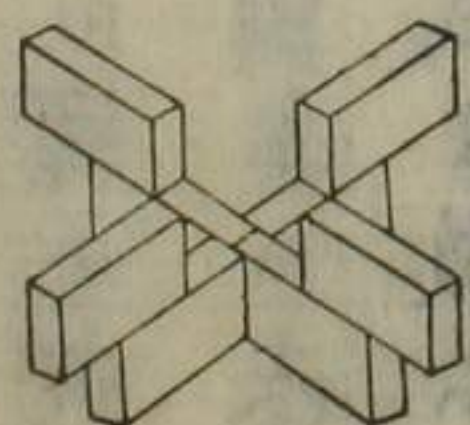
第十八圖



第十九圖



第二十圖



幼雅圖初卷

卷一

體操

此の業ハ、幼稚保育中の最肝要あるものにして、即身體の健康を保養する一術あり、此の業をせむれば、身體の筋力を増し、飲食の消化を助る、血液の順環を補ふあり、さうとて幼稚より多き體操をせむべし、唯其の身體は適當せる、輕易の運動を要すべし、歐米の幼稚園中ハ、各其の國の風俗よりとづきて、種々の體操式あり、我國ハ、未だ完全の式ありざるあり、因りて今歐米の式を倣ふ、

幼稚を體操所ニ集め、先ツ身幹の長短を閲し、長よきを

しめて一列ニ駢立せしめ、氣を著すの號令ありて、各自は

第一圖の如き體勢をせむべし、右の如く左傍より

一二三四、一二三四、と順次ニ數字を稱へしめ、又距離を

取きの號令ありて二四のもの前へ進むと二歩

あしして止まり、第二圖第三圖の如く順を追ひ、舉

動をせむべし、但舉動の節々一二三と高聲ニ數字

を稱ふるを要す、

第一圖



第二圖 一節



二節

第三圖 一節



二節

第四圖 一節



二節

第五圖 一節



二節

三節

第六圖 一節



二節



三節



第七圖 一節



二節



第八圖 一節

左右共  
行ふべし



二節



第九圖 一節 同上



二節



第十圖 一節 同上



二節



此の他猶多しと雖、略せ、さておの體操をおとす注意せ  
べきと、數條あり、即食事の前後直よおとすを行ふあり、  
又適度よおとすを行ふと、又密閉せし室内にて

行ふと、又氣候不順なる地にて行ふあり、おと皆却て健康を害するあり、

前條の如く諸体操を終りたるは、更ニ幼稚を以て各自隨意ニ散歩せしめ或ハ目おくく或ハかけくちかど行おへむへ、されど運動適度ニ過ぐべし、おのて保母氣を著けの號令を發し、幼稚を整列せしめ、再び一二三四の數字を稱へしめて、後ニ解散せしむべし、



第一圖 一歩四上

二歩

### 唱歌

此の業ハ、體操とおるべく、幼稚園中欠くべからざる一科あり、既ニ體操あり、唱歌あり、あるべし、唱歌あり、音樂あり、あるべし、音樂唱歌又據りて、體操をおまへ、歐米諸國の通例あり、我國おも音樂唱歌あり、されど其の調、其の歌、大抵鄙俚ニ涉りて幼稚保育の料とおまへ、その多し、因りて近來文部省におきて、新ニ音樂唱歌を作り以て小學の一科とせり、今其の中ニ就き、前條の業をおまへ、適當せるもの、一二を録して、左ニ載せ、詳細ハ、同省刊

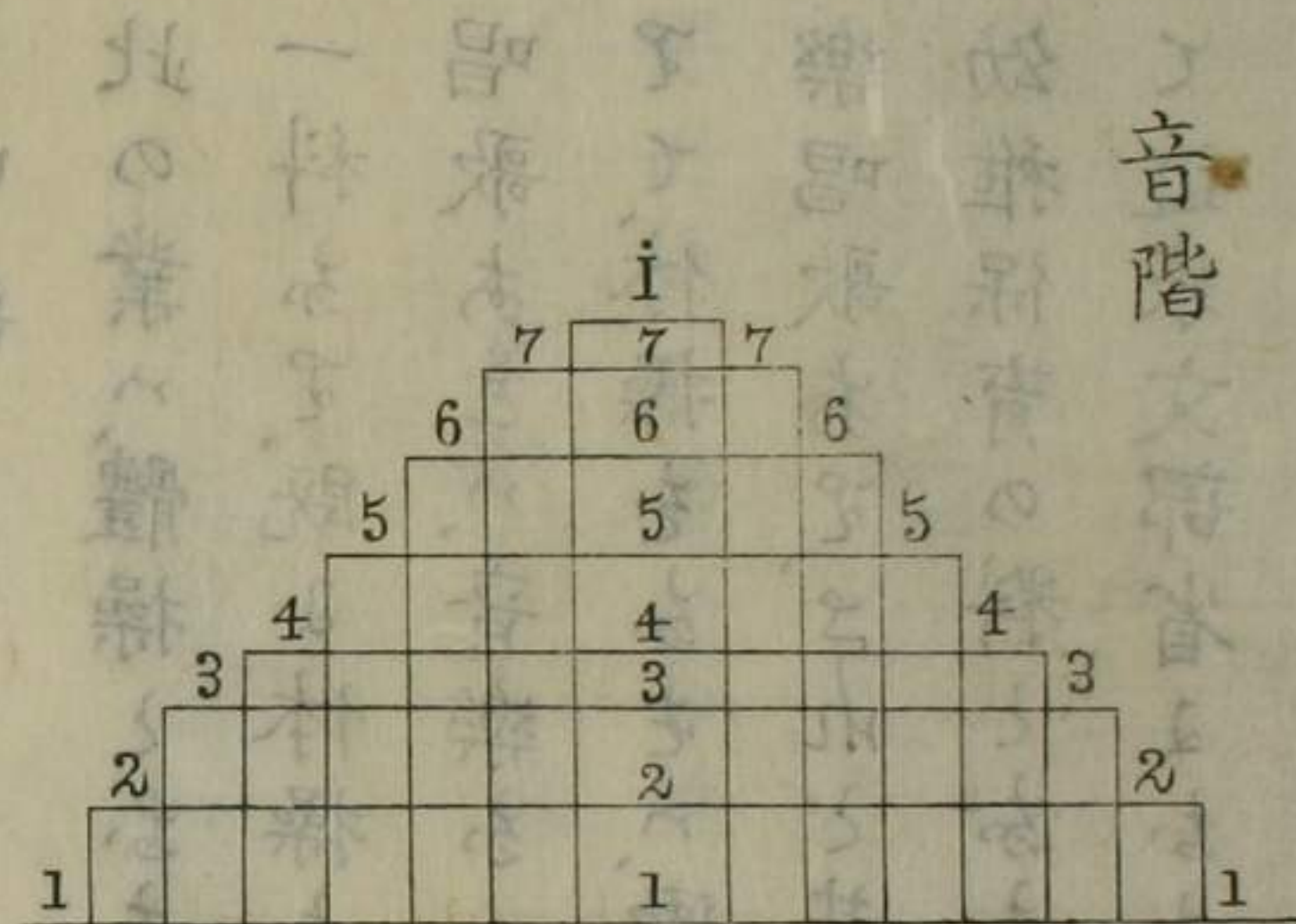


師	生	師	生
123	123	321	321
132	132	231	231
135	135	531	531
146	146	641	641
1355	135	1355	135
1313	531	5313	531

1	ハ
2	イ
3	ウ
4	エ
5	オ
6	カ
7	ク

1 — 〇 =  
 1 — p =  
 2 — p =  
 1 — p =  
 4

行の小學唱歌集に就きて、見るべき、



音階練習

- ① 1.2-21-② 1.2.3-3.2.1-③ 1.2,3,4-4,3,2,1-
- ④ 1.2,3,4,5-5,4,3,2,1-⑤ 1,2,3,4,5,6-6,5,4,3,2,1-
- ⑥ 1234567i ⑦ 17654321-

① かるき。みるへ。そのふのさくら。  
 ② とおき。やどれ。ちくこのゆる。  
 ③ ちねき。かひき。野ちくのまき。  
 ④ あけよ。たてよ。かは瀬のちどぞ。  
 ① ちるハ。ちあ見。みよりのあむろ。  
 ③ あまひ。つき見。さ〜〜あおくら。

幼雅園切歩巻一

1, 2, 3 | 1, 2, 3 | 2, 3, 2, 1 | 3, 2, 1 | 1, 3, 2 | 2, 1, 3 | 2, 2, 3 | 1, 2, 3, 1 ||

1, 3, 5 | 1, 3, 5 | 1, 4, 6 | 1, 4, 6 | 6, 4, 1 | 6, 4, 1 | 5, 3, 1 | 5, 3, 1 ||

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12

1 カ マ レ ニ ホ ヘ ソ ノ サ ク ラ  
2 ど ま れ や ど れ ち く の ま き

3 4 5 6 7 8 9 10 11 12

3 マ 子 ケ ナ ヒ ケ ノ ハ ラ ノ ス ス キ  
4 あ け よ た て よ の は せ の ち ど ぞ

2/4

ハあ ルき ハは ハつ ナき ミみ

ミぎ ヨら シし ノを オを ムぐ 口ら

幼稚園初歩卷一終



